

新
人間失格

白い便箋の中に入っていた手紙

突然茶封筒が届き、何事かと思われたことでしょう。

この文字の癖で、私が誰かがおわかりになると思います。

三度ほどお手紙のやり取りをしたことがありましたね。

中に入っているノートは、あなたに読んでいただきたく、私の最後の独白を送らせていただきました。

私は生きることや、人間であるということに、疲れ果ててしまいました。あなたにあのようなアドバイスをした手前、本当に申し訳ありません。

ご迷惑とは思いますが、不愉快であるならば破棄していただいてもかまいません。

私には信頼できる知人がいないものですから、悩みぬいたあげく、受け取ってもらう人物があなたしか思い浮かびませんでした。

あなたは私が残した最後の希望です。

そのあなたの手にかかるのですから、どうこのノートを扱おうと、お恨みすることはありません。

あなたは自らの力で生へと這い上がられた。自分のために一生懸命生きようとしたのです。そしてこれからも生きていこうとするはずです。きっとあなたは人のために生きていける人間になるに違いありません。

私は絶望でも死でもない、虚無の世界へと落ちてしまいました。

これはもはや涅槃の境地とも言えない、刹那と刹那の狭間にある、人間が、いえ、もしかしたら万物が最も根源的に持っている深遠なのかもしれません。

その見ることのない、瞬時に流れて感じるはずもない狭間に静止してしまっただけです。これは生きようとするもの、ましてや存在しようとするものが決して辿りついてはいけな場所です。

私はとめどなく広がりえる闇よりも暗い、その台風の目のような穏やかな中心点に放り投げられたのです。

人を断ずる気はありません。

裁くなど、もってのほかなのです。

ですから私だけが一身に世界のあらゆる罪や憎しみを背負って、消えていけたらどれほど私のような人に不幸を与え続ける悲しい人間を生まずに済むことかと何度も思いました。

しかし、人は未来永劫、生まれ持った宿命から逃れることなどできようはずもありません。

人間社会の中で個が、集団同士が、あるがままに受け入れることをせず、双方の欲望が比例して高まってくると、たちまち相容れないことが顕著となって争いが生じる。永遠に人はこのことを繰り返すのです。我欲ゆえに意志ゆえに、「我」に捉われ、滅びるのです。どのような崇高な理由があろうとも、それは「理由付け」に他ならないのです。

集団の中で、無抵抗に徹し、意図なく起こる、罪の本質的実体とは、人間の宿命的罪とは何かを考える時、極限の無抵抗、つまりは争いを避けるために集の中で孤立したとしても、やがては追い込まれ、ささやかな抵抗でさえ罪になりえるし、逆ならばと発起し、無垢の信頼心を捧げ、その身を捧げようとも、抵抗しなかったがゆえに何者かの罪になり得る発端なのだとしたら、人にとって生まれたこと自体が罪になりえるわけです。孤独になることでさえ、裏切りという罪が生じる。人の思いゆえ。「理解」の本質が、利己的ゆえ。我々は「価値観」や「思想」などという邪魔臭い理由付けの中で、互いを忌み嫌いあっている。生きていくことは呪縛であり、悪夢の

ようにも感じますが、文明も、思想も、今や「機械的」になっているだけで、血が通うようには感じなくなってしまいました。心が虚無へと落ちたのです。

本当は孤独ではないはずなのです。孤独ではないはずなのに、なぜなのでしょう。これほどまでに孤独だと感じるのは。存在があるからこそ、否定に恐怖する。その無関心さに本当は心底畏怖し、それを忘れ去るがための何かを人は必死に備え付ける。そんな暗鬱とした生の繋ぎとめに、今私はどんな価値を認められるというのか。人は生まれた時から何者かと関わっているのに、まったく実現不可能な仮定にしか過ぎませんが、自然の中で、いや、この宇宙の中で、孤独となって、しかし生きるという欲望を發揮し、ささやかな抵抗を示すことは、何の意味もなさず、広大な宇宙における針の穴以下の一点、いわゆるただの塵として、力の行使にもならず、どうしようもできないほどに小さく、いかにも虚無的であるならば、つまり欲望はすべて虚無へと吸い込まれているわけです。人は人がいるゆえに、人だと認識しえる。認識があるゆえに、有があり、罪もある。集団ゆえに発生するもの。しかし最も深い感情の発端、人間存在の世界においての源は虚無にあり、それを知りながらも、生きることは無駄だとは考えず、生きていく限りの果てしない抵抗を見せるとなると、虚無から転じて生を行使しているわけで、逆説的に欲望の根源は虚無だと考えてよいし、時間の大きい流れの中ですべてが虚無に返るところを見ると、存在するということは、虚無への抵抗にも思えるわけです。罪の本質とは、人間同士の存在そのものなのです。その罪を忘れ去り、正当化しながらも、自らの利益を図るために生きようとする。その虚しさ、悲しさ。そして大きくなりすぎたそれらは、心の堤を壊し、すべてを流してしまいました。私が覗き、人間の最も奥深くにあった闇は、なおも底知れぬ虚無でありました。

欲望の根源が虚無であり、欲望が生み出した罪が、いずれは虚無へと回帰していく限り、「存在している」人間の根源はすなわち「(罪よりももっと深くて無責任な言葉。いや、この世界には「責任」などと言う言葉は厳密には存在し得ない。そしてこの部分を示す言葉もまた私は知り得ない。人間が持っている宇宙のような深遠の闇にも似ていますが、この言葉は存在していないし、人間には見つけられないだろうと思います)」

私たちは、救われることはないのです。

それなのに、救われると信じて破滅へ向かうのです。

人は自らがその内面に持っている、限りない崩壊と、どう付き合っていくのが、背負っている運命のようにも思われます。

これは人に与えられた「調和」という解決への糸口にも思えます。

人であることをやめ、塵よりも世界に満ちている世界の源に返ってゆくのは私には悪いことのように思わない。

私は人であるための、最も重要な支えを失ってしまったのです。

人は人の中で善悪を決めて、本当の罪がなんであるかにも気がつかずに、互いに傲慢を押し付けあっているに過ぎない。

最後には、塵となったものでさえも、虚無へと返ってゆくのです。

最後に、あなただけには伝えたかった。人であった頃の私を、あなたに記したかった。

それが私の人としての最後のはかない抵抗です。

不愉快極まりないことをあなたに押し付けたかもしれない。もしそう感じたのなら、すべてを破棄して一切を忘れてください。

あるがゆえに、生きるのです。感じるがゆえに、生きていくのです。

あなたは、私の希望です。

私のように失うことなく、お体に気をつけて、命を大切にお使い下さい。

遺書

お父様とお母様へ。

この世界からようやく去る決意ができました。

恥を忍んで生きてきましたが、いつまでも思い切りが悪く、生き残ってきてすみませんでした。

少しでも恥を知るものならば、お父様がお母様のことで私を責めた時、すぐさまその場で死ぬべきだったのだと今では思います。

なぜ、今まで決意できなかつたのだろうと、己の暗愚さと愚鈍さを恨むばかりです

私はお母様とは違って地獄に落ちるでしょう。お父様も、日々私がいなければと思いつつ、それを言えずじまいでいることはよくわかっていました。

地獄に落ちてからは、そこで今まで生き残ってしまったことを反省し続け、お父様とお母様の子として生まれてしまったことと、生涯においてご迷惑をおかけしたことを償っていくつもりでいます。

思えば、お父様にとって私は一片の自慢もできず、満座の前では蔑むようなことしか言えない、ただお父様の恥となるだけの不肖の息子でありました。

自分の息子のことを、他人に紹介するのさえ、お心を煩わせたことと思います。

お父様やお母様のご期待にもまったく沿えず、ただ失望と幻滅の繰り返しを与えるのみで、人間として一片の価値もない息子であったことを、生きていくにつれ、よく理解していきました。

わかってはおりましたが、決意をするにも何かと勇気のいることで、今になってこのようなお手紙を残しておかなければならないことをお許し下さい。

この年になるまで愚かな人生の惰性を貪っていましたこと、お父様には何度謝りましても足りないくらいです。

お母様とは、違う場所へ行きますので、直接お会いして謝ることができませんので、お母様には、深く謝っていたとお伝え下さい。

生きていて、本当に申し訳ありませんでした。

冒頭の遺書を残した彼は石田総二と言った。

私は彼のことを苗字で「石田さん」と呼ぶか親しみを込めて時折「先生」と呼んでいた。

彼の消息は以後も不明である。もしかしたら生きているのかもしれないが、現場のビニール袋に包まれた「遺書」の文字と本籍の書かれた封筒には、冒頭のように短めに書かれていた。同時に入水したと思われる女性の遺書は発見されず、女性の遺体だけが引き上げられた。その後、女性の自宅から発見された日記から、「彼が死ぬなら私も一緒に死ぬ。彼がいなければ、どうやって生きていけばいいのかわからない」との記述が見つかったため、彼女が自殺する要因は、すなわち彼の自殺と考えるのが妥当だった。太平洋側のとある海に飛び込んだ彼は、恐らく沖に流されて消えていったのだろうと推測される。

この事件は、地方新聞の小さな記事にしかならず、滅多に起こらない暗い事件だったため、地元では眉をひそめる者もいたという。当然だろう。

その女性の家には男物のシェービング用品や衣類などが見つかったため、同棲していたことは明らかで、彼の様子もつぶさに理解していただろうし、彼が死のうとしていることも充分わかっていたように考えられる。

12月の下旬にさしかかろうとしていた頃、彼女は睡眠薬を飲んで冷たい海に身を投げ、生涯を終えた。彼も同じように飛び込んだならば生きてはいられない。

彼女の遺体は死後すぐ発見され、穏やかな顔をしていたということだから、海の中で眠りながら楽に死んでいったのだろう。

私が彼の死を知ったのが、事件からまるまる一年近くもたった十一月のことだった。知り合い伝いで彼の死を知り、腑に落ちないものが数多く残り、死への疑問が大きくなっていくのは時間のかかることではなかった。

東京のとあるバーで出会った彼には、死を考えているような沈うつさはなく、いつもおどけていてユーモアがあった。

いつも切なげとも言える優しい微笑をたたえていたような気がするが、雰囲気だけで顔はよく思い出せない。見かけるときは随分と酔っている時ばかりだったような気がする。

少なくとも私が感じた限りでは、死を自ら進んで決意するタイプだとは思えなかった。

ただ、笑顔の奥に、ふとした重い瞳を地の一点へ向けることがあった。なんと表現すればよいのだろうか、あの瞳はまるで穴が開いたように瞳の向こうに闇を灯していた。その瞳だけは見えて不安になったことがある。

私は私の中で膨れ上がる疑問に突き動かされ、彼の死をどうしても知りたくなった。私は彼の言ってくれた言葉で救われ、彼の言葉を思い出しながらここまで成長できたのだから余計に知りたかったのだ。

いや、たとえ私に言ってくれた言葉が何かの受け売りでもいい。私に対する偽りの愛嬌であってもいい。そのような言葉でも、私に「希望は伝わっていく。幸せも伝わっていく。幸福は自分のあらゆる状況に感謝することで手に入れることができる。向き合うことだよ。そこからようやく自分を好きになる力を持って、他人を好きになれる。笑顔や幸せを分け与えられる」と言ってくれたことは、これからも生涯の活力になっていくことは間違いなかった。例えそれが自棄酒や酔狂の果てであっても。

なぜ彼がその言葉を見失わなければならなかったのか。もしくは、なぜ彼がその言葉を信じぬ

くことができなかつたのか。私の中で、どうしても解決したかつた。

そしてようやくとある女性のところにあつた彼が書き残した手紙と大学ノートにたどり着くことができた。運よく彼が自作の詩を書き残していたコミュニティーサイトから彼女へとたどり着くことができた。

彼の大学ノートを持っていた女性は彼とインターネットの掲示板で六年前に出会つたそうだ。

その女性の名前をYさんとする。

当時Yさんは職場での人間関係に疲れ、仕事も解雇され、そのストレスの延長で婚約者の彼氏ともこじれた。結婚のことは、彼女の生涯夢見た希望そのものだけだただけに衝撃も大きく、そのまま失意の底へと落ちて行き、長らく立ち直ることも出来ずに友だちも財産も少しずつ失つていった。やがてすべてを失つたYさんは生きる気力もなく自殺を考えていた。そして最後に独白しようと思ひ相談サイトの掲示板に書き込んだのがきっかけで、彼はそれから二ヶ月間の間親身になって私生活にまで細かな助言をしながら携帯やインターネットを使って相談に乗ってくれたと言う。

長い記述のノートだったので一度拝借することにしたのだが、ノートには二枚の写真も挟まれていた。その一枚は一度捨てようと思つたのか、くしゃくしゃにされて伸ばされていた。二枚の写真はあまりにも対照的で、同一人物が写っているとは思えないほどだつた。

綺麗な写真のほうは普通に写っている。ごく平凡とも言つていい証明写真のような当たり障りのないもので特に印象も残らない。目を離せば、どういう顔だつたのか忘れてしまいそうなほどだ。

しかしもう一方のくしゃくしゃにされた写真はひどく見る者を不愉快にさせた。部屋の中で写っているが、誰が映したのかカメラ正面から顔を背けようとしながらも無理に笑っている。そのせいで左頬が妙につりあがり、ひどく人をあざけ笑っているようにも引きつっているようにも見える。前の写真とは打つて変わり、やつれあがつてこけている。目は陰鬱で焦点が合つておらず、顔のゆがみ具合が泣いているようにも落ち込んでいるようにも見える。昼間の明るいはずの部屋なのだが、光の当たり具合で顔のおうつがはっきりとして、影の中にいるようで生気が感じられず、顔面は蒼白で目の下にはどす黒いクマもある。それは奇妙で捉えどころがなく、じつと見るのも気持ち悪くなつてきそう顔で顔を背けたくなる。理解すら受け付けずに人に吐き気を催させるような写真だつた。歪みきつたものがそこには写つていた。

このような写真を入れておかなければならないと判断した彼の心境が、ノートを見る前は私にはわかりかねた。しかしよく考えてみれば、なぜここまでならなければいけなかつたのかという疑問が浮かんだ。もしかしたらノートの中に答えが書いてあるかもしれないと思ひ、なおのことノートの内容が気になつた。

大学ノートと一緒に同封されていた、白い便箋の中に入っている彼の「真の遺書」とも言えるべき手紙を読んでみた。彼の素直な心境を綴つたものだろうが、私にはまったく理解できなかつた。いや、理解しなくてもよいことなのかもしれない。

その日私はYさんの家からおいとまして遺書とノートを借り受け宿泊先のホテルに戻り、時間をかけてゆっくりと彼の記録を読み出した。

恥の多い生涯でした。

人間の生活というものがわからずに生きてきました。

生きているのが申し訳ないと思い、今まで生きてきました。

私は幸せな家庭で育ったと皆が言います。一家の長男として生まれ、一人っ子で両親の深い愛情に包まれて育ったと皆言います。何不自由ない生活だと。

私が一言でも不平を言おうものなら、眉をひそめられ、逆に叱責されました。育ててもらっているのに、なんという言い草だと。親になってみなければ、親がどれだけ苦労しているか、その気持ちなんてわからないと。拳句の果てには、外国の例を持ち出して、貧困や戦争と私の生活を比較して、あなたはこれだけ幸福なのだからと言われました。

「総二くんのような幸せな生活を送っている人なんていないんだよ。なんでも与えられて、学校にも行かせてもらって、全部親のお金で養ってもらっているんだよ」

「誰々のお金（または行為）」という表現は子供心ながら、その期待に寸分の間もなく埋めて、なお余りあるくらいお返ししなければならない、もしそこに針の穴ほどの隙間でもあれば、それを与えた者を、ひどく失望させて怒らせてしまうのだと、漠然とした恐れを抱かせました。

不幸や幸福とは、いまだに私にとってわからない価値観です。何かと比較して、その優劣を論じるものなのでしょうか。私が幸福か不幸かを感じるのに、私の気持ちを置き去りにして、他人が常に決めていくのでしょうか。いえ、きっとしょうがないのでしょうか。どこへ行っても、人は何かと比べなければ気がすまないのですから。そして人は過去のあらゆるものと目の前のものとを比較しだすのです。自分もその例外ではありませんでした。

私の両親を悪く言うものは、外には誰一人としていませんでした。まるで私だけが人の気持ちもわからない恩知らずであり、感謝をひとつもせず、親の気持ちや苦労が何ひとつわからない畜生のような存在のように思いました。

父からもよく「与えられるだけの生活をしているからお前はダメになったんだ」と言われました。

母も時折「お父さんが稼いで来てくれるからちゃんと生活していけるんだよ。感謝しなさい」と言っていました。

親の苦労がわからないほど恵まれた環境で生まれ育ったからこそ、なおさら人は幸福であると見たのでしょうか。幸福な環境で文句も言える、なんといい身分なのだと、皮肉もあったかもしれません。

私は、千葉県船橋市で生まれたと聞いています。当然、赤子の頃や幼い頃の記憶があるわけではなく、すべては他の方から聞いたことです。

母の陣痛が始まってから、私はなかなか生まれてこなかったと聞いています。それだけに母の愛情も思い入れも大変深いものであったに違いありません。（「違いありません」などと他人事のように書いてしまうような箇所がこれから先、何度もあるように思いますが、私がもはや他人のぬくもりや感情などを深く慮る存在ではなく、人間の核となる魂は限りなく虚無の底へ沈んでいっているということを事前に伝えておきます。封筒を入れておきましたので、私の気持ちはすべて中の便箋へと込めておきました）

私が生まれ、ベビーベッドに寝かされている時、父は引き剥がそうとしても離れないくらい、

べったりと私の側にいて、飽くことなく眺めていたようです。父の人生において、最大の幸福であった瞬間に違いありません。

両親とも自分たちの幸福を思い、私の輝きに満ちた将来をあふれんばかりに思い描いたに違いありません。幸福な結婚をした夫婦というものは、誰しも子供の将来に自らが描いた幸福の姿を重ね見て、「きっとこういう子に育つに違いない」「立派な子供に育ててみせる」と胸を躍らせることだろうと思います。そしてきっと自分たちの思い通りの幸せが子供と自分たちに訪れることを夢想することでしょう。その将来に「裏切り」は存在しないのだと。

私の記憶が強く始まるのは、中学生の時からです。それ以前の記憶と言うものは、あまりにもおぼろげで、断片的過ぎるのです。

この「あまり思い出せない時期」が、私の一番幸福な時期であったと思うのです。人は幸福ほど忘れ去りやすいのですから。人が幸福を思い出す瞬間は、いつも多少なりとも不幸を感じた時でしょう。そして人は、また比較しだすのです。「あの頃は幸せだった」と。

私は他人が子供の頃の一場面を鮮明に覚えていることに対して、とても悲しい気持ちを覚えるのです。なぜ私は覚えていないのか、子供の頃の思い出はあるはずなのに、中学以降の悲しい記憶ばかりが強く思い出されるのです。そして私はほとんど誰にも自分の秘密を打ち明けることがありませんでした。少しでも話そうものなら、他人は私を断罪します。そして叱責し、見下し、「自分よりもはるかに劣る存在だ」と安心しながら、狡猾な優しさを私に向けるのです。それでいて他人は「自分しかお前に同情してやるやつはいない」と言わんとばかりに私のことを、助平心を丸出しにしたような執拗さで聞きたがるのです。私は心に秘めた下劣さを誰かに知られるのではないかしらと日々恐怖を潜ませ、その感情を誰にも気取られることのないように、心の内では、まるで狂人がギョロギョロと人を威嚇するように睨みを利かせ、人生をおぼつかない足取りで歩いていったのです。

私の祖父は、よく聞いたことがないのですが、北海道炭鉱汽船（通称北炭）の幹部クラスの間違ったと耳にしたことがあります。私が長年過ごした札幌市、北海道時代を迎えたのは、三歳か四歳の頃で、それまでは千葉県におりました。

後にゴースタウンと化した夕張を父に連れられドライブしたときに、過去をほとんどしゃべらない父が、昔話をぽつりぽつりとしだし、驚いたことを覚えています。夕張鹿鳴館と呼ばれる、皇族も呼ばれた建物の側に住んでいたとのことですから、祖父と父は、いわゆる裕福な生活をしていたのかもしれませんが、一度も詳しく私生活や過去を語ることはありませんでした。祖父も父も、仕事や極めて個人的な話になると、大変機嫌が悪くなり、「お前には関係ない」と冷たく言い放つものですから、私は幼心に恐怖を覚え、めくってはいけない黒い布で覆われた、とても戦慄すべきものがそこにあるように感じたものでした。特に父の場合は機嫌が悪いときは、私をことあるごとに否定して痛めつけるものですから、私はいつも父が恐ろしくてたまりませんでした。それでも小さな頃の辛い記憶がないものですから、私はなんとなして父に気に入られようと、あらゆる努力をしていたのだらうと思いますし、父も幸福であったと思うのです。

私たち家族が北海道の札幌市に戻ったときには、いえ、すでに私が生まれていた時点で北炭は北炭夕張新炭鉱ガス突出事故の影響で閉山しておりましたから、その事件が話題にも出ず、話題にすら出すことが憚られたのでしようし、子供に聞かせる話ではなかったのだらうと思いますが、一度も耳にすることはなく、小学生にもなっていない私が大人の事情などを知ることはまったくありませんでした。

後に文献を読んだ限り、炭鉱事故は生き埋めという手段で解決を試みたのですから「無残」の一言に尽きますが、本当に私は何も知らず、祖父が石炭事業に関わっていたことや、呪いの言葉

すら吐かれていただろうことも知らなかったのです。もしかしたら、私が知らない、償うべき罪があったのかもしれませんが、幼い頃は何かに不自由したり、不愉快になった思い出がありませんでした。

石炭事業に関わっていたせいなのでしょうが、祖父がお金を持っていることは子供の私でもよくわかりました。普通の祖父ならば孫につい甘くなってしまいがちなのは、どの家も同じようで、祖父からは物を随分買い与えられたように記憶しております。

幼い頃で、あと私が覚えていることと言ったら、毎年正月過ぎ、生まれる前に亡くなった祖母の命日なのですが、親戚の方々が集まって宴会のように、楽しく過ごしていたことで、その日ばかりはとても豪勢で、揃えられたたくさんの料理と酒に舌鼓を打っていました。

私はその席では、子供の特権なのでしょうか、とてもかわいがられたことを覚えています。子供というのは、その新鮮な感受性から、とても狡猾に大人になすりよって生きていくものなのですが、私よりはるかに年上の「大人」と呼ばれる人たちと関わり、「どのようにすれば気に入られるか」ということが、とてもよくわかっていたように思います。これは人が「おべっか」や「愛嬌」などと呼ぶ、人との関係を円滑にするための知恵ですから、その当時ただ仲良くして、ちやほやされるのが嬉しく、少しもそれが大人になってからの悪徳や卑劣な道化になろうとは思いませんでした。

私は宴会ではいつも褒められており、冬場には珍しい温室メロンなどが出された時などは、「おいしいから総二ちゃんも食べなさい。たくさん食べていいからね」

との笑顔の親戚の言葉に、妙な警戒心を抱き、等分に切られたメロンの、真ん中の大きいところでさえも、取ってしまったのは、いけないような気がして、万が一にも言葉通りたくさん食べてしまったら怒られるのではないかと、その後期待されることに余すことなく応えなければいけないのではないかとという恐怖心から、端の小さな欠片を取って食べると、いたく感動したようで、「あら、まあ、控え目で。小さいのに謙虚で立派だわ。いいんだよ。真ん中食べても」と、にこにこしながら頭を撫でてくれ、私の両親にも似たようなことを言って褒めちぎるものだから、両親とも笑顔で満足そうな顔をし、その姿を見るのが嬉しかったと記憶しています。

親戚のお世辞は走り出すと止まらず、一通り舐めるようにして続いていきます。

「素直で正直な子で、将来が楽しみだね」

「本当にかわいい子だね。総二ちゃんはみんなにかわいがられるね」

その当時は「人に気に入られる」ということが得意でしたから、ちやほやされていい思いをするには「人に気に入られること」こそ、人として価値を高めることなのだと信じていました。

「総二ちゃんは将来、何になりたいのかな？」

大人が子供によくする質問ですが、私の場合年々あれこれと変わり、消防員、警察官、公務員や野球選手などと、格好がいいと思ったもの、憧れたものを取りあえず言うと、

「そうか。総二ちゃんは凄いね。立派な職業になりたいんだね。いっぱい努力してがんばってね」

そう褒めてもらえ、なんでも夢を語る事ができ、応援してくれました。

しかし、あまりにも大げさに褒める親戚たちへ、直感的にその言葉を素直に信じられない不安感があり、その言葉も私が大人に対して使っていた「おべっか」や「愛嬌」となんら変わらないことにある日気がつき、幻滅しました。

私は大人の「その場限りの言葉」が大嫌いでした。今ですら自分が使うというのに...ああ、なんということなのでしょう。私は知らず知らずのうちに嫌悪したものにまで染まりきっているのです。こうして大人というのは常に自己弁護していく卑怯な動物なのです。私はこのような自分の下劣な姿に気がつくときに、人が蛆虫のように、苛烈な嫌悪感を持って、私を見るのだと感じるのです。私は嘘の言葉が混じる「礼儀」とやらがいまだに理解できません。「今度遊びに行こうね」「よかったらいつでも来ていいからね。おいしいもの用意して待っているからね」。そんな気持ちなんてあろうはずがないのに言うのです。今言葉通りに甘えれば「礼儀を知らない」「人の都合を考えない」などと言われ、私の「常識感覚」を疑う声があがるでしょう。私が父に「今度の土曜日におばさんから遊ぶ電話が来るから一緒に行けない」とドライブを断ると、鼻で笑

われ「まだ大人のお世辞が総二はわからないんだな」と言い放たれました。

私はその時、上からゆっくりと踏みつけられ、押しつぶされていくような深い悲しみを感じ、「大人」という名の仮面を見たような気がしました。不審の芽はこのようにして植えつけられ、やがて成長するに従って人というものは、どのように狡猾に人を騙しえるかということを「大人の配慮」と言いながら身につけていくのです。もはや信じられませんでした。どのように思っているのかわからないのです。その笑顔の仮面の裏で、どのように激しく罵られ虐げられているのか。そしてまた自分も大人になって、見事な仮面を作り上げて人を騙し続けていくことになるのです。父もそうでしたが、私にとって「立派な人格者」というものは、いかに精巧な仮面を創り上げているのか、としか見えませんでした。

私は人と接するとき心底恐怖しました。この人はきっと私のことをあざ笑っているに違いない。なんとかして私はこれ以上嫌われないようにしなくてははいけない。そして私は思ってもみないことを口走っては、気に入られ、難を逃れるのです。

私はおべっかを使うことが大变得意となっていました。人は何かに恐怖し、追い詰められ過ぎると、信じられない力を発揮するようです。窮鼠猫を噛むかのように、私のおべっかは巧妙になっていきました。しかし後年は皮肉な形で歪んだ顔に表れ、にやけ顔を作り、道化の仮面が見るからに瓦解しているのに、なお習性で続けようとし、つぎはぎの仮面を見せ続けるという、不可解で不愉快な人間へと成り果ててしまいました。

私は小学生になった当時から勉強が大変嫌いで、しばしば母親を怒らせることがありました。私があまりにも勉強をしないために、母が激昂して奇声を上げることもあったほどです。母にそこまでのストレスを与えているにも関わらず、私の勉強嫌いは恐怖とともに加速していくばかりでした。自分はどうせできないのだ、私は「勉強」の「べの字」も理解もできずに母を怒らせるばかりだ。物事に対して「なぜだろう」と少しでも感じると、たちまち巨大な風船のように膨れ上がって、素直に覚えることを拒否するのです。私の暗記力は、相当低いもので、本に書いてあることを理解するには相当な時間を費やしました。

母の陣痛が始まって、なかなか生まれてこなかった私は、生まれた時から私の性格が出ているのでしょうか、小学一年生の時の担任が、母へと「総二くんは何をするにも人の三倍は時間がかかる」と伝えたことがあるそうです。その当時から、母にひとつの屈辱を与える子供として、今の自分の前身があったのだらうと思います。私の生涯は小学一年の担任の先生の慧眼の通りになったのかもしれませんが。やがてこの社会の流れについていくことができず、ぼんやりと人々を眺めながら、人としての何かを失っていくのですから。

私が勉強を嫌がるのと比例して、私は祖父に買い与えられた、当時の最新の家庭用ゲーム機や外で遊ぶことにのめり込んでいきました。

楽しいことや楽なことを覚えると、苦痛からとことん逃げたくなり、多少の苦痛にも拒絶反応を起こすようになり、やがて条件反射として、親から押し付けられるものは苦痛であるという意識が芽生え始めました。あらゆる「どうしてなのか」という疑問にすらも答えてくれず、話し合いもない一方的な意思に、時として大人の圧力さえかけられる不安に、私は親の望むことと反対のことをするという天邪鬼な精神を徐々に育てていったのです。子供の私には「なぜ苦痛を背負ってまで勉強をしなければならないのか」がわからなかったのです。しかし、親を怒らせることに対しても大変恐怖心を持ち、その意思に逆らったときの仕返しがいかに復讐じみたものであるか、想像するだけで震え上がり、また期待に背くことによって、いかにもがっかりしたような、悲しそうな顔を見るのがたまらなく嫌で、それこそ、この世の終わりのような気持ちも覚えるものですから、逆らうことにも抵抗を覚えていました。

私はここから矛盾を抱え始めました。「親に気に入られたい」、親から嫌われて「人間的価値をなくす」恐怖という、どうしても親に逆らえない気持ちと、条件反射的に親に従いたくない気持ちの二つを抱えて、後年、少しずつ身動きが取れなくなっていきました。意思があるようで、意思がないのです。肝心なところで、親の意思に従っていたせいなのかもしれません。どちらかを選び取ることができず、結局何も選ばず仕舞いで、どちらも背負い込み、右にも左にも行こうとしてうろろうろするだけで、やがて積み重なる問題を何もかも抱えて、どうしようもなくなってしまおうという、はたから見たら「馬鹿な行為」のようにも思えますが、「ジレンマ」と表現すると、ものの見事に「しょうがないこと」「よくあること」なのだと思われ、人を納得させられるので、言葉とは奇妙なものですが、深いジレンマに大事なことを何ひとつ決められない大人になり、流されるまま、悲劇を招くことになりました。

小学校時代は、多少の恋愛をしたことも覚えています。同じクラスの少々浅黒い活発でツンとした瞳をした人でした。当時放送していたアニメのヒロインにも似ていて、彼女の姿を重ね合わせ、日常と非日常の混ざり合いから（恋とは非日常そのものなのかもしれませんが）、恋心はどんどん加速していきました。私の片思いだったのか、両思いだったのかは、最後まで勇気を出して確認することができずに、周囲が好きだということを知っていたが卒業式を終えて、別れることになりました。当然その子も、私が好きだということは公然のうわさで知っていたはずですが。卒業式の日、ふられてでもよかったので、告白していればと淡い後悔を抱いて、思春期の甘酸っぱい楽しみに浸ることも中学の時にありました。大事なところで、いつも私は勇気を持って生きてきたのです。

今このように思い返してみれば、この時期まではまったく足を踏み外していくような要素などなかったはずですが。周囲の大人たちのように、辛辣な本心や真実を装飾した言葉で隠し、不愉快にさせない程度に自分を見せかけ、平凡に生きていくことができるように思いました。

しかし、私の人生は、中学校を境に、陰惨に変わり果てていったと思います。

人生はいつでも「思い返してみれば」ということの方が多くのように思います。愚かしいことだと思いつつも、過ぎ去った時間を取り戻すことはできず、終わりになってようやく悟ってくるのは、やはり自分のことをどうしようもなく思います。

当時、私の通う中学校は、市内の中学校の中でも、最高位の学力を誇っておりました。生徒の成績のつけ方はクラスの平均点を三として、そこからの優劣によって五を最高点とし、五段階に評価する相対評価でした。

私の学級には大手の進学塾に通う生徒が三分の一近くいて、成績を競い合っていたものですから、塾へも通わない、勉強も好きではない私の成績は常に平均以下で、そこから這い上がることは容易ではありませんでした。小学校の頃から勉強を熱心に教え込もうと力を入れてきた母親も、ことあるごとに私を責めるようになりました。特に私が点数をつけられたテストの解答用紙をよく隠したので、そのことでもよく母は怒り、やがてテストを受けることが苦痛になり、「こんな苦痛しかないテストなんてなくなればよいのだ」と常に思っていました。

テストの点数や成績が、私の怠慢や、人間としての価値の低さを露呈させ、両親が私を咎めるごとに、価値のなさをますます裏打ちしているようで、やがてテストという奇妙な価値基準に対して、諦観にも似た沈鬱さを抱え、親に嫌われる、自分の価値がなくなると背筋を凍らせながらも、クラスの仲間を見るに、どうせ無理だ、どれほどがんばって点数がよくなろうと、結局は成績が悪ければ同じことだし、母も認めてくれないと、やり場のない焦燥と憤りを覚えるようになりましたが、やはり危機感から机に向かったりはするものの、やる気がおきず、それでも奮起して「よし」と気合を入れ、勉強をしなければいけない、しようかなと思い始めた時に「勉強しなさい！」と怒鳴られると、たちまち湧きあがろうとしていた熱意すらも失われ、別のことをしたくなったもので、叱責されるばかりでした。

私はいつも、「テスト」のような、ある一定の基準の中で自分の価値を上げることはできませんでした。人が決めたことを、素直にそうですかと受け入れることも、反抗することもできず、従いながらも適応できませんでした。人が決めた規準から逸脱することは非常識であり、みんながそれに従っているのだから、反抗することは、周囲の理解を得られないことであり、集団からの離脱を示すものであり、触れ合う人間をすべて敵に回して、後ろから突き刺される危険を常に共にするような覚悟がないとできないことでした。

私はのけ者にされないように必死に演じました。クラスの中も大人の社会の縮図のようなものが少しずつ出来上がっていました。進学塾に通う者たちは、グループを作ります。あからさまに見下しこそしませんが、勉強の話なども塾に通っていない人間とは質が違い、とても馴染みにくい雰囲気を作りだし、自分たちは上位成績者だという自負がみなぎっており、決して成績の悪いものたちとグループを作ろうとはしませんでした。人は自らの中に自然と芽生えた特権意識を知らぬうちに行使して壁を作るようです。後にそれが世界中で行われているのだと知って愕然としましたが、見えもせぬ威圧感が私の日々の生活を脅かしていくようで気が気ではありませんでした。必死に愛嬌を振りまいていなければ、何か少しでもおどけて笑わせて気に入られなければ、やがて彼らの特権意識から迫害を受け、暗い闇の中に幽閉されてしまうのではないかという恐怖心が、日々の生活を支えていました。学級という場所において、自分の居場所を作るための最後の知恵でした。私は優等生でもなんでもなく、努力しても少しも認められない、ただのおちこぼれでした。

中学一年生の時に、初めて人の死を痛烈に体感しました。母の父親がバイクに乗っていて交通事故にあったのです。祖父の前方不注意で、トラックの後方に突っ込んだということでしたが、ついこの間まで話していた「おじいちゃん」が、まさかそのような不幸に見舞われるとは思ってもみませんでした。

準備ができていようとできてまいと、現実というものは突如として目の前で起こるのです。私がこのような言い方をするのは、虚飾ばかりの日常のどこかで現実を忘れ去っていると気がついたからです。もっともらしい現実感とは、あまりにも突発的で、あまりにも暴力的です。自分の意思がどうという問題は一切通用せず、文字で読んだり、テレビで見て意識しているのとはあまりにも違いすぎるのです。作り事に囲まれ、夢を抱き、作り事に進むことと現実の矛盾を抱えて生きる。その現実への当たり前の感覚すら忘れ去って人生を過ごしてきた愚かさに気がついた時、ひとつの衝撃を私に与えました。しかもそのことに気がついたのは、このノートを書く直前のことでした。ようやく現実感を体の中に痛烈に取り戻したとき、取り返しの付かないほど現実は過ぎ去っていました。

祖父は脳を打って昏睡状態でした。もし生き残っても、障害が残るという見方が強かったようです。父はよく物事に対して否定的な言葉を使います。それは私に対しても同様でしたが、この時も父はしきりに「覚悟しとけよ」と私に言いました。

十二歳の子供に何を覚悟せよというのでしょうか。言葉はわかっても、その意味までは理解しかねました。なぜ、そのようなことを口走るのかも理解できませんでした。私にとっては、ほんの二ヶ月前に元気な姿を見て、話した大事なおじいちゃんです。死を一度も体験していない子供に対して、あまりにも投げやりで思いやりのない言葉でした。

そして、私が初めて病院へと行った日、父が病室を探してうろうろするものですから、祖父はどこへ行ったのかと思ったのか、休憩室で楽しく談笑していた入院患者のおばさまたちに祖父が見当たらないのでどうしたのかと父が聞くと、「ああ、あの人が死にましたよ」「ええ、お亡くなりになりましたよ。さっき」と、それがごく当たり前の日常で起こった、気にするべきものでもないかのような言い方をしました。他人事とはこのことか、とは思わず、起こった現象に対して呆然とも啞然ともしていたように記憶しています。

霊安室の前へと行くと、母の妹で、私から見ればおばさんにあたる人がいました。

すぐに霊安室の扉の両側が中から開けられ、奥の部屋には祖母と母がおり、二人とも担架の上にかけてられた人型の白布の側で号泣しておりました。

祖母は私の姿を見るなり、「総二くん...おじいちゃん、しん...泳げなくなっちゃった」と涙声で私へと言いました。

祖父母と私とは、よく水泳へ出かけていたものですから、そのように伝えたのです。

真実の伝え方は二通りあるように思います。辛辣に伝えるか、優しく悟らせるか。

私にはどちらが人にとってよいのかはわかりませんが、十二歳の子供に伝えるには後者のほうが正しかったように思えます。

辛辣に伝えずとも、真実は目の前にあるのですから、子供といえどもわかるものです。特に子供の頃は感覚が鋭敏なので、大人が理屈で現象を捉え、感じるよりも、もっと直感的に肌身で感じるものだと思っております。

葬式では、会ったこともない親戚にたくさん出会えました。少々早い他界ではあったものの、歳をとってくると、それなりに「死」というものを意識してくるのか、それとも兄弟が多く、様々な運命を眺めてきたせいかわかりませんが、祖父の兄弟の方々は私が思うほど「ショック」というものが顔には出ておらず、むしろ冗談を言って笑い合うほどでした。

しかしそれはうわべだけのことで、本当の感情は内へと多く秘めていたのかもしれませんが、そこでもひたすら「おべっか精神」を発揮していた自分にとっては、大人の心の闇の深遠にある神秘めいた未知の感情を読み取るどころではありませんでした。

大人になればなるほど、本当の感情を本人や親しい間柄の前で出さないことが「大人の礼儀」で、心にも思っていないことをあたかも心底思っているかのような振る舞いができ、きつどこかでは私の思いもしないような、いまわしく、かつ相手を驚愕させ、竦みあがらせるほどのことを心のどこかで思っているのが他人なのだと、萎縮しておりましたし、また大人同士のそのような振る舞いの中で、見事なまでに、騙し合っていることすらも気がつかせないような「人との交流を円滑にする」知恵と配慮を凝らした詐欺めいた技術こそが、この「世の中」というところを渡っていくために自然と身につけなければならない嗜みであり、狡猾な詐欺の技術をひけらかしあって、天晴れと思わせ、思うほどに相手の技に感嘆し、「優れた人間だ」と互いを認め合うことこそが、大人の一種の「遊戯」であると感じておりましたから、私もそれに倣って、葬式の会場でも気に入られようと、数多くの人に声をかけたり、手伝いをしたり、線香やロウソクをたやさないように一晩中起きていたり立ち振る舞っておりました。

「よい息子さんですね」

そう周囲に褒められることは、常に自分の本性というものがばれやしまいかと怯えている私に少々の安心を与えるのです。人は褒められていないとたちまち見下され、蔑まされ、誰しもこの恐怖と戦っているように思えてなりませんでした。

私が体験した初めての「人の死」というものは、よくわからないものでした。学校では元気にふるまっているつもりでも「落ち込んでいる」と言われ、ふとしたときにぼんやりと空を眺めていたり、廊下に力なく座り込んでいましたが、悲しいとは思っていないのに慰められると涙が出そうになるのです。

見知らぬうちに感情が外に出ているのでしょうか。どんなに明るくふるまっていると自分で思っても、見た目からして落ち込んでいたのでしょうか、掘り起こされるような悲しみと同時に、冷やりとした脂汗が出てくるのを感じていました。人に自分を見透かされ、ありのままを見られるという恐怖。いつ、このありのままの自分が馬鹿にされるのだろう。幼稚で悪意のない子供の

凶器が私に向けられるのは時間の問題なのではないか。もしこの道化の鎧すらもない生身の自分が傷つけられれば、もう自分には守るべきものがなくなり、生きていく術さえもなくなり、業火のような責め苦に焼かれ、黒煙を上げて消し炭になり、もはや一片の弁解も発することを許されず死ぬしかなくなってしまう。早くなんとかして普段見せている偽りの自分に戻らなければならないと、私の焦りは膨れ上がるばかりでした。

しかし、気持ちばかりで実行することがなかなかできず、何をしようにも落ち込んでいると見られる私は、息を潜めて縮こまり、気配すらも感じさせないようにするしか術は浮かびませんでした。早くこの場から逃げ出したい。ふと全知全能の者に見破られ、「お前の本性はこうだ！」と叫び上げられ、死ぬ以上の凄惨な目にあい、いわば、私の想像を絶し、頭部を激しく打ち砕くような一撃を食らう前に、私は早く自身を隠蔽しなければいけない。そんな一心で一時期の学校生活を過ごしていました。

落ち込んでいる間は、悲惨な道化と言っていいほど滑稽で、自分なりの思慮も分別も奪い去るものでした。人の死とは、このように自らの予期し得なかった何かを、心の内に残していくものだどつくづく感じたものです。祖父の死が残したものは、私にとって本性を浮き彫りにさせ、道化をより繕わせることでした。

中学生を送るごとに、私の家での立場は成績と共に悪くなっていきました。もはやどのようなおべっかや道化も役に立たず、存在や人格そのものすら否定されかねない状況におかれ、ゲームばかりで勉強を一つもしない私に、父や母の叱責は、より増えていくばかりでした。

この時期の一日というのは、成人になってからの密度とは少し違って長く感じられたように思えます。生活そのものに追われる必要性がないからなのでしょうが、苦痛も喜びも倍の長さで存在していました。特に苦痛は喜びよりも長く感じるものですから、その苦痛たるや、魂をねじ上げられるような拷問にも似て、終わりなく続くかと思うほどでした。

私は苦痛が増えるごとにゲームへのめり込みました。現実を忘れたい、忘れさせてくれる楽しいものが目の前にあり、そこに没頭するのは人としての防御反応（あるいは逃避なのかもしれませんが）のように言うのは、言いすぎでしょうか。私が勉強を一つもしない原因はすべてゲームがあるからだと思っていました。しかし私は本音で話そうとする自分に、母がいつも別の話題で説教をくだすことにひどく裏切りにも似た衝撃を与えられておりました。自分が本音で話したい事柄に、まともに取り合ってくれないというのは、会話しようとする気力すらも著しくそいでいくものでした。

肝心の父は会話ができるような人間ではありませんでした。気分が上下が激しく、少しでも機嫌が悪いと、何もしていないのに嫌味や叱責を浴びせかけられました。特に休みの日になると、私が目の前を通るだけで不愉快で下劣な嫌味を言うことができました。やはりそういうことが何ヶ月、何年も積み重なってくると慣れるというよりも、精神が捻じ曲がり、気が狂いそうになります。自分なりの謝罪の意思なのでしょうが、悪いことをしたと思ったときは、よく食べ物などを与えられました。スーパーやデパートなどに連れて行ってもらったときに、妙に優しい声で「あれ食べたいか？」と聞くので、逆らってしまったのは父の気分を削いで、またどのような痛みを与えられるかわからないと感じ、素直に肯定し頷いていました。小学六年生まで犬を飼っていましたが、やはり食べ物を与えるのが好きでした。食に不自由しないというのが父にとっての幸福の定義なのでしょうが。父にとってはその程度の息子にしかすぎないということなのでしょうが。いずれにせよ、父に理不尽な嫌味や叱責を受けるたびに、何もされていなくても父から常に脅迫されているような気持ちが大きくなっていきました。私は脅え、嗚咽混じりの悲鳴を上げそうになるのを堪え、父母の責め苦から逃げるように、一人部屋の中にこもることが多くなりました。

。

やがて中学生生活も二年が過ぎ、三年となって受験の時期になってくると、父の接し方が大変厳しくなりました。後に母に聞くと、会社の上司にひどくいびられ、仕事上のストレスを膨大に抱えていたと言うのですが、そのストレスの捌け口は明らかに私でした。

受験が近いのに成績が悪く、ゲームばかりしていて勉強すらない私の姿が父の苛立ちを余計にあおっていたようでした。特に父は学歴にこだわる人間で、ことあるごとに出身校を前提にして、人間を褒めたり、蔑んだりしますが、自分の子供が醜い汚点であるかのように、私の素行をひとつひとつ責めだしました。特にその責め方はえげつなく、若干十五歳にしかならない子供にとっては凄惨とも言えるべきもので、心当たりのある素行にとどまらず、下劣な嫌味や人格否定まで及び、心が少しずつ荒み、歪んでいくほど、言葉での精神的暴力を受け続けたのです。私は子供が最も信頼する親が、存在否定とほぼ同意である人格否定を、子供の人格形成において重要である時期に執拗に行うのは、もはや犯罪行為と同等であると見ており、陰惨であり、明らかなる暴挙であると現在でも思っております。

しかし、後年になって気がついたのですが、自分がこの時にされていたことと同じことをいつの間にか他人にしており、自分でも気がつかない間に親と同じように暴力をふるう心を持っていたことに、心の底から青ざめて震撼したものでした。もしや、祖父からも同じようにされて父は育ったのではないか、という推測が浮かんだときに、暴力や暴力性というものはいつの間にか伝染し、連鎖していくものではないだろうかと感じたものです。自分がいなくなれば、自然と行っている暴力も止み、暴力の連鎖は消えていくと考えていましたが、今になって、やはり自分はこの世界から消えてよかったのだと死を決意した心の中に安心もあることに気がつき、人知れずほほえんでいました。

この時期の父は特に週末になると酔って帰って来ることが多く、ゲームの世界に精神的逃げ場所を作っていた私は責められるごとに、よりいっそうのめりこんでいきました。父が帰って来る時間になると、すぐに自室へ戻り、狸寝入りをするのですが、父のタンスが自室にあるものですから、仰々しくドアを開け、酒臭さを漂わせながら、布団をかぶっている私へとよからぬ一言を浴びせかけたり、ゲームしているところを見られたりすると、素行のことは必ず言われ、かつ機嫌の悪いときは理不尽な責めを受けて、反論さえも叩き潰されました。

特に反論を叩き潰すというやり方は陰湿で、私の意思や言葉を聞くようなそぶりを見せながら、人格否定を加えて徹底的にやり込めるのです。当然中学生の私がかんうはずもなく、抵抗するよりも前に、言われたことに対し素直にそのような気がし、素行に対しての正論と人格に対する曲論、もっと言えば存在否定を狡猾に織り交ぜながら責めるものですから、（いつでも人は素行に対しての善悪は問われますが、人格に対しての否定的正論があるとすれば、つまりは人生、生活を送ってはならないというのと同義でしょう。父が暗に示した通り、私は生きてはいけなかったのです）ますます私の胸は柔らかなものがぐちゃぐちゃに潰されていくような崩壊と、存在否定までされた絶望感とが、底の見えぬ谷のごとき深さで抉られていったのです。あの膨大な皮肉と否定語の積み重なりに、やがて私は追い詰められすぎて、おかしくなり、毎日自分の髪の毛を引きちぎるほどまでになっていました。

父の言動は気分によって変わり、つい昨日まで言っていたことを翻して、言っていたことをまったく覚えていないかのように、否定していたはずのことまで責めるのです。この時、私は気がついたのです。父は会話をしたいのではない。自分の気分が晴れるまで責め、蔑み、罵倒し、皮肉や嫌味を言い、また気分がよくなったらなにかを与えて喜ばせ、そしてまたストレスがたまったときに自由に私をいたぶるために意思の疎通をしないのだと。気分が悪い時の父にとって、私の言葉や意思は関係ないのです。ただ自分の思うように下劣な言葉を浴びせかけられればそれで

よいのです。それならば私は父の気持ちが晴れるまで耐えよう。会話ができないのなら、ひたすら黙っていよう。それが父のためになり、私の心を守るためなら、暴力を受けていよう。やがて何か理不尽なことがあると、沈黙することが多くなりました。

以前はまだ、父を殺そうと考えていたこともありましたが、次第にその気力は失われ、父の言うこともあながち間違いではない部分がありましたので、私は毎日怯え、父から逃げるようにして過ごしていました。誰かを殺すくらいなら、自分が死ねばよいのです。

その頃の私の心は、完全に失われる寸前でした。学校では小テストなどもあるのですが、多少の勉強をしようと机に向かい、頭を使い出すと父の言葉が頭に数々浮かんで来て、何度も繰り返されるのです。恐ろしいほどに体は硬直し、苛立ちと恐怖ですぐさま考えてはいけないと思ってぼんやりし、気がつくとも机の上にたまった自分の髪の毛に気がつくのです。この髪の毛を引きちぎるという行為は、後になってリストカットという行為にすり替わっていきました。

休みの日、玄関前にある居間に父が寝そべっていると、顔を合わせるだけでも何か言われました。玄関へと行くとき、ロシアブルーレットのように気まぐれに弾丸は撃たれ、肉をひねり上げ、抉り取りながら、魂を打ち抜くのです。いまだに、なぜ家にいるとあれほどまでに気分が悪いのかわかりません。私は次第に感情を表に出すことが少なくなり、自分の感情をひたすら押し込め、顔にすら表さなくなりました。

そんな中、決定的な事件が起きました。父が酔って帰ってきたある晩、居間でゲームをしている私の顔を見るなり「よおアホヅラ」とニヤケながら言い放ったのです。その瞬間、理性が弾け飛ぶように壊れてしまい、生涯感じたことのない悲しみを受け、その日まで大事にしていた血の絆さえも粉々に打ち砕かれ、生きていることが心底恥辱的で嘔吐を催すほどグロテスクなものだと思いました。血のつながった存在に、子として最も下劣で価値のない存在として通告されたうえに、心の中に大きな杭を打ち込み、心の動きの半分を止めさせたのです。止まった半分の心はやがて腐っていき、人間として生きていくにはとても卑屈で醜いものを育てていきました。

私は父から言われたことに涙が止まらなくなり、仏壇の前で嗚咽しました。一度も会ったことのない祖母の写真を見ながら、「おばあちゃんは、私の存在を完膚なきまでに否定するために、父をこの世界に産み落としたのか」と問いかけ、「どうしてこんなことを...どうして...ひどい...ひどすぎる」と心の中で繰り返すだけでした。まだ、この時までは私は人間に絶望しきっていませんでした。まだ「絶望感」を感じるだけの心の余裕があったのだと言っているでしょう。

しかし、ここからは心の様子が、以前とはまったく違ってきました。まるで、緩慢に死んでいくかのような、心を侵食していく麻痺が、生きている充実感すらも、生きようとする再生すらも奪い去り、「父親に似ている」と言われるたびに、侮辱的な言葉としか聞こえなくなり、父親の様子も程度の差こそあれ、突然人が変わったように聖人にはなるはずはありませんから、丁寧に彫り込まれるようにして、否定的な観念が刺青として心に浮き上がってくるのを感じながら、人に対して力なく微笑むようになっていきました。

植えつけられた負の感情は、猛毒を持った暴れる蛇のように心の中に居座ることになりました。短気になったり、何もしゃべらなくなったり、他人を相手にするのが嫌になって無視をしたり、時折得も知れぬ破壊的な衝動を持つことが多くなり、その衝動は突然沸き起こり、心は発狂し始め、自他共に見境なく破壊したくなり、それが引き金となり、人生で取り返しのつかない過ちを引き起こしました。すべて、私が引き起こしたことでした。

中学三年の頃にしきりに同級生から「なんだか石田くんらしくないね。大丈夫？」と言われました。道化に徹し、ひたすら真実の姿を隠蔽し続けている私のことを、何ひとつ知らないのに「らしくない」と言い、助ける気もないのに「大丈夫？」などと聞くのです。その気がないのに、その気があるように見せかけ、あたかも友達であるかのような親密さで、「友だちだよな？」と暗に互いを確認しあう、思い込みだけの関係を作るのが友だちか、と思うと同時に、はたして「自分らしい」とは何か、という疑問が引っかかったのも事実です。しかし、その疑問も濡れた用紙に広がるインクのような陰鬱さに侵食されて消されていきました。

高校一年の頃は中学に受けた精神的な傷から、なんとか過ごしていくのが精一杯でした。笑うことも感じることもうまくできず、剥がれた道化というメッキの裏側に、ひどく汚れ、ただれきったものが見えてしまうのではないかと、気が気ではなく、まるで周囲がすべて信用できない憎むべき者のようにも、ひたすら手の届かない羨ましい者のようにも見え、心は取りとめがなくなり、必死に取り繕うにも、まったくできていなかったようで、先生からは「気持ちの悪い生徒」と言われたこともありました。それでもなんとかおべっかを使うことによって友達はできましたが、所詮は作りあげた、偽りの自分にできた友達ですから、心が通じているはずはなく、私の孤独はどうしようもなく大きなものになっていったのです。

相対評価というのは、同じ「三」という成績でも、中学校にいる生徒の実力によって学校同士に成績のレベルの差を生みました。私の出身中学のレベルは高く、中学では常に下の上くらいの成績でしたが、高校に入るや否や群を抜いて成績があがりました。それだけ他の中学校はレベルが低く、私たちと他中学出身者とは、あまりにも基礎学力が違いすぎたのです。私と同じ出身中学の仲間たちは自然と上位成績者になりました。当然、クラスの間が馬鹿のように見えて仕方ありませんでした。その時、心の中に巣食い、息を潜めていた蛇は急に暴れだし、赤いりんごに毒牙を立てるように、心を犯していきました。腐っていく精神は鬱屈し、刻み込まれた卑屈さは闇の底で抑えこんでいた憎しみと言う名の、マグマのような暴力的衝動と重なって、逆流して制御できなくなり、当たりかまわず噴出するようになりました。私は次第に周囲を見下し始め、ことあるごとに心の中で「馬鹿ども」と罵っていると、気持ちはよりいっそう強くなり、衝動が発散されると心の中が、すっと一瞬だけ晴れ渡り、救われたような気がして、安心していたのです。特権意識の、行使でした。

父も影では人を侮辱し、書類上の経歴、出身校などで人を決め付けたように言いますが、私も卑屈な精神を持っているときに、人を見下し、蔑み、あたかも正しく、間違いなど言っているはずがないのだと思うとき、かの者たちよりとても優れているような、むしろ実は自分は優れた人間だったのではないか、今までの評価が間違っていたのではないか、という錯覚に陥っていました。他人を見下し、自分を祭り上げて傲慢に浸ることは、とても甘美な麻薬で、ストレスの最善の発散方法として、ゴミでも扱うかのように馬鹿どもを踏みにじりたくなり、心の怒号をのびのびと行き渡らせることで、とても気持ちがよくなり、一度蜜の味を占めると、癖になったよ

うに、なかなかやめることができませんでした。

しかし、「人を呪わば穴二つ」とはよく言ったもので、心の中は凄絶に蝕まれていきます。自分には一片の曇りもやましきもなく、この世界で正しいことを主張しているかのような、自己陶酔的な傲慢に逆に飲み込まれ、ふとした時にドロドロとした暗鬱なるものを感じながらもやめられず、むしろそれを肯定している気持ちになり、もはやどうしようもなく汚れ、生きていく価値すらもない人間だと思えるようになっていきました。それで収まればよいものの、なぜ自分がこのような気持ちにならなければいけないのか、悪いのは自分ではないような気もして、罵られたことが常に思い出され、憎しみと怒りが卑屈さと混じって噴出し、また自分をどうしようもなく制御できなくなり、他人をますます軽視し、侮辱するようになるのですが、まるで螺旋の階段を滑り落ちていくようで、自分の価値がどんどん失われていくのは血の冷えるような思いで体感しておりました。

見下すか、自分を傷つけるか、どちらかしかなく、人を認めることができませんでした。「なぜ自分のようなものが生きているのだろう」と吐き気のする思いで毎日を過ごし、もやもやとした、蠢く雲の塊のような闇の世界が心に見えたかと思うと、放課後の窓から差し込む透き通った朱色のあたたかみある夕日に、ひどく感傷的になり、理由もなく涙がこみ上げてきたりしましたが、それでも少々の楽しみがあると、生きていようかとも思い、毎日が暗鬱で、鈍痛を感じながらも、まだどこか細く再生しようとし、もしかしたら、この「再生」こそ生きる力だったのかもしれませんが、心の痛みが薄れていくと同時に、痛みを感じなくなった部分があらゆるものを巻き込んで麻痺して、心や体で感じることもさへも薄れてきて、焦りさえも薄らいでいき、自分が泥の人形になって乾いていくかのようで、このままいけば、何ひとつ感じなくなってしまうのではないかと、自分の状態にひどく表現のできない違和感を覚え、本当に自分は生きているのだろうか、という疑問さえも浮かび、どこで覚えたかリストカットを始めたのです。

リストカットと言っても、私の場合それほど重度ではなかったのですが、この行為も私に安心を与えました。心が完全に死に切っておらず、まだ人間としての感覚を失っていないことを、傷つき痛みを感じることで自分へと証明したのです。どのような慰めも、同情も、彼岸から言われているような遠さで（むしろ自分が彼岸にいたのでしょうか）、心の中に響いてこない中、肌に神経が通っていて、明らかに赤い血が流れているということが、非常に落ち着きを与えたのです。しかしリストカットという行為もまた惨めでした。通学電車の中で吊革に掴まる時、袖口から赤い切り傷でいっぱいの手首などが見えると、いかに自分は人間としてダメであるかを高らかに叫んでいるようで、甚だ恥ずかしい思いでいっぱいでした。理屈で言えば、ならばやめればよろしいと思われ、一体何がしたいのかまったく筋が通らない状態ですが、人間は理屈だけで生きられるものなら、いくらでもそこに救いを求めるでしょう。正しいと言って人を傷つけ、間違っているとって止められない。言葉にすると、とたんに支離滅裂でおかしなことになりますが、人の気持ちを理屈で捉えることこそ、異常なことなのかもしれません。この時期の私は、まるで暗闇の底から天井の隙間の光をぼんやりと眺めているようで、俯けば暗闇、上を見れば闇に足をすくわれるような状態で、何をしても、何を言われても、救われるどころか苦しめられるばかりで、動悸がし、息が詰まるばかりでした。あの体と心の反応はとても理路整然と説明できるような状態ではありませんでした。

この頃、始めたことがもう一つありました。それは水に頭を押さえつけられてもがき苦しみ、息苦しさから顔を上げて、必死の呼吸を試みるかのように、抑圧された心を少しでも吐き出そうとしたのです。なんとかして心の闇を外に出さなければいけない、破裂しそうな腫瘍に切り傷を入れて膿を出さなければいけない、私には音楽も絵の才能もない、運動なんてもってのほかだ、ならば何がある、文字が書ける。それなら文字を書こうと、心の状態を詩にして表に出し始めました。内容はとても暗号めいていて、他人にわかるものではなかったのですが、自分にはどのような気持ちや状況で書いたのか、はっきりとわかるようなものを言葉にしました。

思春期の繊細な心の内をさらけ出すことはとても勇気がいりましたが、この方法ならいくらでも「ごまかし」が利きます。自分の心ではないと主張すれば、深入りしてくることもないのです。心の内がばれることを極度に恐れながらも、何かの形にしたい、誰かわかってくれる人に伝えたい、しかし一度でも否定されれば、また奈落の底まで落ちて、生えようとしていた草花さえも燃え上がる地獄の馬に怒濤のごとく蹂躪されて、たちまち枯れた荒野に成り果て、再生のできないまま、自分の精神がどうなるかわからない。また自傷行為を始めるかもしれない。いや、きつともっと恐ろしいことを思いついてしまうだろう。海底に静かに揺れる藻のような、得体の知れない人間への闇の揺れは大きな恐怖となって常に隣接しておりました。

暗号のような詩というのは、例えばこうです。

飛ぶ鳥は凍てつき
悲しみの涙さえも流れず
短剣は胸へと深く突き刺さり
血も見せずにバラバラになった

闇への螺旋
苦しみの底へ欠片は落ちて
伸ばした手は切り刻まれ
浮かぶ城はヘドロを流す

壊れた明日は訪れない
聞こえる声は幻
死にたえた朝は
無数のナイフを体に降らせる

こうした詩を通じて、ようやく自分の心と少しずつ向き合っていました。何かを考えているわけでも意図しているわけでもなく、ただ感じるままに書いていましたが、読み返してみてどっと重苦しいものがのしかかってくるようで、これを見た何者かが、ひどく嫌悪感を持って私の存在を潰しにかかるのではないか、気色の悪さを感じて私を背後から憎悪と嫌悪を持って頭部が潰れるほどの力で一撃するのではないか、私自身そうされるべき人間だろうことは感じておりましたから、常に周囲を警戒し、おどけて笑わせ、よく話し合う「友達」と呼び合っている存在でさえ、その心の内に不吉なよどみや不審の芽を見ては道化に走り、天使のような笑顔でもって仮

面を作り、まさに迫真の演技で一日を過ごし、一番一番の大舞台を終えて疲れ果て、どっと倒れこむように家へと帰っておりました。

しかし家へ帰るということもすでにこの時は恐怖になっていました。本音で話し合えない家庭。親にさえ仮面を作って過ごさなければならず、逃げるようにして部屋に閉じこもり、母にご飯だと言われては食べ、食事が、まるで味のしない物体を噛んでは飲み込む、機械的作業をする家族サービスのようにも感じ、こんな人生に意味などあるのかと何度も思いながらも、ゲームや漫画や詩作で時間を潰し、無意味な時間で人生を過ごしていながらも、なおさら無意味さを人生に見出し、明日が訪れなければよいと願い、時間は非情にも過ぎ去り、部屋へ入る父に恐怖心を抱き、帰ってこなければいいのにと思いながら布団に潜り込んでいても、わざとのように布団の上から足を踏みつけていき、奥にあるタンスに背広を仕舞い、下着などを取り出すと、また布団を踏んでいき、それが「お前はそうされて当然の人間」と示されている気すらし、また頭の中で否定語が沸きあがり、何もされていないのに落ち込み、嫌悪感と苛立ちに自分を切りつける日々が続きました。

詩を書いたノートが文字でいっぱいになりかけた頃、ノートをとある女性に見せたことがありました。他校の女性でしたが、読書が好きで、とても内気で、とことなく陰がありましたが、その陰がとても美しく見せていました。なぜかその女性にだけは心惹かれるものがあり（同じ匂いに惹かれたと言ったほうがよいのでしょうか）、彼女も私とは打ち解けられるようで、次第にお互いのことを話し合っていくようになりました。

その女性の名前はヤエコと言いましたが、とても落ち着きがあり、長い黒髪からはシャンプーのよい香りなどして、口数少なく、従順で、風が強く吹いて髪がたなびいた時に見える白いうなじが透き通っているようで、唇はあどけなく艶やかで、初めて異性、いえ、人間というものに、はたまた、母性を感じたのでしょうか、本当の自分が受け入れられたような気がして、次第に心を許すようになりました。

ヤエコと会える時間はいつも放課後でしたから、夕方から夜の時間にかけて会っておりました。携帯電話などない時代なので、どうしても連絡したいときは公衆電話でテレホンカードの残度数を気にしながら、親が出るのではないかと緊張して心臓を激しく打たせながらも電話をかけ、待ち合わせをしていつもの公園で落ち合うことを繰り返していました。「恋人」と呼ぶには、妙に恥ずかしさがあって抵抗があったものですから、仲のよい友達と思っていました。しかし親友と呼ぶには、心の距離感が気になり、「恋人?」「恋人」などと、花びらを一枚一枚千切りながら決める花占いをしているように頭の中でぐるぐるとさせ、ヤエコの存在を言葉で決めることはできませんでしたが、人間に恐怖しきっている私はここでも心配性とも言うべき精神が発揮され、宝物を金庫の中に入れていても落ち着かない神経質な資産家のように、大事である彼女の存在が何者かに知られれば、特にクラスメートなどに知られれば、学校中に知れ渡り、ひどく茶化され、ヤエコが好き勝手に品評され、貶められ、その価値を著しく奪われるのではないかと、人影ひとつ、物音ひとつにも注意を払いながら歩いたものでした。

友達。クラスメート。油断も信用もならぬ、時折したたかな冷笑の裏に狡猾な打算を見せるその存在は、学校生活において常に互いを隠しあう不可解で偽りに満ちた存在ではありましたが、ヤエコのまるで何かを恐れるような陰りのある素振りや瞳を見ていると、自分と同じようなものを見ている気がして、その瞳の陰の奥に揺れる輝きと言ったら、まさに捜し求めている神秘的な宝石そのもののようにも感じ、とても他人とは思えなく、生まれて初めて、この人ならわかってくれるかもしれないと、どこか確信めいた予感がしてきていました。

自分の心に最も近いであろう存在は、強烈に異性を意識させました。初めて人を好きになった

のではないかとも思いましたし、夕闇深くなってくると、自然と体が密着してきて、互いの温度を感じて歩いていると、誘うかのような女性特有の甘い香りや、感じたこともない柔らかさがして、この世界から解き放たれて絢爛たる月夜の花が咲き乱れたように感じ、秘密めいた花園の奥で二人だけにわかる暗号をやり取りするようでした。

その秘密は私が常に周囲を欺きつつ不穏な素振りでナイフをちらつかせられるような探り合いの隠蔽とは一切違って、刺される危険もなく、打ち明けるひとつひとつが天の星々を統べる全能の者に祈る心地で、乾いた心には大変麗しく、神聖なものにも感じ、彼女といる間だけであろうと初めて自分らしい自分でいられたのです。

しかしどこまでも自分は汚らわしい存在でした。

性的にも大変興味を覚える年頃ですから、ひどく卑しいことも考え、その衝動を実行したくなり、突然抱き締めたり、キスなどしたりしますと、嫌がることもなく、目を閉じてされるままになっているのです。お互い恋愛、男女経験がなく、どうしてよいかわからず、ただテレビで見た、漫画で見た、どこで覚えたかもわからないようなおぼろげなもので、真似をするのですが、ヤエコが人形のように黙り込んでじっとしていると（むしろ固まっていると言ってもいいくらいですが）、最初は新鮮味と興奮あふれる行為で気にならなかったものが、月日を重ねるごとにマンネリズムを感じだし、だんだんと興ざめし、なぜヤエコは自分のために試行錯誤をしてくれないのだろう、もしや自分に対しての愛情に手を抜いているのではと、よからぬことが頭をよぎり、だんだん彼女の気持ちがどこにあるのかにも疑問を持ち、毎回教科書を読み上げるような退屈さで同じことをして、満足できるのだろうか、苛立ちを感じながらする機械的復作業を解消するためにも、いえ、自分の性的興味からも、行為は多少エスカレートしていき、ブラジャーに遮られながら無理に手を入れて胸を触ったり、下着の上から局部をさすっても、硬直したように動かなくなるものですから、いよいよ「こんなものか」「自分が触れても感じないのだ」「彼女は自分のために努力はしてくれないのだ」「心の中では嫌がっているのではないか」「まさかしょうがなく付き合っているだけなのではないか」と、彼女の愛情を疑いだし、体の中が冷えていくような思いにかられていきました。

思い返してみれば幼い自己満足に浸っていたのです。愛が何かも知らず、恋が何かもわからず、ヤエコの体をまさぐりながら、はしたなく勃起して寂しい愉悅に浸って、彼女の気持ちを見つめることもなく、完全に彼女の存在を見失い、孤独を強めていっただけなのです。

私は寂しい人間でした。人間の信頼や愛情というものに切ない悲しみを抱いていました。いつの間にか「大人の気まぐれ」と同じように諦観しながら見て、「そんなものだ」と、か細く笑う自分の心は、いつか人は捨てられるのだ、裏切るのだ、すでに出会った時から偽りあっていて、それが暴かれるまでの付き合いなのだと、訪れつつある孤独に対して構えるばかりでした。彼女を疑ってしまったのは、自分の望んでいるものこそが愛情だと勘違いし、自分が満足するのが愛される者の特権だと、夢想し理想を抱いていたからなのかもしれません。

やがてヤエコとの関係が深まるにつれ、ヤエコの心の動きや癖のようなものもよくわかるようになり、私は満足するものが得られないとなると、ヤエコは自分に尽くしたいのではない、私と同じように何か満足することをされたいのではないかと道化に走り、ひたすらヤエコの孤独や悲愴感を埋めてやろうと奉仕し、ヤエコと付き合っていくのでさえサービスをしなければならなくなり、ヤエコもだんだんと明るく楽しそうになってくるものですから、止めることができなくなり、ヤエコの気持ちを害してはいけないと余計に自分のことが伝えられず、身動きが取れないほど八方塞になり、だんだんと疲れてくると、ヤエコは自分のサービスを利用したいだけなのかもしれないと思ひだし、孤独を埋めようもないほど大きくしていったのです。

思い返せばあの時のヤエコは、彼女なりに必死に私を愛そうとしてくれたような気がします。初めて強く意識した理解者に対して（ヤエコはよく「わかってくれるのは総二くんだけ」と私に言っていました）、私の心をかばうように言葉を投げかけてくれましたが、ヤエコへの些細な不信感が邪魔をし、一緒にいることが安心できなくなると、疑心暗鬼に陥り、何かの瞬間に否定し始めるのではないかと、もう心の中ではよからぬことを思い、企んでいるのではないかと、闇は広がるばかりで、生きる充実感も、恋をしているだろうときめきも、触れ合い伝え合うぬくも

りも、彼女なりの愛情も、闇底へと落ちて、どこにいったかもわからなくなり、底抜けの心が、恐ろしいほどの虚無を抱えているようで、ヤエコどころではなくなっていました。

そしてある日、精神の崖際でのせめぎ合いに耐え切れなくなり、発作的にどっと体や心が崖から滑り落ちたときに、愛とはすべからく不動のもので、無償の愛情であることを夢想し、本心はどこにあるのか、彼女の気持ちを試してしまったのです。

その時、自分が道化によって奉仕しているのが完全な苦痛になっていました。自分はこれほどまでに尽くしているのに、ヤエコは自分の望むものをまったく出してくれない、これは愛ではない、私は愛されていないという倒錯が自らを孤独にしていきました。それよりも以前に、どことなく満たされない思い、自分の存在に対する心とした疑い、分かり合えてもそれが何になるのだという諦観と虚無感、どうせこの生活も何者かによって否定され、踏みつけられ、跡形もなく壊されて、何事もなかったかのように過ぎていくのだというニヒリズムが、やがて卑屈な心の闇と共に膨れ上がり、なんの罪もなかったヤエコにありもしない疑いをもち、やがて疑いは憎悪にも近いものになり果て、耐え切れなくなっていきました。

自分のようなものが愛されるはずがないとっておりましたし、その寂しさと孤独の反面、人間への求愛、時によってそれは執念ともいえるほどの、ぬくもりへの渴望から、飢えた亡者のように愛を食らおうとしていました。ひたすら否定観念が魂の中で高台の鐘のように鳴り響くような、「飢餓感」が心を蝕み、破滅から逃れられない自分への救済を誰かに求めている、なぜ同じ種類の人間であるヤエコが、他人を救済する能力もない私を愛するのか、わからなくなってきたのです。互いに与えられもしないのに、与え合おうとしていたのです。この矛盾に耐えられず、もう、自身を止めることはできませんでした。

ヤエコの弱さは自分の弱さでもあったので、誰よりも手にとるように、微細なもろさまで把握していました。ヤエコが会えないある日、私は公衆電話から彼女の家へと電話をかけました。会えない日は私から電話がかかってくるのがヤエコもわかっていたから、すぐにヤエコが出て嬉しそうな声をあげました。私はそれからいつも以上に自分の荒んだ心を吐露しました。私は腐り果てている。生きていてはダメな人間なのだ。お前を救いはできないし、守れやしない。ヤエコは必死に慰めてくれましたが、優しい言葉をかけられればかけられるほど惨めで、どうしようもなく悲しく、私を蔑み罵倒する、声なき声が聞こえてきそうで、ますます苛立ち、ついにヤエコを責めはじめました。

俺が死んでもお前は生き続ける。俺が死んでもどうでもいいんだ。お前は俺の気持ちをひとつもわかってない。寂しいから俺にくっついていてくれるだけでお前の愛なんて最初から嘘だったんだ。お前は自分の寂しさを埋めてくれる存在だったら誰でもよかったんだ。お前なんてどこへでも行けばいい。ただお前は俺を利用したかっただけだ。苦し紛れにすがりついたにすぎないだろ。俺の代わりなんていくらでもいるんだ。そいつのところに行けばいいだろ。最初から俺のことを馬鹿にして見下していたんだ。もういい。

彼女のもろさも責めつづけ、人格さえも否定する言葉を投げ続けました。私は父からされ続けてきたので、どうやれば人の心が壊れるのかよくわかっていました。理不尽な責めに、ただヤエコは泣き続けました。電話口から聞こえるヤエコの押し殺した悲痛な声は、私の心にとって血で血を洗うようなもので、ただ感情に任せて出てくる彼女への責めは、止まるところを知らませんでした。ヤエコは泣くだけで愛しているとは言ってくれませんでした。やはり思ったとおりだと、首を絞められ、絞り上げるように泣く彼女の声を冷たい顔で聞いていました。自分の顔が電話ボックスの窓ガラスに映り、悪鬼のようでした。何も感じなかったのです。むしろ快感だとさえ思っていたのです。ざまを見ろ、これが真実なのだ。人間は愛情など持ちえないのだ。

最低でした。

大切に育ててきたはずなのに、二人はうまくいっていたはずなのに、激情に任せて受話器を下ろした時にカシャンと釣銭口に乾いた音を立てて残ったのは、補充しておいた十円玉だけでした。

。

人は心で感じたことを真似して覚えていくような気がしております。父にされたことは体が覚えていて、人の心の壊し方をよく知っていました。常に自分でも制御できない、裂かれるような痛みがあふれてくるようで、怒りが捻じ曲げられて卑屈になり、恨みが潰れて傲慢になり、苛立ちが擦り切れ暴力的になり、罵倒や否定が聞こえもしないのに心の中で渦巻き、抑えつけられた怒りや恨みや苛立ちがまたあふれてくるのです。

それからヤエコが待ち合わせ場所に来ることはありませんでした。自分であれだけのことをしていながら、もしかしたらヤエコは自分をまだ思ってくれているのではないかと、勝手なセンチメンタリズムに浸り、そのセンチメンタリズムが二人でいた時のぬくもりを思い起こさせ、待ち合わせ場所に来ない彼女を一人で待つのは心細く、不安で切ない動悸すらも体を打ちつけ、自分が壊してしまったものの重みすら無視して、来ないヤエコに対して、自分はなんて悲しく寂しい存在なのだと、被害者意識すら持ち始めていたのです。

あまりにも、愚かしいことでした。

後日、友人伝いに聞きましたが、ヤエコが自殺未遂を起こし、それが原因で学校中のうわさになり、いじめにあい、転校したことを知らされました。転校するほどのいじめにあったのですから、恐らくは地獄を見たのだと思います。凄惨で聞くに耐えぬことを集団でされたのでしょう。暴力は常に無防備で弱いものへと向かっていきます。この時、このことを知らなければよかったと、知ってしまったことを不幸だとさえ思う部分があったのです。暴力をふるう者は常に衝動に突き動かされていきます。まるで水のように、流れるところへと衝動は伝わっていきます。この後知っていく、心理的、物理的暴力をふるう大人は自分が間違っているとはひとつも疑っていませんでした。そして正義の旗を掲げて「正論」とやらを吐き捨て、周囲を言論の暴力で潰し、自分で吐き捨てた「正論」がいかに他人に影響を与えたか、結果を知りもしない愚鈍な姿を見ると、あながち「知らなかったことで不幸を無視できる」というこの時の考え方も、もしかしたら間違いではなかったのかもしれないと思ったほどです。社会に出ると、大人という存在は傲慢を言葉に包み隠して自らの利益を貪るようです。私はその存在を知って、安心すらしたほどです。

ヤエコがいなくなったと知って、私は自らが引き起こした不幸に恐怖しました。なぜ、このようなことをしてしまったのか、終わってしまえばわからなくなっていたので苛々してしょうがなかったのは、どうしてなのかもわからなかったのです。ヤエコがいなくなった寂しさと衝撃で、しばらく待ち合わせ場所に来ては一人で女々しく泣いていました。ヤエコと歩いた場所を一人で歩き、自分のはしたない行動や、彼女との会話、仕草を思い、もうあのぬくもりに触れることはできない喪失感に浸りながら一人で悔恨と悲愴感で己を責め続けていました。失恋と言うことすらおこがましい、自らが引き起こした惨劇でした。

利用していたのは、私のほうでした。

私は一人の人間の人生を大きく変えてしまいました。自分のしたことを思い返すだけで吐き気がし、嫌悪感と破壊的なほどの憎しみが己へと向いていきました。ヤエコの人生を変えたのは私なのだと、ヤエコを不幸に追いやったのは私なのだと、落ちるところまで落ちていったような心地になりました。

もはや「生きるとは何か」という問いに、無意味であるという答えしか出せなくなっていました。人をこれほどまでに傷つけ、不幸へと追いやった自分に生きていく価値はあるのかと悩み

、いっそのこと死んでしまえばいいと、強く願いながらも日を一刻と過ごしていく己の意地汚さと、死へと踏み切れない勇気のなさに打ちのめされるだけで、腕の傷は醜く増えていくだけでした。進行する心の麻痺に、自分は生きているのだろうかと自らを傷つけ確認しながらも、臆病で卑怯で愚劣な自分は同情を求めているかのように死ぬことができないのです。死ねないことに悔しさすらも覚え、泣き崩れそうになり、暗鬱たる気持ちが続くばかりで、いっそのこと誰かに突き刺され、止めを刺されたいと日々願うようになりました。

もう、今さらこんなことを言っても、何ひとつ取り返しがつきませんが、きっと、誰かに愛され、認めて欲しかったただけなのかもしれません。

朝通学電車の中で吊革を掴む時に、切り刻んだ手首が突っ張り、痛みを走らせます。愚かな自分への刻印のように袖口から赤い手首が見えると、自らつけた傷であるのに、周囲に傷痕がばれるのではないかと必死に隠し、きょろきょろと警戒し、あたかも普通に通学している学生であるかのような涼しげな顔で装うのです。

生きるとは、偽ること。偽ることは、殺すこと。本当の自分を表現することは、許されざること。そうとしか考えられませんでした。

生きるとは、本当の自分を牢獄の中に放り込むことなのです。そして自由に憧れ脱走しないか絶えず監視し、痛めつけながら、徐々に抵抗の意思を奪い去らせ、表では残虐な拷問の数々を一切行っていないかのような、清廉潔白で涼しげな虚飾の仮面を被り、あたかも善人のような優しげな猫なで声を出しながら、鬱憤や怨念に近い罵倒をどこかで密かに吐き出し、何事もなかったかのように明日を過ごしていくものなのです。この頃は周囲の馬鹿みたいに騒いで青春を謳歌している人たちを見るに、何がそんなに楽しいのだろう、なんの疑念もなくはしゃいでいる姿を見ると、この人たちはきっと自分の悩みのひとつでも背負ったらたちまち責め苦に耐えあぐねて死んでしまうのではないかとも思っていました。だからこそ余計に、悩みもない阿呆か白痴のように見えてしまい、蔑む気持ちもますます強くなっていったのです。

まるで隔絶された世界にたった一人で君臨している滑稽な王のようでした。王でありながら王であることを嘆き、世界に生きている価値のないものとして自らを痛めつけている、愚かしく喜劇にもならない状態です。理解者などいない。誰一人としてこの苦しみを理解し、救ってくれる存在などいるはずがないのだ。死ねばよかったのに、心だけが死んで無気力になっていくだけなのです。後年絶望すらも感じなくなりました。

「生きる」ことが自然とできずに疑念を挟んでしまうことは間違いでしょうか。支えもなく不安定で転んでしまうのは意気地のなさを露呈しているのでしょうか。もしそうだとしたら、私はどうやら欠陥品のようです。

卑屈で薄汚い心には、「希望」などという美しく潔いものでさえも跡形もなく汚してしまうのです。暗いところに目を凝らしている者にとって、一筋の光明は救いではなく目を開けられないほどの痛みにしかならないのです。

人の希望とは、汚れた魂には見出せないようです。どのような言葉も慰めも、魂に届くはるか遠くで、ぼろぼろになって倒れこみ、触れるどころか、かすりもしないのです。それを暗闇で眺めていると、切なさや悲しさがたとえようもないほどにあふれてくるのです。

「生きる」という疑問。所詮高校生の戯言のような考えですから、答えが出るはずもなく、答えを出せるほどの経験もなく、いつまでもその疑問に留まり、現実の流れに置いて行かれる。他人はきっと、自ら言われもしないで意思を持ち、目的を持って生活しようとする。こうして振り返ってみれば、この頃から自分は使い物にすらならない人間で、社会に出てもまったく価値のない人間だったことがよくわかってきます。

高校生活は過ぎ去り、高校二年ほどから将来のことをしっかり見据えて動き出す人が多くなり、進路相談なども徐々に活発になってきますが、「将来どうしたいのだ」という担任の言葉に、ふと映画のことを思い出し、あんなものを作れたらいいのになあ、との憧れから、口が滑ったように「映画を作りたいです」と伝え、親にすぐ連絡がいき、「石田がおかしくなった」と伝えられたそうで、私は親からたいそう叱られ、もう子供の時のように夢を語ってはいけないのだ、現実を見据え、大人になっていくとは、憧れや夢を捨て去り、「夢」を非現実的なものとして捉え、口に出すことすらも憚られることで、大人になれば「現実離れ」したことを語るのはもはや許されず、「社会」に対する清く崇高なる信心の魂を持つべきであり、異端者は罰すべきものであるかのように糾弾されるのです。つまり「いつまでも子供でいることは罪である」ことなのだと悟りました。

将来のことを何も考えていなかった私は親の勧めで大学受験をすることになりました。働くということも考えたのですが両親に反対され、反抗もできず、流れ作業のように勉強をして受験へと備えたのですが、受験の当日から高熱を出してしまい、ことごとく失敗してしまいました。

受験が終わり、学校の廊下で、病み上がりのやつれた顔で椅子に座っていると、化学の先生が気の毒そうな顔をして、

「毎年必ず一人くらいはそういう不運に見舞われるやつがいるんだよ」

と濁声で笑いながら私の肩を叩きました。

私の人生は不運なのでしょうか。それとも、運命だったのでしょうか。はたまた、自己責任で選んできたものなのでしょうか。どこから、間違っていたのでしょうか。

それから一年は小さな予備校に通ったのですが、母が入学金を払う時に学長の目の前で六十万ほどのお金を持たせてくれました。「このお金の重みを知って欲しい」とのことで、お札の束は確かに重かったのですが、私にはお金の価値観と言うものがさっぱりわかっていませんでした。これが後に生活や食べていくためとなっても、「生活していく」ことがひどく義務的で機械的で味気がなく、生きることそのものに懐疑的な私にとって、脅迫的な観念でしかなく、まるで反復作業のような毎日と、変化の兆しも見えない展望とそこへの諦観交じりの疲労感に、乾ききった心は生活を維持することよりも、虚無的な日常を忘れ去ることに向かい、散財激しく、常に困窮するようになっていきました。特に散財することにおいては、様々なものがお金を使ってもらおうと、その時だけ誰に向けるよりも優しい笑顔で待ち構えているものです。消費社会だからでしょうか。お金を使い、財布の底が見えてくるにつれ、心身さえも消耗していくような心地になりました。人は金を手に入れることは喜んで、出すことは大変惜しみます。この時の予備校の学長も、目の前の札束を見て大変ほほえんでいたのを覚えております。

幸福とは利益を手にするることなのでしょうか。

勉強嫌いの私はここでも根をつめてするわけでもなく、悪友に誘われては授業の帰りにゲームセンターでぼんやりとゲーム機の画面を眺めていたりしておりました。この頃には、徐々に酒を飲むということも覚えていき、祖父の留守中に酒をくすねて、ぼんやりと酔っておりました。

酔う。

私の生涯において酒を飲むということは、しくしくと広がり朽ちていく腐敗の痛みを一瞬でも忘れさせ、現実を麻痺させることでした。一度も酒を飲んで最後まで楽しいと思ったことはありませんでした。嗜好よりも消費であり、高揚よりも麻酔であり、快楽よりも逃避でしかありませ

んでした。だからこそ、すがりつくように浴びていたのも事実です。

人生の展望をはっきりと意思決定せずに、見通しも希望も楽しみも持ち得なかった私にとって、大学進学とは時間潰しにしか思えず、かと言ってどうしていいかもわからない自分は、親の進言に逆らうこともできずに、それしか方法がないような気がして、ただぼんやりと二年目の受験を迎えるわけですが、試験会場では中学校時代の同級生などもおりまして、試験が終わると喫煙場所ですっかりタバコなどを吸いながら談笑している姿を見ると、中学時代と煙を体中に漂わせながら喫煙している姿を比べたりなどして、誰が教えずとも子供は勝手に何者かの真似をしながら大人になっていくのだと実感したと同時に、過去の初々しかった時期にはもう戻れないのだなど、ひどく感傷的な衝撃を受けました。誰も、非現実的なことは語らず、大学受験の先にはある程度の目的、目標意識があるようで、まったく自分とは違う人種のように見えたものでした。

意思決定の力のない人間にとって、人生は強い影響力のあるものに流されていくだけです。しかし自分では何もできない歯がゆさに苛立ちを覚えながらも、無抵抗によって埋もれていく平穏に安楽さを見つけ、抵抗は傷を深めるばかりだ、生きようとしめない人間にとって無意味だと、より思考は積極性を欠いて狭まり、怠惰を極めていくのですが、最後の最後で、追い詰められていてすら、行動することを恐れていた私は、それまでずっと親の言いつけに従う苦痛から逃れようとしながら、自分で考えなくてもよい安直さを感じて、そこを逃げ場としていたのかもしれませんが。自分の人生や生きることについて何も希望を見出せず、決定していくチャンスも光も与えられなかった者にとっては（自らその機会を誰かに譲っていたのですが）、自分で決めていくということが何かわからず、何をしたいかもわからず、考えようとするだけで頭が真っ白になって慌てふためき、無様に混迷し、一寸先の未来すらも想像できなくなるのです。しかし、抵抗したところで、私は意思を押し切れたかどうかというと、やはりできなかつただろうと思います。抵抗しているようで、何ひとつ抵抗し切れずに流されていった、生涯でした。それでも、人生と呼ぶのでしょうか。

人生とはなんでしょう。喜びとはなんでしょう。何も選ばず、何も決められず、疑念の塊のような人間に、誰が微笑んでくれるというのか。誰へ微笑めるというのか。笑顔も引きつるばかりで、心がケロイドのようにただれていました。

もはや心は緩慢に死んでいくばかりで、再生の兆しすらも見せずに諦観の奥底へと飲まれていきます。張り合うことが怖く、張り合う理由も見つけられないのですから、生きることの充実がなく、活力が湧き上がらなくて当然なのかもしれません。結局、入試は一校だけ運よく引っかかって入学することができましたが、やりたくもなく、まったく興味も湧かない学問でした。

法律。

法律の対義語があるとしたら罪でしょうか。罪の反対語は蜜？（強欲な人間にとって罪を感じなければ蜜を舐めるのはあながち間違いではないでしょう）以前小説で読んだことがあります。法律の対義語は信頼だと思うのです。人間とは何かに縛られていないと際限もなく強欲になる証拠です。法律がなくて何もかもがうまくいっているのなら、わざわざ法律なんてものを作る必要性がおきないのです。信用できないから法律を作り、互いを監視しあって、あいつは悪だと指し示して、一人ずつ悪を風潰しにして、今日も事なきを得たと、自分を棚に上げて安心を得るのです。価値観の違いなどという言葉で摩り替えても、人は結局騙しあいをし、譲り合いをできず、善意の奉仕などできないし、謙虚さを持って万感の思いで恩返しなどしないと信じているから、ほんの少しの疑念や欲望や暴力や価値観が、昨日まであったはずの信頼を跡形もなく崩してしまうから、法律というものを作らざるをえないのだと私は考えていました。

法の下の平等、人権、尊いと思われている価値観にさえ、人の欲望が入れば見事に捻じ曲げられる例を、人間はあふれるほど並べ立てる様相に、まるで暗闇からじりじりと戦慄すべきおぞましいものが忍び寄ってくるような気持ちになります。逃げ場のない思いで、ただひたすら己の醜い本当の姿がばれないようにと隠蔽し続けるにも、いつか限界が訪れ、法を信奉する、ちゃっかりした善良なる模範市民に、あいつは著しく社会を蝕む癌細胞だと指差され、見せしめの人柱になる日も近いのではないかと、考えただけでも動揺が走り、身を震わせました。

私にはもう一年浪人する気力はなく、結局最後に残った、たったひとつの選択肢へすがりつくしかありませんでした。両親は私の合格を大変喜びましたが、どうしても素直に信じることができず、もしかしたら内心、たいした実力も実績もない大学に受かったことを馬鹿にしているのでは、あの学歴や経歴にこだわる父が自分を素直に褒めるはずがないのだ、きっと見下し、罵って、お前は所詮その程度だと軽蔑の瞳を投げかけているのだと、気が気ではなく、嬉しさよりもはるかに苛立ちのほうが大きくなり、両親のいない間に、あふれ出る怒気とともに合格通知をぐしゃぐしゃにして壁に叩きつけてやりました。壁に叩きつけられて、無残な姿になった合格通知を見ると、無性に悲しくなり、無様な自分の姿を見ているようで、心はわびしく引き裂かれんばかりで、一人で泣きました。

今思えば、せっかくの親孝行の機会さえもこの手で壊してしまったのですから、愚かしい限りです。人は自分の側にあるものを当たり前とってしまっただけではないようです。すべては過ぎ去ってから、あれこれ考え出すのが人の常ですが、私もまた過ぎ去ってからあれこれと考えるようになりました。しかしこの時は、親を喜ばせることすら、考えることができず、ただ自分の感情に飲まれていくばかりでした。

母はくしゃくしゃの合格通知を見つけて、泣いていました。その涙さえも当時の私には大変息苦しく思いながらも、自らの下劣さを認めざるをえませんでした。私は道化者として失格でした。たとえ偽りでも、己の感情を捻じ曲げてでも、天使のようにほほえみ、偽善をふりまき、あたかも親思いで優しい息子を演じるべきでした。しかし、ふとした時に私を罵り、蔑む声が頭の中

に聞こえるのです。いくつもの否定の言葉が、勝手に私の存在を罵倒し始めるのです。終始苛々してたまりませんでした。

父は、私の行為に対して何も言いませんでした。

私は自分でも理解ができなくなるほど、ひねくれた精神構造になっていました。ぐちゃぐちゃになった拳句、元に戻そうとした成れの果てがこれでした。自分の心さえも、どうしていいかわからずに、勝手に暴走するのです。人生なんて、どうにかできようはずがありませんでした。もう何もかも嫌でした。

私たちの心は永遠に通じ合わず、ゆえに苦しみ合い、同士ではなく、常に傍観者であり、ふとした瞬間に人は傍観者になると、無遠慮な言葉をいくらでも投げかけます。だからこそ他人なのでしょうが、この時期にも時折親身になってくれようと思わせている人たちに引っ掛けるように話をふったことがあるのですが、自分の心情をありのままに受け止めてくれる人はおらず、あたかも他人の心をわかっているかのような口ぶりで「辛いことはみんな経験していく」などと言うのです。みんなというのは誰のことなのでしょう。私以外の人間の心は理解できているということなのでしょう。「私は理解できない」と言ってくれたほうがとても素直なのに、なぜ大人という存在はこのような回りくどい方法で自分を権威付けようとするのでしょうか。何かにつけて「世間」「みんな」「常識」などと言う言葉で自らを誤魔化し、あたかも支障なく社会の中の一員であると自負を持って私を責めたてるのですが、もはや欠陥品と成り下がった私に嫌悪感を持っているのは明白で、救うような素振りで邪険にするのは、彼らの心情からすれば当然といえば当然のことかもしれません。

未来が見えません。希望が見出せません。強くなる前に、心の足場がありません。不安でなりません。人が怖くてなりません。生きていていいのかもわかりません。

人生とは、意思を発揮しようにも、様々なものに流されているものだと感じます。

晩年、と書くのはおかしいことかもしれません。人は生まれながらに運命を知らず、育ちながらに己を知らず、年老いては分別を知らず、恵まれては浅ましくなり、欲望には勝てず、自然の理を忌み嫌い、己の欲望には忠実であるのにうわさ程度の他人の不徳を糾弾しながらも真実を知ろうとせず、怠惰を極めて苦勞を自慢し、不幸を見せ付けては悦に浸る。人は常に人を許さず、理解しあわない生き物なのかもしれません。

晩年。

どこが私の終焉になるのかは、はっきりとはわかりません。しかし、もう長くはないことは精神的にも肉体的にもよくわかってきています。すべての苦しみを超えていくと、どこか体が軽くなっていくのを感じます。よく日本人は散り際に桜の花を思い浮かべますね。もしくは蠟燭の末期の炎のような。このノートを自分で書いていることが、絢爛たる花のごとき末期の輝きにも思えてきて、私はここ数年間で珍しく生き生きと自分らしくしています。最も自分らしい自分を見つめているような気がするのです。ずっと息を潜めていたのが、すがすがしい空気に触れながら、大きく深呼吸しているようです。はらりと力を失い、身を離れ、風に舞っていく花びらにも似ています。

それは私にとっては、虚無への崩落でした。

いつか無理を申し上げてあなたと一緒に見た東京の桜はとても見事でした。わざわざ私が強く言ったわがままのために仕事を休んできていただいて、とても嬉しかったです。もし、あそこで会えなかったら、もう二度と会えないだろうと思っていましたので、少々強引ながらもあなたにお会いしたいと、自分を押し通してしまいました。人生最後だと思ったら、この他無理だと思っていたことも、多少はできるものですね。四月の鮮やかに散り乱れる魂の欠片のような花道が煌びやかで、いつまでも記憶に残っています。北海道は五月ほどに咲き、なお肌寒いものですから、春らしい陽気というものも、春らしい景色を四月に見るというのも、長年寒冷地で過ごした私にとっては珍しいことでもありました。

こちらの四月は雪解けの季節で、冬の間雪の下に埋まっていたゴミなどが数多く出てきて、泥水と共に水溜りは多く、車は水を裾にかける勢いで跳ね、靴はすぐ汚れ、アスファルトの灰色があらわになってくるたびに、どこか、気持ちが重苦しくなるのです。

あれほど真っ白な世界だったのに、捨てられたタバコや、様々なものを包んでいたビニール袋、空き缶、容器などゴミくずが雪解けとともに数多く浮かび出てくる様子を見ると、まるで自然の中にも人の薄汚い心の有様を見せ付けられている気がしてきて、いたたまれなくなるのです。

大学もさして高校と代わり映えはしませんでした。たいした勉強もせずに合格するような学校だからでしょうか、むしろ怠惰な雰囲気さえも漂い、学生たちの瞳は今日の快樂をいかに享受しようかと妖しくよどんでいるようで、心に覇気はなく、多少かじった知識で物事を語るにも独善的で隔たっており、高校まではまだ校則など、他校も同じだと思いますが、ある程度は厳しくあったものですから、規律から解放されて自由を手に入れた分、たちが悪くなっており、学問を真面目にしようものなら嘲笑の眼差しさえも向けられるのではないかという雰囲気に大変衝撃を受けました。自由とは人をダメにするものなのではないでしょうか。だから人には法や教えが必要なのではないでしょうか。この人たちが、「社会」というものを構成していくのでしょうか。

とりあえず、ここにいる。とりあえず、人生を過ごす。

私と変わらない人間たちの姿がそこにありました。そして彼らは、とりあえず死んでいくの

でしょうか。夢を語ることを捨て、周囲に現実を見ると叩き込まれ、ひたすら実現可能であるという安心に対するの展望。未来に保証などないのに、二本のレールに従うような、人生と言う名の陽炎列車。彼らのあいまいさは、仮面を被る、道化を演じる、それ以前の問題なのです。

私の道化もさすがにここでは役に立たないようにも思えました。互いに深く干渉することを望まず、それでいて快楽を享受できる相手を探してつるみ、知ることはあっても考えることをせず、すべてが受け売りで、学びも創造もない悲惨さは、未来を閉ざすものにしか見えませんでした。

いえ、そうではないのです。私は、未来を見るのが怖かったのです。道が見つからないのも、社会という得体の知れない漠然とした概念を前にして、何をしてよいのか、どうしなければいけないのか、まったくわからなかったのです。父がなにかにつけて、「お前がそんなんじゃ社会ではやっていけない」と言う社会。母が「勉強しなければ、きちんと暮らしてはいけない」と言う社会。騙されると言われ、役に立たないと言われ、お金が、人が、知識がと言われる社会が、「夢」という「非現実」を語ることを、自分でいることを許されず、余計に偽りを重ねていかなければならない社会が、時として欲望の掃き溜めのようにも見える社会が、あまりにもわからなく、道をふっと失うのです。

私は社会と言う、蜃気楼のような目の前の存在になす術を失い、虚ろな目をする人間を心から恐れ、生きている人間の中に、初めて虚無的なものを見ました。それはありとあらゆる人間感情を吸い込んでいくようで、荘厳な古代樹がはびこっている樹海の中で底の見えない恐怖の穴を覗き込んでしまったようにも感じ、何ひとつ信用できず、「すべてが存在しない」ということよりも恐ろしく、意味や機能を持たない無機質な幻影に脅かされるようで、しだいに内にこもるようになり、外に出る気すらも失い、完全な無気力状態となっていきました。

無気力な日々は何があったのかよく体や心の状態を説明できません。カメラでいうなら、すべてのピントがぼやけているようで、あらゆる麻痺の只中にあり、ぼんやりしていて、どろりとした液体の中にいるような、とても不思議な状態ですから、何が起こったのかもはっきりと認識していなかったというか、寝起きの虚ろな状態が、四六時中続いていると言ったらわかりやすいでしょうか、一日中部屋にこもり、何をやる気も起きず、重力が今までの数倍かかっているのではないかと思うほどに体は重く、このままではいけないと思い、自分を責めても、まるで頭と体が分離されたように動かず、寝ては起きて、最低限の食事を取り、また眠る日々でした。

両親は当然私のことを叱責しますが、まるでうわごとのように聞こえ、現実感がなく、泥の中に足をとられているようなもどかしさがあり、感覚は鈍く、時として「一体何を言っているのだろう」と、阿呆のようにぼんやりするという状態になっていました。

そうになると、遠くから聞こえる叱責でも、自分がダメなことは重々わかりましたので、叱責に賛同しつつも、なぜこうなったのだと、自分への苛立ちや憎しみが重なり、自分の感情の重みにすら耐えられず、穴が開いた風船のようにしぼんで、なおさら無気力になり、感情すらも出すことに力が必要になっており、力を使わないことが一番安定するので、燃えカスのような廃人になって日々を過ごしていくことによって、いよいよ生きて自らを人目にさらすのを恥ずかしく思い、外に出ることにひどく嫌悪感を覚え、動く時間帯も昼夜逆転する生活が続きました。

やがて時の流れも、曜日の感覚も、日付もわからなくなり、思考も体も緩慢となっていたのですが、唯一の救いはインターネット上で詩のサイトなどに自らの詩を投稿していたということです。

人はどんな状態でも、なんらかの方法で主張していないと生きていけないのではないかと思います。寝ながらでも、よく天井を見上げながら蛍光灯に手を伸ばしてみたものです。生きている限り、人は生きているものを捨てきれない。しかし、家にじっとしていると、人とも交流しませんし、ましてや心から話し合える友人も、気軽にどこかに誘ってくれるような知り合いも私にはいませんし、いたとしても出られる状態ではありませんでしたので、インターネットと言う世界は、強いて言うならば「人と交流するための道具」であるそれは、最低限の理性を保つ最後の救済かとも思ったほどでした。

いよいよ生活が、外の世界と隔絶したようになると、父も蔑視だし、母はどうしてよいかわからずおろおろし、私は部屋から出ずにひたすらインターネット空間にさ迷い、今日何をすべきか、目的すらも見出せずに時間は過ぎていき、閉ざされた未来への絶望すらも水に溶け込む塩のようにどこかへ消え、やみくもにすべては散漫となっていました。

父は、パジャマのまま糸の切れた人形のように布団の上にへたりこんでいる私を見て、様々な罵倒にも近い言葉を投げかけます。とにかく蔑まれ、罵倒されることを以前に母に告げたことがあるのですが、「私もたくさん言われている。社会に出ればお父さんみたいな人はいっぱいいるからね。少しは慣れておかないと、耐えられないよ」と言うのです。社会人と言うのは、各々の存在を馬鹿にし、蔑み合うものなののでしょうか。それを当然として許容しながらも、表面では紳士・淑女のような態度と言動で人格者を装いながら、陰では品性の欠片もない言動を繰り返しているのでしょうか。

そして後に母が言った世界と同じものが実際にはそこにあり、上塗りのように人間の卑しさを見たものでした。父は、単なる社会という存在の代表者として、当然のことを言っていたに過ぎなかったのです。私は、社会から、罵倒に値する人間だったのです。

私が小さな頃に抱いた大人への恐怖。そして周囲の人間に対して抱いていた、あの騙しあいと、小賢しい駆け引きと、軽蔑されるかのような冷笑を見たときの、困惑と混乱と昏倒。年をとってもそれらには慣れることはなく、ますます我が身が混迷していくようでした。

夢を見ることはおろか、暮らしていく、ということなど、不可能でした。

心配してくれる方々は、ただやる気のない、物事をさぼっている人間のようにしか私を見ていませんでした。相談に乗ってくれるようなことを言い、素直に話してくれと親身なふりをしな

がら、現在の心情をありのままに述べると、甘えているとか、気持ちの問題だとか、いわゆる「世間一般の常識感覚」というものから、「社会はもっと辛い」とか「自立していかなきゃいけないのにそんなことでどうする」とか「将来が」「あなたが」「心配」「不安」などと、誰であっても変わらぬことを言って、私の話をまるで無視するのです。このことは他人を「もしかしたら外面が違うだけで同じものに操られているのではないか」と思うほど不可思議さを抱かせ、わざわざ相手の話を聞く必要があるのかしらと思うほど一方通行で、まるですれ違うばかりで、同じ言語でしゃべっているはずなのに、互いを理解するのが難解であり、私への意見の理由を「社会」や「世間」という得体の知れない、大きく揺らめいている実体のないものを背景にし、一瞬でもその「社会」や「世間」や「常識」とやらの疑問を差し挟んではいけないかのような威圧感を持って、私に対し「そうしなければならない」という内容の一点張りで、意思のやり取りや対話など無用の長物かのように、互いにとって不毛なやり取りが常に交わされました。

やがて、他人の親切にすら非情に懐疑的で信用ならぬものを感じだし、何かを尋ねられても、見せ掛けだけの親身な態度をとられても、はなから理解する気などさらさらないので、白昼夢を見ているかのようにうつろに黙り込むしかありませんでした。

人はわからないことはその身で知らない限りわからないのです。皆、わかったふりをして、偉ぶったり、知恵のない知識や、根拠のない見識を振りかざして、あたかもそれが真実かのように他者へ述べるのだとつくづく感じたものです。

それはインターネット空間に長くいればいるほど強く感じたものです。人がインターネットという道具を手にいれ、その繋がり方が変わり、個人のあり方が変わりました。とめどなく主観的な言葉があふれ、時として伝えすぎてしまうからこそ、他者の無数の言葉の中に埋もれるように、私の思いも出すことができましたが、主観の一方通行ゆえに暴力も数多く存在しました。

インターネットでは通常、人の意思は掲示板と呼ばれるところでやりとりされます。私の出入りしていた詩の投稿サイトも当然掲示板形式でした。あなたと出会ったのも掲示板でした。サイトによって掲示板の使い方が違ったりするのですが、たいてい人の意思あるところには、価値観の押し付けあいというものがありました。時には争いになり、一方的で投げやりで、ひどく侮辱的な言葉や、直接的でなくても遠まわしに、そうと表現したりして、書いた本人は書き捨てるように、二度と掲示板を見ないということも多々あり、掃き溜めのようになることもありました。口頭だと、言葉は風に消えますが、文字はいつまでも残り続けるので、一度きりの口頭とは違い、見るごとに反復され、傷を深めることもありました。

詩を書く人の多くは、内面に押さえ込まれ、時として屈折したものが、屈託した咆哮のようによめいているのだらうと思います。感じているからこそ表現できるのでしょうが、感じているものが陰鬱になることも、少なくなかったのです。その押さえ込めなくなったものが衝動となり、詩という独善的な世界を作り上げるのですが、そのほとんどは外ではなく、限りなく内面に向けられており、誰も本人の事情など知る由もないのに、本人の事情と昇華されない不満が、かの者達の中に渦巻いており、ああ、これはきっと私と似たようなもので、他者が理解してくれないという不満を自己中心的な怨念で練り上げていて、「私は私」だとか「私は正しい」と主張するばかりで、人が認めてくれないのならば、「これを理解できないお前の見識の浅さや馬鹿さ加減がよくわかりました」と、認めてくれなかった者まで否定するということまですることがあります。それだけならばよいのですが、自分が認められない、認めたくないものまで否定しにかかることもしばしばあり、狭義的な（まったく独善的）価値観が崇高で、誰も到達できないゆえに至高の価値であるかのように（独善的ゆえに他者が到達するはずがないのですが）、それを価値観として持っている自分は特別であるかのような考えまでもして、ただ私は一人で静かに詩を投稿してただけなのに、あれが悪い、これは詩ではない、と書かれ、もっともらしく装った、散漫で理解不可能な論評までもされ、もっとひどいのは目の敵にするようにして他の場所で暗に批判していたりなどして、あいつは詩のなんたるかをわかっていない、「自分を認めないものは敵。自分と価値観の違うものも敵」という姿勢が強烈に伝わってくるようなことを堂々とするのです。これは詩の世界だけかと思っていたら、まったくそうではなく、どこかしこでも同じようなことが行われていることを目の当たりにするたびに愕然とするのです。

個人と存在性。主張と攻撃性。そして痛み。人は愚かさや滑稽さを装飾して、いかに自分を尊重し、つまらぬ意思を保とうかと、やっきになっているようです。

私は文字の世界でも恐喝されるような恐怖を感じ、ガタガタと震え上がり、狂いそうになるのをこらえながら、それでも自分の場所はもうここしかないのだと、すがりついていたものでした。随分と傷つけられ、きっと傷つけたことだらうと思います。

現代では道化の仮面を取り去って、人間的本性を現す場所が、匿名性を持ったインターネット空間なのかもしれません。

生活時間帯が深夜主体となってくると、外に出ても人に出会うことはまばらです。出会っても、他人同士なのだから当たり前なのかもしれませんが、人らしい会話をすることもなく、外を歩くのでさえ気恥ずかしく、人と目を合わせるだけで、後ろめたい気持ちになり、嘲笑や罵倒でも投げかけられるのではないかと気が気ではなく、外に出ても逃げるようにして家に帰るのですが、インターネットでは私と同じような生活時間帯の人間も多く、深夜に掲示板の返信などが来ると、思わず孤独でめそめそと泣いてしまいそうな人恋しさから多少でも解放されて、人と交わることができ、自分と似たような心情の人間を見つけると、たちまち親近感を持ってやりとりをし、どことなく安心した気持ちになっていました。罪にまみれた者同士、仲良くできるということでしょうか。人を捨て去って、孤独になることは自分にはできませんでした。

罪の反対語は、孤独。

良心があるとしても、それは人との関わり合いがあるから存在するもので、人と誰とも関わらず、ひっそりと人間関係を遮断した世界にいれば、ただ自然の摂理にのみ従えばいいだけで、罪の概念は消え去るでしょう。

しかし人が本当に孤独を望むとき、それは限りなく死に近づくように思います。どのような状態でも人の気があまりにもなくなると寂しさを抱くものだと痛感しました。相変わらず体は鈍く、思考はぼやけ、泥の中をもがいているような日々の中、人恋しくなるので、誰かと時折話したくなり、掲示板などにお話をしたい旨を書くと、夜眠れない女性が返信をしてくれたりすることがあり、そのまま多少のやり取りをすることがあるのですが、ごくまれにやりとりが長続きすることがあり、お互いの携帯電話のアドレスを交換し、よりプライベートなやりとりをすることがありました。

男同士のやり取りというものは、とてもさばさばして、目的を告げあうとたいいてい満足してそれ以上の互いに偽りあった道化のやりとりを鬱陶しく感じるようなのですが、これが女となると、いつまでも道化のサービスを喜び、親身になって偽善やおどけを演じますと、それが虚飾の仮面だと気がついてなのか、そうでないのか、いつまでも喜び、より自分のことを話したがったりするのです。私は自分のことを話そうと心の内側を探ってみる時、まるでがらんどろのような、ぽっかりした穴を感じ、たちまち落胆とともに閉口し、一言も発せられなくなるので、もっぱら聞くほうが楽なのですが、それが女にとってはとても心地よいらしく、「私のことを思ってくれている」とさえ感じるようで、時として感謝の言葉さえも告げられるのです。

私は「ありがとう」と言われるたびに恥ずかしい気持ちになり、わっと発狂しかけました。私は自分自身のためだけに、この孤独をまぎらわせたいためだけに利用しているのに、道化の仮面に向かって言われる感謝の言葉は、人への「騙し」や「裏切り」を心の中で際立たせ、大変悲しくさせ、「この仮面は自分ではなかったのだ」と、仮面を取り払って泣きながら謝りたくなるのです。

私は誰かが思うような人間とはまったく違うのです。期待されればされるほど、相手の気持ちが高まれば高まるほど、相手を失望させてはならないと道化をよりいっそう演じだし、相手に自分の本性がわからなくなるほど、いくつもの仮面を用意しだすのです。断ることも失望に繋がるのではないかと、相手の思いを拒否できなくなる私は、常に何かしなければならぬのではないかと強迫観念にかられ、道化といえども、相手に合わせて「好き」という言葉を乱発するやり取りをしていると、あたかもそうであるかのような気持ちになり、そうでなければならぬ気になり、自分を追い詰め、決して自身の気持ちに疑いを持ってはいけないうのごとく、暴れそうになる本心に鞭を激しく打って大人しくさせるのです。

私は掲示板で親しくなった女と恋に落ちました（いえ、本当を言うと恋や愛などというものがどんなものかもわからないのです。好きだと言い合い、愛していると言い合い、その実はまったくの偽りであったとしても、その関係はあるかのように過ぎ、ある瞬間に虚飾の伽藍が崩れ去ったとしても、人の中でどこか美しく、時には醜く変化していくそれは、私には永遠に理解できないものなのかもしれません）。名前をマリエと言い、時折やりとりする内容から、神を信奉しているということはわかっていましたが、詳しいことは興味がありませんでした。

毎日連絡を取っていましたから、通信費はかさみ、親からのお小遣いではとてもまかないきれなくなり、連絡を取りたい一心で生まれて初めてアルバイトを始めました。

人生には目的があると、目的に向けての気力が生まれるようです。その先がどうなるかわからなくても、生きる理由があると、重苦しい気持ちも体も、ある程度は無視できるものです。だからといってからっぽの心の中に何かが流れ込んで満たされるわけではなく、からっぽの心の周りを別のものが満たしているようで、あいかわらず自分の心の中心が何も変わっていないことに気がつき、虚しい気持ちにはなるものの、初めての仕事の大変さに、きりきりまいになりながらも、マリエのためと思いつつ、多少のことは無理をしない程度にできましたが、仕事が終わった後は、ほとんど疲れよりももっと脱力したように放心状態でした。

そんな中、互いの信頼関係を作ろうというのか、仕事が終わった後に職場の仲間飲み会などがありますと、たちまち憂鬱になりました。仕事中は「お客さま」と言い、会社の利益や効率のために数字を信奉し、会社なくして社員はあらずという考えで、人件費やら、売り上げやら、商品効率やら、人の動き方一つまで、計算式に当てはめたように、数字をあげないものは「役立たず」と言い、たちまち酒が入ると、仕事の愚痴を言い、職場の人間関係のことを言い、仕事で対峙した人間のことを言い、人の仕事ぶりを蔑み、私のダメだしを言い、地位を笠に着て、他人をせせら笑う姿を見ると、ここだけではなく、どこかで見知らぬ誰かにこのように言われているのではないかと戦慄し、手取りの給料がいくらだ、売り上げがどうだ、今度はこうすべきだ、あいつが、などと皆上司がいる時はさも当然のごとくそれが正しいように肯定しますが、今度は上司抜きで仲間同士で集まれば、上司がどうだ、あいつが、仕事もできないくせに、この前の客が、金が欲しい、自分だけよい思いをしたい、あれを食べたい、これをしたい、あんなやついなければいい、などという復讐めいた話を聞いていますと、人間生活のつましさとというよりも、結局は強欲に飲まれてそれにすら気がつかず、何者の幸せも考えない、所詮は金だけの関係で成り立っている「立派な社会人」の浅ましさと卑しさを見せ付けられているようでした。

私は「社会の偽の一員」として、彼らと変わらぬ道化によって難なく毎日を過ごそうとしながらも、いったい自分が存在しているこの社会は何か、と考えるのですが、生きようとしのないものにとっては、ひどく無駄で無意味な気がして、答えは見つからずじまいで、毎日が釈然とせず、楽しくもないものをあたかも楽しそうにして疲れ果てるのです。

そんな中、社長が一度だけ視察にきたことがあるのですが、その時の上司の豹変振りといったら驚くばかりで、まるで親を前にした子猫のような無防備さで（私にとっては水の底に塊で蠢いている小さな幼虫よりもおぞましく不気味なものでしたが）、慇懃に頭をさげ、ご機嫌をとるべく様々な美辞麗句を並べ立て、その上司に注意されて直した私の仕事まで自分の功績のように控え目に言っており、そのあつかましさと狡猾さときたら、到底真似のできないほどの精巧さと勤勉さで、初めて出会えばあれこそが本性のように見えたが、彼の内側にはもっと愚劣な企みが見え隠れし、それが彼の中では計算され尽くし、詐欺めいたものであることはすぐにわかりました。

「業績第一」「お客様第一」「みんなでがんばりましょう」などといった言葉が、「私たちのためにがんばってお金を稼いでください」と言うことと、どう違うのか、寸分の違いすらわからなく、彼らの励ましや仕事に対する真剣さすらも白々しく見えてきて、投げ出したくなる気持ちを抑えながらも、日々疑問は大きくなっていきました。

きっと彼らは、毎日書類とにらめっこをして、出たり入ったりするお金のことばかり考えて、いわば算数めいたことだけをして、さも数字の上下が一大事そうにわめきたて、数字に表れない一人一人の気持ちや未来など、どうでもいいに決まっているのです。

私が独り言のようにマリエに「お金ってそんなに大事なものののかな？」と尋ねると、「え？ お金欲しくないの？ お金大事じゃん。お金ないと生きていけないよ」と当然のごとく言うので、確かにそうかもしれないと思いながらも、お金というものにあまり執着のない私は（しかし、ないと狂うようにして人の金すらも使った私ですが）、社会の人は金に執着してなんとかしてそれを手に入れようと躍起なのだと、なぜそうまでするのかと、疑問は解消されることはありませんでした。私にとって、人が生活をするために最低限得るお金というものに、ひどく儂さというか、泡沫の夢のようなひどく切ない虚しさを感じていました。お金を使うということにも充足感はなく、装飾品にも興味はない、遊びにも興味はない、確かにお酒が買えないと不便するかもしれないとは思いましたが、マリエにも稼いだお金のほとんどすべてを使っているし、親元で生活費がほとんどいらずに食べていける状態にありながらも、人が当然のように執着する、最低限の衣食住にすら、どうなってもよいという無頓着さがあったので、いわば生活していこうとする感覚すらもない私にとっては、生きる目的がなくなれば意味を失うもののように感じられて、ただ寂しく、新しい電化製品が欲しい、旅行に行きたい、ブランド物が欲しい、有名レストランで美食にふけりたいなど、お金の通して見える世界、夢を叶えるために必要なお金に必死に意味や欲望を見出す人間を逆にとてもうらやましくも思ったりしたのです。かといって、そう考える自分も、お金がなければ、マリエとの関係も容易に消滅してしまいますし、インターネットや携帯電話にもお金を使っていますから、人と関係を結ぶにも、お金、最低限生活するにも、お金、職場の仲間との関係を円滑にするのにも、お金、社会人というものになれば、道化を演じるのでさえ、お金が必要になり、お金が無くなれば何もできなくなることに意識が明滅して狂いそうになり、プラットホームで電車を待つ時など危うく、通過する特急電車に脱兎の勢いで飛び込みそうになるのをこらえていました。

「お金」に、執着をする。

母もよく、私が何かをしたいとつぶやくごとに「お金はどうするの?」と、必ず釘を刺すように言っていました。

ああ、この社会は資本主義社会で、お金という資本を中心にしまわっているのです。そもそも資本主義とはなんなのでしょう。人々は資本主義の中で生き、人の欲しいもの、売れるものに価値を見出す市場主義を迎合し、お金になる商品を見つけては、社会という市場に流しているのですが、売り続けなければ、お金がなくなり、生活そのものが消え果てます。お金があればあるほど幸福だと、安心、安定なのだと、思い込んでいるように、ひたすらお金を貪ろうとしますが、お金に固執する人間生活の中にこそ、こぎ続けなければ倒れる自転車に乗っているようなもろさと、「お金、お金はどこだ」と幽霊のようにさ迷いぎらついた目で周囲を見渡す、怪談めいた、限り無く育つ強欲な化け物のような危うさを人間は飼っていて、いずれは幽霊に身を乗っ取られ、化け物に身を食われるのだと思うと、滅入るような気持ちで、そこに適応できない私はどうしてよいかわからず、「お金」そのものに幸福はまったくないようにも感じ、なぜお金のことばかり考えるのだろうと疑問を感じながらも、私ごときものが一人ここで思っても世界は、決められた仕組みは、どうにも変わらないという諦観と無気力さがまた浮かんで来ては社会に反抗しないことこそが正しく安寧であるような錯覚すら抱いてしまい、抵抗の意思すらも思いつかなくなっていくのでした。

しかし数多くの性的商品がありながら売春を否定し、犯罪を否定していながらも、企業などは「イメージ」という面体で賢く人を騙し、お金を稼ぐことを主としながらも払う側になればひどくけちになり、仕事をしている時は払う側をどのような形でも相手にしていながら、いざ自分が払う立場になると、自分だけがお金を払っているかのような、時折理不尽とも思える高圧的な主張を聞いていると、立っていられなくなるほどのめまいを感じます。譲歩すると、にこやかながらも要求は少しずつ増え、拒否すると、ひどく気分を害するか、ひどい場合は激昂し、罵倒するありさまで、つまり、要求に従わなければ、互いにとってまったく価値のない関係であり、してあげることはせずに、されることばかり望んでいるのです。どこもかしこも、自分が利益を得るにはどのようにすればよいのかと、巧みな知恵や罠をめぐらせて、催眠術にでもかけるように、人を納得させますが、やはり頭のいい人たちが考えることは、人をいかに騙すかということに重きが置かれているようで、社会で高給を取る人格者たちの、暴挙を暴挙だと人に思わせない、美しいほど機械じみた虚飾の花が見えるたびに、これは自分のような阿呆はかなうまいと思ひ、すぐさま白旗を上げたくなるのです。

暴挙と主張の境目はどこに。

主張を超えて、明らかに暴挙に踏み込む人間は、少しでも自分が得をしようと、あらゆる理屈をつけて、せこさや図々しさを隠し、相手から奪い、それを「悪党」と思わず、当然の権利だとか、「お金を払っているのだから」という圧力をかけて、ゆすりにも近い行為で、お金を払った相手が自分に尽くすことは、払った分のお金と公平に交換されるべき価値と思っているのを傲慢と思うのは、さも間違いであるかのような考えさえあり、「じゃあお前はどうなんだ」と言われる自分すらも例外ではなく、お金を払った分の満足がなければ「損をした」「金を払う意味がない」と感じ、傲慢は止められず、誰もが悪徳に手を染め、蔓延させている中で、他人の傲慢に「見て見ぬふり」を決め込んで、自分は「ちゃっかり」とでも言えばかわいげがあるのでしょ

うが、その凶々しさと言ったら際限がなく、どんどん膨れ上がってくるのです。結局は金を持っているものが絶対者なのではないでしょうか。

そのようなお客や仕事関係の人間を相手にし、上司を相手にし、一度でも優位に立てば、たちまち見下すか見下されるかの険悪な環境で、無理をして動いているものですから、卒倒寸前になり、疲れ果てた声でマリエに職場の愚痴を言ったりすると、優しく慰めてくれました。自分も堪えきれなくなり、慰めや捌け口を求める。悲しいほどに、彼らと同じ存在でした。

あれこれと無駄なことを考えた憂鬱を次の日に持ち越し、力なく笑っていると「お客さま相手にしているのだから」などと、昨日さんざん文句を言っていた上司に言われたりするのです。やはり大人は矛盾と欺瞞を抱えながら社会を支えているのではないかしらとさえ思えてくる虚飾の世界と、「日常」という偽善の反復に、ひどく疲れる思いがしました。

上司の「売り上げを上げるために努力する」という言葉は、上役たちが計算式に当てはめ、赤字だとか黒字だとかで、部下に命令し、「削減」できるものから「削減」して、「数字をあげて」いくのだということは、日々恐怖しながらわかっておりましたし、いつ我が身にふりかかり、数字に貢献できず、役に立たない自分が「削減」されるのか、そんなことよりも彼らの贅沢品こそ「削減」できないものか、その裏できっと社会が迎合しないような秘密めいたものにお金を払って、楽しんでいるに違いないのだとも疑い、もしそうだとしたら、私たちから「削減」して吸い取ったものを自分たちの贅沢品や生活に当てているということになり、「削減」と「搾取」はもしかしたら同義語かしらとも感じたり、また彼らではないにしろ、ニュース、コメンテーター、新聞、雑誌など、「倫理」だとか「人権」だとか「権利」などを掲げ、「社会悪」に対して批判が繰り返されていますが、お金に換えられるものがあればそれを売るのが市場主義であり、お金が流れているから表ではありえないものも陰では成り立っており、それがなくなると困る人がいて、市場が、裏組織が、社会悪が成り立つように参加している者がいるからこそ、当然のごとくなくなるのだという事実を公然と黙認しながら（それとも無知さゆえの主張なのでしょう）、「正義」を掲げ、悪を徹底排除しようとする滑稽さを見ると、これもまた彼らの「道化」なのではないかといぶかしがり、この社会が誰かの脚本で成り立つ「劇場」にも見えながら、せせこましく生きている自分のすべてが、彼らの「正義」に糾弾される思いがし、自分の生活の手段や生きる場所すらも消えていき、いよいよ自分の地を這う虫のような道化も、ここまでのような実感ができて、生活を支えるお金を出す立場のものや、「社会正義」の前に「おかしい」と思いながらも、なんの抵抗もできないまま、どんどん言いなりになり、追い詰められ、絶体絶命の閉塞感から自暴自棄の狂人たる道化に走り、当たりかまわず他人に狂気をぶつけ、一生を鎖に繋がれ、牢の中で過ごしていたほうが、まだましな生き方ができるのではないかと思ったほどです。

そんな私でも少しずつマリエとのやり取りは深まり、いよいよ誰が見ても「二人は愛し合っている」という状況になっていき、自然と「会いたい」気持ちが高ぶってきて、少しずつ貯めていたお金を使って、新千歳で心躍るような開放感とともに飛行機に乗り、初めて一人で羽田に降り立ち、東京の雑多な人ごみを掻き分けながら、列車で宇都宮への長い道のりを経て、彼女へと会いに行きますと、虚像の城は木っ端微塵に打ち砕かれました。

あれだけやり取りし、言葉を積み重ねた日々は一体なんだったのかと思うほどの手の平の返しようでした。会うなり大変ごちなく、初めて会ったので緊張しているのかと思っていたのですが、そうではありませんでした。彼女の家に入り、寝るスペースが彼女のベッドしかなかったので一緒に寝るなり、マリエは顔が思っていたのと違うので大変ショックを受けたと告げたのです。だから顔を見るのも嫌だったのだと。

心で繋がりあっていただけではなかったのです。

マリエの優しさや愛情は、自分の価値観のために向けられており、私に向けられたものでは一切なかったのです。暗闇の中で「声は同じなのに」と耳元でつぶやく彼女の言葉は陰惨に、そして見事なほどに私の心の中の信奉の石塔を破壊し、自分はマリエに愛されているのだという自尊心も自負心も奪っていきました。

マリエは人を見てはいない。自分の心の情景を見ているに過ぎない。

平静を装っていても、心の中は轟音をうめきたてながら修羅の烈風が荒れ狂い、怒濤の勢いで私が少しずつ育てていたすべてのものが壊滅していくのがよくわかりました。

それでも私は残り香を、途方もなく彼方に見える蜃気楼を掴むかのように、彼女にあたたく接していましたが、心の中は悲惨なわめき声を上げながら、苦痛にのたうちまわっており、まるで人間の心の内の隔絶、価値のあるものと価値のないものの選り分けによる残虐性を見せ付けられたようで、それはひどく残酷でむごたらしく、確実な致命傷たる一撃のような気がしていました。

私はどこかで「好きになるきっかけがあったのだから、まだなんとかかなるのではないか」と思っていました。マリエの誤解を生み出した閉塞的な幻も、心が通じ合えば、その壁がいつか溶けだし分かり合えるのではないかと希望を持っていたのです。

彼女は宗教を信仰しておりました。破戒僧のような行動はとっていたものの、最後の一线だけは越えることはなく、週に二度ほどある集会には必ず出ていましたし、結婚するまで処女であるという教えは家族の面体もあるのでしっかりと守っていました。

私は信仰を否定するつもりはありませんでしたが、マリエには宗教をやめて欲しいと願っていました。というのも、本来他宗派とは、付き合っても、結婚してもいけないという教えなので、このままいけば別れることは決まっていたのです。

私が気になり、彼女に多く質問したせいもありますが、よくマリエは宗教のことを口に出しました。時として、興味があるなら紹介すると言ってはくれましたが、神の元へ誘われることは私を大変戦慄させました。ふと、ヤエコのことが思い浮かび、私が過去に人にしたことや、短い人生ながら思ってきたことや、騙し続けてきた己の汚さを改めて恥じ入りながら振り返り、今マリエによって崩された瓦礫の山で呆然とする自分の心の弱さから、彼女と一緒にいたい邪な想いから、神を逃げ場所として都合よく利用するだけなのではないか、道化の裏に潜んだ伶俐狡猾さから、神を崇めがらも、己の罪をただ一心になすりつけて、利用するだけなのではないか、罪人のような私が、限りなく白いものに触れる恐怖は底知れず、神に従い教えを守るふりをしながら、なおも積み重なる罪に、悪魔の所業で遵奉の象徴を踏みにじるのではないかと、ただただすみあがり発狂寸前の状態にまでなるのです。もはやどのような崇高なものを掲げようと私のような下賤の者の罪など消え去ることはないのです。

たとえ神の理想に近付くための努力をなそうと、陰でしっかりと積み重なる罪に、ますます都合よく救いを求め、己をごまかし、より下劣な行為に走ることは目に見えていました。その自分のあさましい本性に気がついた時、心底衝撃を受けたのです。マリエを責める筋合いは、私にはひとかけらもなかったのです。私は常に自分を弁明しながら生きている醜い人間なのです。

マリエはひどく私の顔が気に入らなかつたらしく、まるで私が裏切り者かのような扱いをするときがありました。私が必死に彼女の力になりたいことを告げると、「お前、所詮人間じゃん」と言われたこともありました。まるで汚辱の烙印のようなその言葉は、私を表すに充分すぎるほどで、神の潔白さの前にさらされる我が身の汚らわしさと、これからも神に背きながらも、人間にすらも背きながら、社会になじめずに、世界の隅で我が身を隠蔽しようと思えばおののくせせこましさと、ずるい臆病さに心の穴はどんどん削れて広がり空虚が増していくばかりでした。

今考えれば大変幼稚で、たいそうな思い違いではありましたが、私はマリエへの気持ちが本当だと、好きなのだということを知ってもらいたく、彼女の体を熱烈に求めました。しかし、その気持ちは嘘だったに違いありません。私は側に横たわっている女の肉体に興味があって、欲望と、浮ついた根のない愛情という倒錯と、勘違いを絡めながら、マリエの肉体で遊びたかったのでしょう。

彼女は多少の抵抗を見せましたが、ほどなく甘い声を出し始めましたので、これは少しでも私のことを受け入れてくれているのではないかと思っていたのですが、眠りから覚めて朝を迎えれば、マリエが「昨日のことはとても嫌だった」と言いましたので、自分のはしたなさに散々打ちのめされ、自らの行いをとても恥じ入りました。ヤエコの時と、何ひとつ成長していない自分

がいました。

そしてこの後、マリエは私の滞在中にインターネットで知り合った男と会うと言ってでかけていきました。「今日中には帰れると思う」と言って出かけたのですが、夜遅くになっても帰って来る気配はなく、隙間風の入る部屋の肌寒さと、一人でいる心細さと、彼女への心配、そして車に繋がれ身を引かずられ、肉が磨り減っていくような、激痛を伴う嫉妬心が積み重なり、連絡を入れたのですが、携帯電話は電源が切られており、機械的な音声流れるだけで繋がらず、一晩中起きて彼女へと連絡をし続けていると、ようやく朝方に連絡がつき、事情を伺ったところ、遠方で帰れなくなったのでそのままホテルへ行き、裸体を晒し、触れさせ、今は彼が寝ていてホテル代の清算を、お金がなくてできないので、彼が起きてから帰る、と言ったのです。マリエは私がして嫌がったことを、その男に強引にさせられたことを喜ぶように言っていました。「気持ちよかった。あの強引さが好き」とまで言うのです。

人生で初めて、言葉を受けて、激しい濁流のような衝撃に、魂だけが吹っ飛ばされて身から離れたのではないかと思うほど、突然の閃光に目の前が白くなり、気絶するかと思いました。激しい嘔吐感に、自分が今現在、どこにいるのかも、これが現実なのかもわからなくなり、初めて光を失った盲人のように、周囲にある様々なものに触れては、それが何かを認識していくほどでした。落雷が直撃していたほうが、まだ即死できてよかったかもしれません。

結局マリエは私のことが嫌いなだけだったのです。自分の好きなことはとことんしたくて、嫌いなものにはどのような扱いをしても心一つゆるむことはないのです。たとえ私が阿鼻叫喚の凄惨な地獄に蹴落とされて、針の山に体を串刺しにされる血の苦しみを味わっていようと、すでに私には興味がなく、外を歩いていて通り過ぎる、意味を持たない他人のような存在なのですから、気にすることもないのでしょうが、その赤の他人が意思を妨げることは、とことん気に障るのです。

マリエが何食わぬ顔をして帰って来ると、どうしてこのようなことをしたのか聞きました。すると「私のしたいことをして何が悪いの？別にお前には関係ないじゃん。私お前のこと嫌いだもん。もうかまってくれなくていいよ」と虫でも追い払うかのように言ったのです。

確かにその通りでした。嫌いだと言われても、彼女の家に住んで、しつこくかまいつづけているのは私のほうで、マリエの意思を知っているのに、私は自分の気持ちを勝手に押し付けているに過ぎないのです。思いを遂げるための努力とは、時として著しく人を傷つけます。相手の意思に反することがマリエを傷つけるのなら、もはや従うしか方法は思いつきませんでした。時間が経つごとに、抑えつけられた怒りと憎しみが、膨れ上がるごとに、かつて私がヤエコにしてしまった凶行が、またここでも繰り返されるのではないかと、震えが体中をかすめ、マリエすら得体の知れないものに感じ、激しく恐怖し、帰ることにしました。

帰りの日、マリエは私に随分と優しく接してくれました。やることを邪魔さえしなければよいということなのでしょう。マリエの部屋から大きな道路に突き当たるまで、右側に畑を見ながらの一本道になります。マリエはその日、友達とお泊まり会があるとのことで、一緒に部屋を出て、最期の道を歩きました。何をしゃべったのか、もう覚えてはいません。冬場でしたが、栃木は冬場には雪は滅多に降らないらしく、畑には雪すらもなく、視界は開けていて、虚しさを煽り立てました。ただぼんやりと、泣く気も起こらず、あっという間に大きな道に突き当たった時、お互いの乗るバス停が反対だということで、そこで別れることにしました。

マリエは私を抱き締め、「またね」と言ってキスをし、そのまま背中を向けて歩いていきました。マリエは一度も振り返ることなく、私は彼女の背中をいつまでも名残惜しく眺めていました。

帰りのバスや電車にゆられながら、孤独になりたいと、ふと思ったものです。何かをしたいという欲求を持つものが誰もいなければ、信頼も何もない。自分だけ好き勝手やればいい。生きることも死ぬことも、何ひとつ手助けを望まず、何も利用する気がないのならば、食うか食われるかの自然に身を任せればいい。もし心の痛まない世界がそこならば、いや、しかし、自分では生きていけないだろう、と我が身に苦笑しながら、ぼんやりとマリエの若々しく美しい体と触れていた時のぬくもりを思い浮かべ、もう誰とも関わらずたった一人になりたい気持ちと、マリエのところに戻れるものなら戻りたい未練がましさとで、侘しいばかりで、感傷が込み上げてきて、人目もはばからず泣き喚きたいのを必死に抑えておりました。

帰り、飛行機の手ケットが取れず、高校時代の友達の家が強引に押しかけ、泊まらせてもらうことにしました。いきなり電話をかけて泊まらせてくれと頼んだものですから、友達の両親も大変迷惑そうな顔をしながら、食事も寝る部屋も与えてくれました。高校のときは散々恐怖し、疑い、道化によってごまかしていた仲なのに、いざ自分が窮すると、なんでも利用できるものは利用してやろうという、いやしさとずる賢さに、ふっと私が今まで逃げ回り、震え上がっていたものと重なり、何ひとつ違いがないことに衝撃を受けるとともに、いつまでもマリエと別れたことが悲しく、切なすぎるほどに心の中を暴れまわるものですから、夜中一人でめそめそと泣き、いつまでも途切れることのない涙で朝を迎えました。

次の日、すぐに帰る気も起きず、不慣れな東京の街をふらふらと歩いておりました。あてもなく、他人に無関心な人ごみの中を歩き、電車の中の疲れ果てた目をした人たちをぼんやりと眺めると、彼らはどうして生きていられるのだろうと、つまらない考えすらも浮かんで、その考えはまったく自分の感情の押し付けだったのですが、妙に自分のみじめさに、誰か刺し殺してくれないだろうかと思いながら、この街には機能性のみがあり、街という人体を維持するために、血流のように流れる人波をいつまでも座り込んで見て、自分があの血流の中には一切混じれず、もし混じろうものなら、社会という体に毒を流し込むことになり、拒否反応を起こされ、たちまち排除されるのだと思うと、死んだほうがいいのだと実感するのですが、自殺することは怖く、殺されるのもまた、自分の腐乱した死体から毒を蔓延させることになるだろうと、生きるも死ぬも、当てを失い、人知れず消え去りたい気持ちにあふれたのでした。

都会の喧騒に取り残されたように陰鬱めいた虚しい気持ちでいると、父から電話がかかりました。母が病院に運ばれたので、すぐに帰れとのことでした。内容を聞くと「狂った」としか言わないので、一体何のことかと思い、すぐさま帰ることにしました。その時は、母が病院へ運ば

れたというよりも、マリエとの衝撃のほうが大きかったので、母のことはマリエほどには衝撃を受けてはおらず、面倒なことが起こった、という程度にしか考えていなかったのです。むしろマリエを失ったことで、自分には何もかもなくなってしまったのではないかと思われるほどの空虚だけがあったのです。

モノレールに乗り込み、夕暮れも過ぎた東京の林立しているビルの間を歩きながら、無数の窓のモザイクのような明かりや、コンクリートの合間から見える街灯や信号や、すっと勢いよく伸びて絡み合ったハイウェイを走る、車の、風にたなびく糸のように流れる光を見てみると、まるでここがどこなのかもわからなくなりそうで、万華鏡の世界にでも迷い込んだみたいに悲痛な恍惚感に襲われて、モノレールの終着に辿り付いた時には、もう自分がこの世界から完全に消えてしまい、誰一人として自分を思い返す者はいないのではないかとさえも感じていました。

空港でゲートをくぐり、自分の住んでいた、いえ、自分の匂いが染み付いていそうな嫌悪感さえ抱く故郷に帰ることが、故郷に帰るといふ懐かしさを抱くことが、また過去に舞い戻って、何もない世界に浸りこむような気持ちが出て、虚しい切なさや落胆に体が包まれ、東京土産を手にいっぱい持っている親子連れやスーツ姿の人たちを見ると、むしろあたたかみを持ってその土産を渡せる存在がいることがうらやましく、また逆にまるで自分とは別世界にいる人間をひどく遠くから眺めている現実感のなさが、砂に打ち付けられるように緩慢に心を削っていき、底なしの虚無感を少しずつ深めていくようでした。

その日、夜の帳に包まれた上空には雲ひとつなく、飛行機の離陸とともに見えてくる地上の星々のような明かりが、妙に透き通って輝いているようで、少しずつ遠くなっていく東京の街が、今まで長年育ってきた故郷よりも思い出にあふれた場所である気がしてきて、どこからともなく涙が溢れそうになるのを堪えるのが精一杯でした。

羽田から新千歳までは昼寝をする程度の時間ですぐに着いてしまいます。一瞬の様変わりに、思い出の余韻に浸る間もなく、北海道の大地をまた踏むと、ひどく興ざめし、これが自分の現実なのだ、いよいよ落胆激しく、現実を拒否したい気持ちに、家に帰るのも抵抗がありました。私は私が一番嫌いなのです。どうして嫌いな自分が積み重なっている地にまた戻ってこなければいけないのか、いつそのこと消えてしまえばよかったのに、なぜまだ現実世界にいるのか、死を望むよりも、その頃は自分が存在していることすら恥ずかしく、悲しく、この地上に骨や塵が残ることすらも汚辱である気がして、死してもなお、あの人間の本性から、罵倒と辱めと脅迫めいていて高圧的な助言が（死してそれが無駄とも考えずに）ふりかけられるのかと思うと、死ぬことすらも恐ろしいことでしかありませんでした。

家に帰るなり、私は父から叱責されました。私が家を離れ、どこをふらついていたかもわからない状況で、母がひたすら心配していたこと、大学の出席日数が足りず、単位もことごとく落とし、家にばかりいるので母が心労のあまり倒れたことを言われましたが、まったくその通りで、父の「お前のせいであいつが狂ったんだ」と連呼する気持ちもわからないまでもなかったのですが、顔を合わせるごとに繰り返されると、さすがに心も耐えられなくなってきて、叱責の重圧に逃げるようにして、部屋にこもり、なるべく父と顔を合わさないようにしていたのですが、いよいよ大学のことも自分で限界を感じ始めて、もう辞めたいとの意思をか細く告げたりすると、「お前は馬鹿だな。世の中は法律で動いているんだぞ。法律さえ学んでおけば役に立つし、食いつぱぐれないのに、世間知らずで、高校出で、学もないお前がどうやって生きていける」と言ってくるものですから、マリエのこともありまして、思わず父に向かって「法律？最終的に人の行く末を決めているのは法律ではない。あなたじゃありませんか」と、マリエにされて溜まった鬱憤のようなものも思い切りぶつけたくなりました。しかし、私にはその勇気が起こらず、口論さえもできずに、いつも「このまま黙っていたほうが何もかも平穏に終わるのだ」と、何ひとつ自分の気持ちも考えも告げず、ひたすら自分の感情を消し、父の声が木々の間を激しくすり抜けた時に聞こえる、風の不気味な音でしかないのだと思い込むようにしました。たとえ自分の意思や考えを告げたところで、父は決して「そうですか」とはならないのです。私の気持ちが、考えが、断固あってはならないという迫力でまくしたてられるものですから、相変わらず押し黙っていました。反論されると、正論のように聞こえるし、それが弁解の余地もない自分自身の事実そのものでありながら、結局水と油のように混ざれずについて、生きていけない息苦しさ、重苦しさ、生きる気力のなさ、少しずつ広がってきている虚無感に、心は底の抜けたバケツのようなものに「希望」や「社会常識」という水を流し込んでいるようで、いつも白々しい気持ちで、かつどこかへ流れ込んで消えていくものを、いつも物悲しく見つめている自分がいて、自分のことすらも他人事のように、「お前のことだろ。お前の将来のことを言っているんだぞ」と言われても、正直何のことだか実感が湧かず、少しずつ失われていく「現実感」というものに、どう抗ってよいのかもわからず、流されるというよりも、むしろ自分の中から、「自分自身の存在感が薄れていく」感覚で、自分が誰でもよい気がして、もう何がなんだかわからなくなりそうでした。

母親の容態は見た目ではよくわかりませんでした。少々疲れているような感じはあり、何かを思うようにぼんやりとしている時がありましたが、私のことを懸命に心配しているようで、「大学は辞めない方がいい」と言われると、母にもまた自分の反している意思を告げることができず、従わなければならないような気がしてきて、結局「辞めたい」ことも伝えられないまま、かと言って、次々と何事もなかったかのように単位を取っていく人たちと自分を比べると、大学に寄り付く自分の存在が彼らにとって恥辱であるような気がしてきて、もはや鼻で笑い、彼らの馬鹿さ加減をことごとく見下していた自分が、まさに彼らの嘲笑すべき象徴に成り下がり、大学の講義中にゴミでも投げつけられても文句は言えないほどに落ちぶれてしまったのが、余計に大学に行く気持ちを削ぎ、いざ気力を振り絞って講義を受けに行くと、「この学問は何のために」「誰のために」という疑問が浮かび、生きる目的がなく、その学問への目的意識さえもない私にとっては、ひどく無意味な気がしてきて、やはり大学から足が遠のいていくのでした。

結局、術のない私は、元の引きこもった生活に戻ってしまいました。マリエの衝撃もあり、そ

の時期は女の裸を見るだけでも動悸がして、息切れがし、半年以上はぼんやりしていた時期があったと記憶していますが、また傷が時間とともに薄れてくると、誰かの役に立ちたい、立てなければもう完全に人間から必要とされなくなってしまうという気持ちから、少しずつインターネットの人生相談サイトでコメントをするようになっていきました。彼らにコメントする自分は、自分でも驚くほどに優しい自分で、自分よりひどい状況や心の重みを吐き出す切実な文面を見ると、妙に安心しきり、かつ必死になることができました。その反面、とても幸せそうな状況を見ると辛くなり、自分があの輝かしい世界に居ることができない日陰者のような気がしてきて、憎しみすらも沸き起こりそうな心を抑え、暴言を吐き捨てそうになる前に、目を背けてそこからいち早く逃げ去るのです。

日陰者。

いつの頃からか、この言葉がすっかりと馴染んでしまったような気がします。むしろ裏とか陰とか、そこに生きる人々に自分はしっかりと馴染むような親近感や、その悲痛な叫びを理解できるのは自分しかないのだという使命感すらも抱き、そう、この感覚は、どこかに憂えのあるような微笑みを向けていた高校の時のヤエコへの親近感とよく似ており、彼女にしてしまった後悔からの贖罪もあったように思われます。時折、感謝の言葉も告げられたりして、生涯でほとんどその言葉を向けられたことのない私は、ほんの少しだけ自分が居てもいい場所を見つけることができました。大変でしたが、気持ちの安らぐことでもありました。

しかし、私のインターネット上での見せ掛けの善行は、裏ではしっかりと悪行となり、母を苦しめていきました。大学に行っているふりをして、どこかで時間を潰していたものですから、やがて単位の取得状況とともに、それがバレ、母も余計に思い悩むようになり、だんだんと病状が表面化してきて、おかしくなることが多くなりました。平静を必死に保とうとする母が、ふとした瞬間に錯乱したようになり、宙に向かって何かを叫んだり、居もしない人と必死に会話をしたり、怖がったり、何者かに狙われている、自分の息子がこうなっているのは悪い人にそそのかされているからだ、などなど、いわゆる「精神の病気」にかかっていたのです。

父は母の病状のことを隠したがりました。父が母の病気のことをどう捉えていたのかはわかりませんが、時折「気持ちが弱いから精神病なんかになるのだ」と、熱血めいた体育会系の精神論で捉える人がいて、「そんなこと知らただけで大変だ」と言っていた父は同じように考えていたかはわかりませんが、精神が弱いから病気になり、病気になることは弱さを露呈することであり、弱さをひけらかしているからこそ恥である、と言う人を見かけます。私たちは「記憶」や「精神」が何であるかもわからないのに、それがわかっているかのような口ぶりで他人に自分の経験を押し付けます。父もまた、私から見れば、気まずさから、母のことを誰にも語らずにひた隠しにしたかったに違いありません。

相談の掲示板でも、変化があり、私の相談者への意見そのものが第三者に横槍を入れられたりして、私を「論破」して自分を誇示しようとする人が出てきました。悩みを論理で片付けようとするのは大変不可思議にも思いましたが、論理が正しければ、それは人間行動の正しき真理の姿であると信じている、または信じさせる輩がいるのだと、露骨に知ることができました。世の中の理屈とは、「論理的正しさ」の中に重きが置かれているのでしょうか。

私は少し生きようとするだけでも疑問が浮かび、自らの卑しさに打ちのめされると言うのに、彼らはまるで経典でも読み上げるかのように、威圧的荘厳さで、自らの主張を絶対の信奉を持って高らかに叫び続けるのです。

どこに行っても「私は正しい」の押し付け合いで、少しでも引こうものなら、「やっぱり私が正しい」となって、相手に責められます。

強欲、傲慢、悲しみの嘔吐、痛みの悪寒、思い出すだけで、ぞっとします。

この時には気がつかず、今だからこそ悟ったことですが、人は常になんらかの方法で、自らの心の状態を表現し、他人や自分に対して示そうとします。どのような人であれ、きっと必死なのでしょう。人は常に何かと戦っています。争いに疲れ、救済を求め、少なくとも悩むということとは、人間としての心の平穏を望んでいるはずであるのに、目の前でまた卑しい争いが起こるのです。いつまでこのような争いを続けるのでしょうか。人間は認め合うということができないのかしら。すべてを肯定するのが「認める」ことにはならないにしろ、そもそもどうして否定しあうのか。気に入らないからでしょうか。自分は模範的で善良的な人間だという自尊心からなのでしょう。私にはとても他人の心理など、恐ろしく、深海の流れの中で、岩場にしがみついて揺れている気味の悪い藻のような、ひどくおぞましく、得体の知れないものを感じて、震え上がることが多くあります。

そんなおぞましい心理に触れることでさえ恐怖であり、人が人に与えあう不審の芽から逃げたい一心であるのに、こんな小さな掲示板の世界でも、はたまたテレビを見ればニュースであっても、人類は否定しあっているかのように、卑しさと攻撃性が嫌と言うほど表されているのです。救うつもりで傷つけ、または「やつさえいなくなれば平和は訪れるのだ」とでも言わんとばかりの倒錯したヒロイズムで他人を見下している人たちが常に争いの火種を持って来ることは、人間の宿命のように思いました。

しかし、ふっと考えの歩みを止めて振り返ってみると、彼らの行動は、たとえ他人の感情や魂を踏みにじり、不幸を招くとしても、言うだけ言って、やるだけやって、「ああすっきりした」「俺って正しいよな」とどこかでほくそ笑んでいるかのような、つまり彼らの幸福そのものなのではないのかと考えが及び、互いの「正しさ」の主張こそが争いの火種だとすると、たちまち

人間の幸福や生活の平穩というものが雲散霧消してしまい、「正しき」力の前に、私は彼らを押しつけることも、服従すらもできずに、ただ逃げ惑い、狼狽するばかりの自分を省み、もし彼らのように他人を虐げるほど強く言えたら幸せの価値観もわかるのか、それとも幸福とは自らが常に正しいと信じて疑わないことなのかと思い悩んだほどでした。

いや、もしかしたら彼らは、以前の私のようにか弱きものたちに対して陰湿な暴力を繰り返しながら日々の鬱憤を晴らしているだけなのかもしれない。この人たちは自らのために、多少でも「弱さ」や「もろさ」という隙を見せた生贄を選び取って、自らの人生を一時的にも肯定するために他人の生き方を、なんの教訓ともせずに、消費するようにはけなしては捨て、次の生贄を探し続けるのだ、と思ったほどです。

しばらく、まるで目の敵にするように、私の相談者へのコメントへ、必ず威圧的横やりが入るようになり、人と言い争いのできないたちの私は、少しでも圧力をかけられるとたちまち諦観が支配し、恐怖に震え、パソコンの電源を切っても動悸が止まらず、どこかに身を隠したくなり、悪意のない（彼らも自分が正しいと思ってやっているのでしょう）第三者からの攻撃に、ほとほと疲れ果て、またもやいる場所を失い、その相談サイトから姿を消しました。このことは、あなたにも一部始終お話いたしましたね。

それと平行して、詩も時々書き続けて、サイトに投稿していました。相変わらず「詩としてなってませんね」などと、ただそれ以外なんのアドバイスもないことを書かれたりし、吐き気のするほどの落胆があっても、少しでも「よいですね」などと褒められると多少は嬉しいもので、相変わらず自己満足で書いていたのですが、その褒めてくださる方の中に、大変気に入ってくれる人がいました。

匿名の掲示板と言うのは、姿が見えない分、逆に私のような日陰者ですと、コミュニケーションがうまくいくこともあります。性別も年齢すらもわからない方からの感想でしたが、大変私の詩を気に入ってくれていることは、短い文章からもよくわかりました。どことなく、細かな感情表現の端々から、女性らしさは感じていましたが、はっきりとしたことはわかりませんでした。しかし、ふっと他人のコメントに返信している内容で女性だということがわかりました。その方も詩を書く方で、明らかに私宛のものと思われる詩もいくつか書いてくださいました。やがて感想や詩のやりとりだけでも、恋の文通のような秘密めいたものになっていき、明らかに他の人と違うような意味深なものが多くなり、言葉でやり取りをしながらも、言葉以上の真っ直ぐな思いでやり取りし、情熱的かつ忍ぶようなものでした。特に「論理」なの「矛盾」なのと、さんざん私の愚かさが指摘され続けた相談サイトから見れば、とても自然で優雅な気がしました。

ただの言葉のやり取りのはずが、何かの瞬間にひゅっと、くっついたかのように、お互いに連絡を密に取り合っていました。

その方は一回りも年上の人妻で、旦那との意思疎通に、ほとんど疲れているようで、まるで旦那の一方通行の言い草に、ひどく傷つけられているようなことを打ち明けてくれて、どこか自分も似たような（とは言えないのかもしれませんが）状況を体験したことがあり、「その気持ちはよくわかる」と同情ではない真摯さを見せると、「前から思っていたけれど、あなたはとても優しいわね。ひどく苦労してきたのね。誰にも話したことの無い気持ちを言い当てられたのは初めて。きっと人の気持ちが誰よりもよくわかる人なのね」と電話口で言ってくれました。

しかし「人の気持ちが誰よりもよくわかる」という、賞賛の言葉は、自ら、取り返しの付かない形で裏切ることになりました。いえ、今までも裏切ってきました。その裏切りの積み重なりが、極まったのです。この後、生肌を一生消えない焼印で抉られる事件が起こったのです。

母の病状は一向に回復する気配を見せず、時折おかしくなることが続いていました。病院へ行くことも勧めたのですが、母が「私は正常だから。大丈夫だから」と頑として聞かず、「精神病患者」としてのレッテルを貼られることをひどく嫌がっており、てこでも動かないような抵抗を見せましたので、それ以上は強く言えず、ただ回復するのを祈るばかりでしたが、そもそもの発端たる私の素行は、変わることなく、母の願いを実行することも、心理的負担を軽くすることもできずには時は過ぎていきました。母は私とは違い、母なりに人に迷惑をかけることを嫌がったのだと思います。少なくとも、家族に負担をかけまいと、家事もこなしていましたし、いつも通りに振舞おうと必死であることは、よくわかりました。父は無口になったり、急に露骨に苛立ったり、母の時折見せる奇行にどうしていいかわからずに苛立ちを隠さず母を責めたり、叫んだり、夜眠れない日々が続いて、父も相当疲弊してきているようで、私のことを責める余裕すらもなかったようでした。

母の行動はひどく警戒めいていました。外国からのスパイやら、不審者が外をうろついて私たちを監視しているので、総二くんも気をつけなさい、と真顔で私に警告し、私の電話先をひどく気にし、誰と電話していたのか、盗聴されているから気をつけてと常に細心の注意を払い、私が友達と電話（本当はれいの人妻でしたが）していると訴えても、信じてもらえず、総二くんが大学に行かずにずっと家にいるのは、その人にそそのかされているからだ、と、收拾の付かない事態に陥り、常に付きまとうようになりましたので、私も安心する場所を奪われては、もはや寸分の身動きも取れなくなるので、「お願いです。いいかげんにしてください」と声を荒げると、母が

ついに怒り出し、扉を力いっぱい叩きつけるように閉めて部屋にこもって何かを叫んでいました。私もどうしていいかわからずに、ただ母を怒らせてしまったことにひどく戦慄し、狼狽し、逃げるようにして部屋にこもり、自分へのどうしようもない憤りと落胆を常に無気力の中に消化させながら、自分はいないほうがいいのだ、消えたほうがいいのだ、居るだけでこんなことになる、存在すらも許されないのだと、ガタガタと震え、扉の向こうから聞こえる母の奇声を聞きながら、自殺の方法を考えていました。

今まで幾度となく自分の存在を快くは思わず、消滅することを願ってきましたが、現実的に自殺を実行するとなると、何かと迷うもので、どこで死のうか、どうやって死のうか、確実に死ぬ方法がいい、もし失敗でもして後遺症でも残り、自殺が二度とできなくなったらどうしよう、などとあれこれ無駄ともいえる精密さで考え出すのですが、包丁は、薬は、飛び降り、首吊りは、などと何かと一人で考えておりますと、ふと優しくしてくれた人妻のことが気になりだして、電話をかけて、一部始終を話し、どうしていいのかわからないことを告げると、「お母様に優しく接してあげてとしか、私には言えない」と言われましたが、「優しくする」という意味が、私にははっきりとわかりませんでした。それは、母の思い通りになることなのか、それとも、ひたすら奉仕の精神一筋で覆い、にこやかに健やかに、何も余計なことは思わなければいいのかしら、だとしたら生れ落ちて、生きていくのに最も必要なのは自分自身でなくなることなのか、そもそも自分自身とはなんなのか、自分らしくあるとは一体なんなのか、などと考えていると、頭が真っ白になってわからなくなり、まるで生まれて初めてそのことを考え出したかのように困惑し、結局今まで自分自身のことを何も考えてこなかったことに衝撃と悲しみを覚え、「どうやって生きていけばよいのかももうわからないのです」とか細く人妻に告げると、「もしよろしければ、会ってお話しませんか？あなたの姿を見ながらお話したいの」と言ってくれたので、会うことにしました。

最初は、顔もわからない間柄でしたが、マリエの一件もありまして、また顔で四の五の言われたら、もう立ち直れないかもしれないと恐怖を抱きつつも、今まで言葉のやり取りをしながら、まったく人を責めるような言葉を扱わないことから、外見などで私を責めはしないだろうという、私にしては珍しい人への淡い期待感もあり、本当に来るのだろうかと思いつつ半信半疑で待ち合わせ場所にいますと、「もしかして総二さんですか？」と品のよさそうな女性に声をかけられ、人妻の名前を呼びますと、「そうです。ああよかった。間違えたらどうしようかと思ってました」と、嘘でもないようにほっと胸をなでおろした姿を見せるので、思わず「あの、私の顔が悪いとか、思いませんでしたか？」と恐る恐る聞いてしまい、しまった、余計なことを聞いてしまった、この人妻の機嫌を損ねたのではないかと落胆しかけると、「何を言ってるんですか。充分かっこいいお顔ですよ」と言うので、お世辞ではないかと思ひ、率直にそのことを聞くと、「お世辞じゃないですよ。でも、たとえ顔が悪かったとしても、私は人を顔で評価したりはしません。心です。だから会おうと思ったのです」と躊躇なく言ったのでした。その時は、まだ彼女の言葉を鵜呑みにはできず、どうしてそんなことが言えるのだろうと疑いの心が残っていたのも事実で、疑心暗鬼の塊になっている自分の姿に、ふっと醜い陰を感じ、会うなんて約束をしなければよかったかもしれないと後悔しかけました。

「先ほど、顔のことを聞きましたけど、総二さんは私のこと最初に見てどう思ったんですか？」

歩きながら彼女が聞いてきたので、しどろもどろになりながら「綺麗だと思いました」と照れながら伝えると、「あら、総二さんこそお世辞がお上手ですこと」と、口もとを押さえながら、うふふと笑い、その姿が美しい詩と文章を書いている印象と重なり、とても上品さを感じたものでした。

「どうして先ほど顔のことを聞いたのですか？別にお悪いお顔でもないのに、そこまで気になさるの？」

「あ、いえ、以前に、ちょっときつく言われたことがあるものですから」

私がふっと俯いてぼそりと言ったものですから、余計な気を使わせてしまったようで、「ごめんなさいね。嫌なことを思い出させてしまったようで」と悲しそうな目をしながら心配してくれたことに対して、偽善でもない真摯さを素直に受け取ることができ、「優しいんですね」と告げると、「総二さんのほうがとても優しいですよ。本当に、そう思います」と微笑んでくれました。

私は彼女に、感じたことのない、まるで太陽の匂いをたくさんに吸い込んだふかふかの布団に寝転がっているような心地よさを感じると同時に、いつ人は裏切るかわからない、この人も都合によってでしか動かない人間だということを忘れてはいけなさと、自戒し、警戒する気持ちを、捨てきれないでいました。

「私ね、総二さんの詩を全部ノートに書き写しているんです。総二さんの詩が大好きで、いつも読み返しているんですよ」

と、彼女はとても嬉しそうに微笑んでいたもので、私は何も考えずに垂れ流しのようにならしたものに、そんな熱狂的になる人などいるものかと苦笑したくなり、これも人間同士の意思疎通を円滑にするための、儀礼的な言葉なのかしらと思ひ、「また、お世辞でしょう？」と、冗談っぽく、かつ相手の心の内を探るような巧妙さで（私もいつの間にか、相手の出方を伺うような回りくどい策略に満ちた知恵がついてしまい、皮肉なものだと思ったのですが）聞くと、

「あら、ひどい。なら朗読してあげましょうか」

と、冗談でもなく真剣に、かつ誇らしげに胸を張って言うやいなや、すらすらと私の詩を暗唱し始めたのです。

見つめること
見つめられること
見つめあうこと

小さな思いが大きくなって
心地よい風が止まらなくなった

やがてただの荒野が野原になって
花がたくさん咲いた

涙も幸せも吸いこんで
大地に深く根をおろし
悲しみの荒野に咲き乱れた

今は雨も嬉しく
花弁を伝う雫も
葉を打ちはじめ飛ぶ雫も
みんな花を咲かす命になった

冷たい夜を溶かした命は星になって
夢を持った花を見守った

朝は希望を持った鳥たちが
はるか彼方の地平線を目指した

語ること
語られること
語り合うこと

繋がる思いが大きくなって
空を覆う絆が止まらなくなった

やがてただの石が宝石になって
心にたくさん散りばめられた

涙も幸せも吸いこんで
記憶に消えずに飾られ

悲しみの心を笑顔にした

今は誰かに微笑みかける
頬を伝う喜びも
絡めて離さない人の弱さも
空を羽ばたく大きな希望になった

「どう？」とでも言わんばかりに、嬉しそうに鼻を鳴らして彼女は続けました。
「今のが、『光の華』でしょう？次が、『切ない時はいつも流れ』ね」

いつの間にか言い訳を
自分に言い聞かせていた

いつの間にか自分は
悲しい存在だと思っていた

いつの間にか希望すら
抱くことはできないと感じた

心はまるでつかめない雲
心の色はめまぐるしく変わる

まぶしかったり
闇だったり
死を誘ったり
生の喜びが湧いたり

君が叫んでいることさえも知らず
ただ泣き叫ぶだけのか細い露

無力な絶望は檻となって
未来を決め付けていた

気がつくことさえもできず
心の中に咲いた花を踏みつけた

散る花を美しいと思い
育てることを嫌っていた

花束を作るのに茎を切り

種も撒かずに枯れるものを見た

足かせがあり
もう一歩も動けないと思った

悲しみの谷は深く
苦しみの牢は堅固

いつまで泣き続けるのかわからず
いつか光が射すだろうと思った

何もせず
一歩も動くこともせず
あがきもしなかった

見つけてほしいだけの孤独
冷たい壁にほおをつけていた

命を見ずして命を宿らせず
ぬくもりにすぎるだけの刹那

救いもせず
救われもせず
不安だけの時間

誰に笑いかけもしなかった

どうしてそうなったのか
どうしてそうしなければいけないのか

いつの間にか言い訳を
自分に言い聞かせていた

いつの間にか自分は
悲しい存在だと思っていた

いつの間にか希望すら
抱くことはできないと感じた

雲は流れていく
風に流される雲を
自由だと感じ

いつまでも眺めていた

微笑みかけられずに

その時の私はどんな顔をしていたのでしょうか。きっと目をまんまるにさせながら驚いて口をぽかんと開けていたのだと思います。

「あら、どうなさったの？そんなに驚くことないのに。私、あなたに信じてもらいたくて。でもごめんなさいね。恥ずかしいわよね。自分の詩を勝手に他人に朗読されるなんて」

彼女の気持ちは偽善でも道化でもありませんでした。ただ素直に自分の気持ちを私に伝えようとしているだけでした。先ほどまで彼女のことを疑っていた自分をとても恥ずかしく思い、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。この人に比べれば自分はなんて汚れているのだろうと我が身を深く抉っていくように呪ったほどです。彼女は今まで出会ってきたどの人間とも違って、まるで「含んだ」ところがありませんでした。ふとした時の何を考えているかわからない沈黙も、自分とは違う下卑たものでも見るかのような瞬時の冷たい視線も、どうにも救いようがないかのような哀れみを含んだ苦笑も、とっさに人間的興味を失い適当にあしらおうとする体の細かな仕草も、まったく感じ取れませんでした。

「いや、あの、ごめんなさい。こっちこそ。そんな、暗唱できるほど読んでもらっているとは思わなかったから。あんなもの」

すると、彼女は驚いたことに、私の言葉に少し腹を立てたようで、声を多少荒げたのです。

「あんなものだなんてとんでもない。私にとっては大切な言葉です」

そして、また穏やかな口調になり、

「いつもありがとう。私に向けてくれて書いてくれた詩も、とっても嬉しかった。それも朗読してあげましょうか？」

「あ、いや、それはさすがに恥ずかしいので止めてください」

水に打たれた、とでも言うのでしょうか、眠気混じりの顔に、水を浴びせかけられたような心地でした。私は、彼女の真っ直ぐさに押されざみ、というよりも、これは年下ゆえに、あやされているのでしょうか、自分も素直になってよいのではないかと、どこかで思い始めていました。

「総二さんの、そのはにかむような笑顔、とっても素敵ね。でもとても寂しそうな目をする。ねえ、どうして、あんなに綺麗な詩を書くのに、時折とても寂しそうで辛そうな詩を書くの？」

その言葉に、自分の重苦しい影が伸びていったような気がし、深呼吸のような長いため息が出て、顔が影に覆われた自分が脳裏に思い浮かびました。

不安を覚えながら彼女の瞳を見ていると、誤魔化せない気もしましたので、素直に話すことにしました。

「寂しいほうが、本当のことなんです。素直に書けるんです。綺麗なものは、側にないから、妄想だけだから、あんな風には書けるんだと思います。だから、辛くてたくさんは書けない」

「そうなの...とても苦しんでいらっしゃるのね...」

彼女は、ありきたりな言葉を吐いて、現状から飛び去ったようなことはまったく言おうとしませんでした。

「幸せはいがいに近くにある」「もっと外に眼を向ければ」「がんばればいいことがある」

自分の感情から理想主義的なことは一切言わず、彼女は今目の前にいるそのままの私を受け止めてくれているようにも感じました。

「ねえ、総二さんは甘いもの好きかな？近くにあるお店のオレンジシフォンがおいしいんだ」

自分から提案しようにも、外にろくに出不いので、なにがあるのか、どうしてよいのかわからず、私は彼女の言うままに連れられ、品のいい喫茶店で一緒に紅茶を飲むことにしました。

彼女は窓際の奥の席に私を座らせてくれました。本当ならば、私が積極的に彼女をエスコート

すべきだったのでしょうか、いつの間にか、人そのものを見るのが恐ろしくなっていたようで、ちょっとでも他人と目が合うと、後ろめたさと気まずさから目をそらしたくなり、談笑の声さえも、自分をあざ笑っているように聞こえ、店員の注文を取る声にすら焦りを感じて言葉に詰まってしまい、メニューの文字すらもわからなくなるほど困惑してしまって、

「ね、総二さんもオレンジシフォン食べるわよね？私と一緒に飲み物でかまわない？」

と言う彼女の声にただ力なく頷くだけで、息をするにも震え、人の往来にすら目が回ってきそう、細かくお冷に手をつけて、すぐに飲み干してしまうほどでした。

私の落ち着かない様子が気になったのか、

「大丈夫？顔色が悪いけれど、気分でも悪くさせちゃったかな」

と聞いてくる彼女の優しさに情けない気持ちになり、「大丈夫です」と答えながらも「どうしてこんな風になったのだ」と我が身を泣きそうな気持ちで省みていると、ことさら心配そうで悲しそうに見つめてくるので、平気を装い、

「そういえば、旦那さんのことで悩んでいたみたいですけど、今はもう大丈夫なのですか？」

と話をそらしました。

自分が辛くても、ひた隠しにしたいくなるのです。もし、ここで一言でも「辛い」と言ってしまったら、彼女が作ってくれた空気のような、目に見えない大事なものが木っ端微塵に吹き飛ばされる気がして、この幻のような光景が一瞬にして阿鼻叫喚の世界に変わり果ててしまう呪いの言葉にも思えてしまったのです。

なんとかしてこの場を取り繕わなければいけない。彼女に嫌な思いをさせてはいけない。

私は必死でした。

彼女は、いつも旦那に怒られてばかりで謝ってばかりいる。気が利かない。言わずとも察せよ。あれがダメ。もっとこうしろと言うのはいいけれど、様々なことが一方通行で、何か言おうものなら逆に怒られて批判され、それは自分が悪いのだからなんとかしなければいけないけれど、どうしていいかわからないし、努力はしているけれどやっぱり辛くて。という内容のことを物悲しそうな顔で言っていました。途中でオレンジシフォンケーキがくると、ことさら嬉しそうになり、生クリームをたっぷりつけてケーキを口の中に運びながら、ケーキの幸福をいっぱい広げているかのような表情も、悲しそうな顔もし、女性というのは、よくもこう忙しく感情表現ができるものだと圧倒され、感心もし、なにか愛嬌のある動物を見ているようで、それでいてちゃんとした人間で、ころころと変わる様には驚くばかりで、つくづく男とはまったく違う生き物なのだと実感させられました。

「あら？総二さんはケーキお食べにならないの？」

と言われて、手をつけていないことに気がつき、慌てて食べたのですが、ブランデーのような洋酒の香りと、オレンジの香りが、ほの甘い生クリームとスポンジのふわふわの食感と一緒に広がって、彼女が幸せそうな顔をしたのも納得し、ふと「人には甘いものを食べさせておけば幸せな顔をするのだ」と考えが浮かぶと、ことさらそれが皮肉めいた言葉に感じられて苦笑したくなりましたが、そんなことは考えるべきではないと紅茶で流し込むと、詰まってしまって咳き込み、散らかしはしなかったものの、随分と長いことむせていたので、ちょっとした笑い事にもなってしまう、なにはともあれその場の空気をなごませることができたのです。嬉しい誤算でした。

皮肉は喜劇なりや。

彼女との時間は瞬く間のようにも感じましたが、生まれて初めて「幸せとはこんな些細なことを言うのかもしれない」と思ったほどでした。

しかし感じた「幸福」も、留まることなく砂のように崩れていきます。

お会計。

男という生き物は、つまらないところで見栄を張る生き物なのかもしれません。この一瞬の見栄のために、男というものは金を稼いでいるのかもしれないと思うほど、いえ、人間にとって勘定を持つ、生活力の余裕を見せるということは、重要な儀式なのだと、我が身が突き動かされました。彼女が「私が払いますから大丈夫ですよ」と言ってくれたのですが、そこまでしてもらっては、後ろめたくなるというか、自分の立つ瀬がなくなるというか、ほんの少々のお金すらも払えないところを見せてしまうと、もう人間としても頼りなく、見限られてしまうのではと恐怖し、「あの、払いますから」と言って会計票を奪い取るようにし、その行為すらも彼女の興を削いでしまったのではないかと、もっと悠然と振舞えないものかと反省し、レジを打つ女性店員にも畏怖し、息切れがして釣銭すらも忘れそうな勢いで外へと飛び出したのです。

「このお礼は、きっと何かの形できつとお返しいたしますね」

と微笑んでいた彼女に対して、力なく笑いかけるのが精一杯で、

「もう時間ですから、今日はここで失礼させていただきますね」

と去っていく彼女を見送ることもできず、逃げるようにして家に帰り、今日の失態を最初から最後まで反省する始末で、どうしてあの時こうできなかったのか、もっとこうすべきだったと、妄想の中ではうまくやっている自分がいるのですが、現実には取り返しがつかず、打ちのめされ、きつとあの時は微笑んでくれたけれど、彼女はもう会いたくないと思ったに違いないと、ずっと敗北感を味わいながら震えていたところに、彼女からの電話がかかってきて、

「今日は本当にありがとう。言い忘れたことがあります...」

と言葉を詰まらせるので、私は親に力いっぱい殴られるのを待つ子供のように目をつむって次の言葉を覚悟していますと、

「あの...また...お会いしたいのです。先ほどは私のことばかりお話してごめんなさい。総二さんのこと、たくさん知りたいのです。今度お会いしたときは、総二さんのこと、たくさん教えてくださいませんか？」

夢想だにしなかった答えに驚愕して聞き返してしまいました。

「ど、どうして...そんな...」

「だって...気になるから...放っておけないのです。詩のことも、つい今日は嬉しくて聞くことを忘れてしまったし、寂しそうでどこか瞳の奥にたくさんの悲しみを湛えているあなたを見ると、何かしたくなってしょうがなくなるのです。一緒にいると、とても幸せなんです。だから...お願いします」

お願いされる。この私が他人から、すぎるようにお願いされている。そんな人間ではないのに。幸福とはなんぞや。私は一瞬でも幸福を感じたかもしれない。一度その密を味わってしまえば、後に残るのは痛みに対する恐怖なのではないか。幸福に傷をつけられた恨みや憎しみがこの世界には渦巻いていて、彼らはそれを止めることができないではないか。私とその例外であるはずがない。私は彼女の幸せを拒んではいけない。しかし、私なんかに彼女の幸福を守れるのか。私の幸福とはなんぞや。もし傷つけられでもしたら、彼女の幸福をズタズタに切り刻んで、壊してしまってから改めてその価値に気がつくのか。一体幸福とはなんぞや。

「わあ！嬉しい！それじゃあまた私の都合ができれば、ご連絡いたしますね」

困惑している間に返事をしていたようで、彼女の声を聞いて自分が「わかりました」と言っていたことに気がついたのです。

もうその日は頭の中がいっぱいいっぱい、何が起こったか整理できないほどぼんやりしていたのですが、母が私の部屋に入ってきて、私の肩を力いっぱい両手で何度も殴り、「総二くん！私の宝石を盗んだでしょ！勝手にお母さんのタンスを開けて！この泥棒！宝石返して！宝石返して！」

そう叫んで、また殴りだし、「やってない。タンスに近づいてもいない。宝石のことなんて知らない」と弁解しても聞いてもらえず、「この泥棒！返せ！返せ！」と狂ったように私を責めるので、生まれて初めて母を張り倒してしまいました。床に倒れこみ、本当に憎しみのこもった目を見ました。人は鳥獣よりも恐ろしい、殺気とも似つかない、射殺するような、人を潰してぐちゃぐちゃにしてしまうような、おぞましい目ができるのだと驚くと同時に、自分の中で大事な何かのパキリと壊れた音を同時に聞きました。

「殴った！総二は母親を殴った！」

狂乱のごとく叫び、憎しみを込めてドアを叩きつけるように閉めていき、隣の部屋で叫んでいるのが絶えず聞こえていました。

母の冷たい宣告に、私は震えていました。何に対して震えていたのかさえもわからないほど、激しい痙攣のように体の震えは止まりませんでした。母を張り倒した右手は、大きく震えすぎて、物をつかむこともできないくらいでした。感じたことのない悲痛が、全身を駆け巡っていました。

先ほどの母の言葉が何度も耳の中で反復されて聞こえてきました。涙が勝手に出てきて止まりませんでした。あまりもの衝撃に、なす術もなく、涙を擦り切っていくかのように流していました。おかしくなったとはいえ、たとえ心神喪失、それが無意識で記憶が残っていなかった行為だったとしても、母に疑われるほど、私たちは信頼関係がなかったのかと、自分の中で最後の最後に守ってきたものまで壊された喪失感に、涙が底を求めてどこまでも落ちていくように思われました。さんざん人に対する気持ちをあのようにならねて、今さら信頼関係うんぬんをここで思うのはおかしいと思われるかもしれませんが、血の繋がりとというのは、信頼するとか、信頼しないとか、そういう取引前提で成り立つような関係を常に超越しているとわたしは思っていますが、「信頼」という言葉では表しきれない親子の根底にある繋がりを表現する言葉を私は知らないのです。あえて「信頼」という言葉を使います。それは「血が繋がっている」「血肉を分けた関係」ということを確認しあう「証」なのだと思いますが、言葉はこのような時にとっても不便です。

母を張り倒してからは体が縛り付けられたかのように一步も動けずに震えていました。いつまでもいつまでも体の震えが止まらないのです。母は何か物を投げつけているのか、閉じられた扉の向こうから、バタン！バサン！と様々な恐ろしい音が聞こえてきて、母の狂乱の原因に、自分はタンスに近づく素振りすら見せていないので、心当たりがないにしても、「宝石を盗んだ」と言っているからには自分に原因があることで、母を止めに行くこともできず、顔を合わせれば恐ろしい形相で、今度は刺されるのではないかと恐怖していたところに、父親が帰ってきて、「何をしているんだ！やめろ！」と母を怒鳴りつけて止めようとし、今度は私の部屋に怒鳴り込んで来て、

「総二！お前また何かしたのか！」

と私を責めたのです。

(また...?)

とその時、はっきりと悟りました。

(また...また...また...)

私と父の間にも、信頼関係などとうになかったのです。信じあえるものもありはしなかったのです。再生すらもしえなかったのです。親子であろうと疑いあっていたのです。子供にとって、親との間に「信頼が完全にはないのだ」と確認することは、人生においてほとんど痛恨の決定打ともいえるべき致命傷かもしれません。

母は奇声とともにまだ暴れていました。父はまだこのような時にも「世間体」というものを気にしているようでした。「やめろ！こんなことして、恥ずかしいだろ！」という父の声が聞こえ、父が意外にも周囲からは好人物で頼りがいのある人間として見られていることを思い出し、「世間体」を気にする父と、「世間体」そのもののことを思い、このような状況でさえ、「世間」というやつは冷たい視線と失笑を持って私たちを見るのだろうかと思うと、つくづく世の中というものは恐ろしいところなのだ、という気がしてきて、大きな物音が鳴るたびに、ビクリと体を震わせ、すべてのものに恐怖していたのでした。

その夜から父は私をしきりに責めるようになりました。

「お前がそんなんだから、あいつがおかしくなったんだ」

「お前がきちんとしてくれれば、ここまで狂うことなんてなかったんだ」

「家にばかりいて、ろくなことしない」

お前のせいだ...

お前のせいだ...

お前のせいだ...

お前のせいだ...

物事がおかしくなる原因は確かに何かにあるかもしれませんが。私たちはその原因を突き詰めて、あたかもそれがなくなれば、物事はすべてうまく運ぶはずだと、計算式の答えを言うかのごとく、何かを責めます。数学ならうまくいくかもしれませんが、人間だったらどうすればよいのでしょうか。人間もまた、公式に当てはめたように、万事うまくいくものなのでしょうか。私の苦しみは、すべて私自身のせいなののでしょうか。制御できない心も、ただ周囲の喧騒を水の中から聞いているような、緩慢に壊死してきている精神も、すべて私のせいなのだとしたら、もう、生きていること自体、そもそも生まれてきたこと自体、間違いであったと言わざるを得ません。私が生まれてきたばかりに母は狂うようになり、父の暴言の矛先は私に向かうようになりました。生まれた時から、こうなるとわかっていたのなら、きっと私は殺されていたか、自殺したかのどちらかでしょう。

私のせいだ...

父は何を考えて今まで生きてきたのでしょうか。母は何を願って今まで生きてきたのでしょうか。私は何をしたいか今を生きているのでしょうか。何ひとつわかりません。

救いは、どこに...

次の日、母は平然としておりましたが、だいぶ疲れた顔をしておりました。しかしもう顔には感情の欠片すらもなく、能面のような顔になっていました。血の通っていない、石膏で固めた仮面。母の、苦しみを、すべて隠すための、最後の冷徹な抵抗でした。昨日の出来事も覚えていないようで、宝石のことを聞くと、ちゃんとあったと言っていたので、少しだけほっとしたのですが、またいつ責められるのか、あの仮面がするりと地面に落ちて割れてしまうのか、気が気ではなく、私も夜眠るのが恐ろしく、布団の中で常に神経を張り巡らせて警戒する日々が続きました。

詩のウェブサイトを投稿する詩も、だんだんとじめじめと陰惨なものになり、見るも耐えないおどろおどろしいものが増えていきました。まるで、穴倉に閉じ込められて、隙間から差し込んだ一筋の光で一生懸命、石を使って壁画を彫っているようなものでした。もはやそれしか自分の

すべきことはない、この閉じ込められた場所から憧れのように小さく見えた空を眺めて、世界を夢想するだけなのだろうか。この心に、寸分の希望でも見出す力は残っているのだろうか。それすらも儚い夢のように感じました。

私の詩の変化にいち早く気がつき、様々な心配をしてくれたのが、あの人妻でした。彼女の詩は、まるで慈愛に満ちて、優しく囁いてくるようなものばかりでした。彼女は電話口でも、一生懸命私を慰めようとしてくれました。しかし、その声が、物凄く遠くから聞こえてくるような感じで、現実世界での距離感が、狂ったとしか言いようがないほど、五感すべてが鈍く遠く感じられて、見えるものも、聞こえるものも、匂いも、味も、肌に触れるものさえ遠く感じられて、もしかしたら自分を切り刻んでも何も感じないのではないかとぼんやり思うほどでした。

「今度の木曜日、私のお家に来ない？一緒にケーキでも食べましょう」

彼女からその誘いを受けた頃には、もう自分の中では言い表せないほどの感情が渦巻いていました。怒りでもない、悲しみでもない、絶望でもない、苦しみでもない、苛立ちでもない、そのすべてでもあり、親が遠く見え、すべての声が遠くから聞こえ、かつ自分でも意識していない巨大なものを抑えこんでいるようで、彼女の家に入った時も、いつもとは違う、その家庭特有の香りすらも遠く、彼女がぼんやりと見え、目に見えない塊を掻き分けないと進めないような気持ちで体を動かし、リビングに入った時、何かを話しかけられていることに気がつき、「え？」と思わず聞き返し、「あの、だいぶ片付けたのだけれど、散らかっているでしょ。ごめんなさいね」と恥らうように言う彼女の気持ちがわからなくなり、「そんなことはないですよ」と言いながらも、周りを見回すと自分の散らかっている部屋とは違い、断然片付いていて、彼女の謙遜が自分を見下しているように感じ、苛立ってきて、「大丈夫ですか？心配していました。顔色が悪いけど、そこのソファで休む？」と言われたことが、彼女の哀れみを受けているようで、きっと自分の悲惨な状態を馬鹿にしているに違いないと感じ、自分の醜さが惨めで腹立たしく、余計に苛立ちが膨れ上がって暴れだし、彼女がこうまでして自分の事を心配してくれるのが疑わしくなり、「どうしてそこまで自分にかまうんですか？どうしてそこまで人のこと心配できるんですか？」と聞くと、

「だって、総二さんが苦しそうだから。私にできることなら、なんでもしてあげたいから。黙ってられなくて、一人で苦しんでいてかわいそうだから」

かわいそう。

私は哀れみを受けている。かわいそうな人だと思われている。彼女も自分を見下していたのだ。その時はそう思ったのです。激しい劣等感が、憤怒となって、汚濁の激流のように体中をギリギリと駆け巡っていました。

「私も、助けてもら...」

「うるさい！」

これ以上見下されたり、馬鹿にされたりして、惨めな思いをするのはたくさんでした。

愛される幸福にすら、色濃い裏切りの暴力があるのだと、完全に疑っていたのだと思います。そして、私が生涯憧れて持ち得なかったものを悠然と持ちえているという嫉妬、恐怖、衝撃。

私はボロボロの堤防が決壊したように、憤怒を止められなくなり、彼女の言葉を遮って、胸倉を力いっぱい掴み上げました。彼女は怒りで震える私をしっかりと見つめ、瞳にたくさんの涙を浮かべながら、私の生涯で最も大切に、深く傷つく言葉をいきました。

「好きなのよ！総二さん！大好きなのよ！」

彼女の言葉を聞いた時、幸福への恐怖感が針となり、自分の中で、風船のように張り詰めていたものが、プツリと刺され、割れました。

...ベリリと引き裂かれたような、悲惨な声を絞り上げていました。ありったけの声で。

私にとっては、積年の憎しみ、呪い殺しても足りないと思っていた敵兵が、急に銃を捨てて、手を広げて近づき、私を抱き締めようとする絶望感と恐怖に似ているようにも思いました。

ありえない、認めてこなかったものを、急に受け入れろと突きつけられる恐怖。

十分に加速しだした長年の憤怒は鋼鉄の大きな塊のように、急には止めることはできなかったのです。

私は、引き金を引いたのです。

そして、彼女の魂に大きな傷をつけました。

言葉にならない苦渋に満ちた咆哮でした。家のこと。自分のこと。彼女のこと。愛される不安。愛されることはないのだという疑い。人は信じあってなどいないのだという現実。騙しあい、見下しあい、気に入らないものを押しのけあい、我が身の利益を最優先に考えることこそ効率的で正しい生き方なのだということ。人は人の秘密を引き出して、その弱みに付け込むのだという恐怖。我慢していた、今まで起こったことすべてが、彼女の前ではち切れました。

本当の幸せというものが、何かもわからず、不思議と感じる心地よさが、もしこれを「幸せ」と言うならば、「幸せ」というものが、あまりにも恐ろしかったのです。好きになられることで、自分もまた好きになっていくことで待っている、その先の喪失が大きすぎて怖かったのです。

壊してしまいました。私は、彼女の「幸福」を、自分の思いで、衝動で、壊してしまいました。大事だと思えるものも大事にできないのです。大切なものほど裏切られるのではないかと思ってしまうのです。壊したくないのに、失うのが怖くて、壊されるのが怖くて、自分で納得する理由を理不尽でもつけたくなるのです。自分が壊せば、自分の中で壊れた理由がはっきりするのです。薄弱であり、愚かでした。

自分でもこんな力があつたのかと思うほど力いっぱい彼女の服を引きちぎっていました。ブラウスのボタンははじけ飛び、押し倒し、フレアスカートをめくって、下着を無理やり下ろしました。

「いや！やめて！お願いよ！総二さん！」

最初は激しく抵抗していましたが、彼女のブラジャーをめくりあげ、私がズボンを下ろし、下半身を露出させると彼女は急に黙り込みました。その様子が、ふっと自分に冷静さを取り戻させました。

「抵抗、しないのですか？」

私が聞くと、彼女は涙を流しながら、私の肩に両手を伸ばして来ました。

「いいのです。好きなのは、本当なんです。総二さんの好きなようにしても、かまわないんです。思うように、滅茶苦茶になさっても、かまわないのですよ」

その言葉に愕然としました。

「どうして...なぜ...」

「総二さんの痛みをわかってあげられなくて、ごめんなさい。私を、許してね...」

彼女は私の頭を、ふくよかな胸の中へと強く抱き寄せました。その柔らかな胸の中に包まれたとき、私は急に熱いものがこみ上げてきて、ずっと激流のように嗚咽していました。その間、ずっと抱きしめていてくれました。

彼女には最初から何の打算もなかったのです。私に対する彼女の思いは、欲もなく、ただ安らぎを与えたいという、押し付けがましくない、慈愛にあふれた好意でした。自分だけが、どうし

ようもなく疑っていたのです。きっと、女神に抱かれるとはこのようなことを言うのだと思います。私が泣き止み、不安げに顔を上げ、彼女の微笑を見た時、女神の美しい円光を見ました。慈愛とは、このことなのだと。

「ひどい顔なさっていますよ。総二さん」

優しく口づけをされ、きっとぐしゃぐしゃであろう自分の泣き顔に無理に笑顔を作ってみせると、彼女は微笑みながら、

「今度は私からさせてくださいね」

と言って、私は包み込まれました。

穏やかな、とても穏やかな安らぎに包まれた時間を過ごしました。この世界の中で唯一存在する光り輝く秘密の楽園のような気がしました。夢を見ているようで、自分の感覚が遠くなってしまった状態でも、はっきりと届いてくる力強さがそこにはありました。しかし魔法はすぐに解けて、残酷な現実へと引き戻されました。

夕方の五時近くになり、彼女が「ごめんなさい。そろそろ夕飯の支度をしないと、また怒られちゃう」と言ったので、私は帰らなくてはならなくなりました。わかっていたのです。最初から。

ここに私の居場所はない、と。

帰ろうとする私に、

「ケーキだけでも食べていかない？総二さんのお口に合うかどうかわからないけれど、おいしいケーキなのよ」

と言ってくれましたが、寂しさが増すだけだと思い、断りました。

私は玄関で靴を履いて「ごめんなさい」と謝ると、

「また、会ってくれますよね？」

と彼女が聞くので、

「そのつもりでいます」

と小さく答えたのですが、もう会ってはいけないような気がしていました。

はっきりと悟ったのです。人妻だからとか、そのような社会上の決め事や「世間」に対しての罪悪感ではないのです。自分には彼女を幸せにできる力なんて微塵も持ち合わせていない。安らかな時間だったとその時は思いましたが、情欲のまま、ケダモノのように彼女を犯しただけでも思い、帰り道を一歩進めるごとに罪悪感が増し、彼女のポロポロで無残な姿だけが頭に鮮明に浮かび、感情に任せて自分の手で引き裂いたことに、母を張り倒した以上の痛みが体の中に走りこみ、肉を蝕み、骨に染みこみ、まるで最初からそこにあったかのように、血肉よりも、もっと奥に「罪の存在」がある気がして、誰もいない公園の夜道をポロポロと涙を流しながら家へと帰りました。

家に帰り、ドアを開けると、玄関に母親が正座して待っていました。私の記憶のあるうちでは一度としてそのようなことをしたことの無い母の姿は、私を驚愕させました。いつから、ここに正座していたのでしょうか、私は靴も脱げず、指先すらも動かすことができずに、体の血が徐々に凍りつくのを感じ、声も出せずにいました。

「お帰りなさい。総二くん」

母は両手を床につけ、丁寧にお辞儀をして来ました。とっさに感じたことの無い恐怖が背中に走り、脚がすくみ、指先が震えるのがわかりました。先ほどの人妻との出来事も瞬時にして消し飛び、目の前の異様な現実には自分の体が硬直しきっていました。

「総二くん。ご飯ができていますので、食べますか？」

嫌に丁寧に私へと話しかけてくるのです。母の顔には表情はなく、能楽でも見ているかのような張り詰めた静寂が存在していました。これが健全な人になら、「おかしいよ？」「大丈夫？」などと聞けるのですが、本人が「正常」だと思い込んでいるので、その意識に反することは多大なストレスを与えるであろうことは、自分でもわかりましたので、背骨を冷たい手で驚づかみされているかのような、おぞましく恐ろしい気持ちで母の言うことに素直に従い、食べることにし

ました。

その日の料理はいつもより豪勢でした。しかし、ひとつだけ違和感のあるものが存在しました。「赤飯」があるのです。いまだに親の誕生日を正確には覚えていないのですが、何月かぐらいはわかっていたので、今月はまったく違う月だし、ましてや自分の誕生日にも遠く、何か喜びごとでもあったのか、聞いたほうがいいのか、それとも聞かずに黙って食べたほうがいいのか、結局何かを聞いて母を激昂させるよりも、黙っていたほうが平穏を保てるかもしれないと思い、異様な空気の重さに喉を通ることすら辛いその食事を、済ませました。その後、母のことよりも、ただ自分の身を守ることをばかり考えていた自分を、一生恥じて、後悔することになりました。

ご飯を食べ終わり、「ご馳走様」を言い終わった時、母は眉一つ動かさずに赤飯を見つめていました。膝の上に手を置き、体を硬直させ、瞬き一つもせず凝視し続ける母の修羅の形相のような緊迫感が異常な迫力で伝わってきて、もうその場にいるのが辛く、私は逃げるようにして部屋に戻り、布団にもぐり眠ろうとした時、人妻とのかげを思い出し、慰めを求め、一人はしたない行為にふけりました。

夜中に一度起きてお手洗いに行った時には異変はなかったのですが、朝方に父親が私の部屋に入ってきて、声を荒げました。

「おい、総二！便所のドアが開かないぞ」

嫌な予感がしました。

母親が布団で寝ていないのです。お手洗いのドアをノックしても中からは返事がありません。

「まさか」とは思わず、「ついに」やってしまったのか、と直感的に感じました。自分だったら、そう予感してはいたのです。ユニットバスになっているドアの鍵は、大昔、それこそ自分が小学生か幼稚園の頃に見た記憶がありました。あの日から、ドアの鍵がある場所が変わっていないのだとしたら、たぶんここだと思い、引き出しの中のもの全部床にばら撒きながら探すと、鍵は見つかりました。

自分だけが覚えていた、鍵の場所。

鍵を父に渡し、父が中を確認するとすぐに「救急車だ！」と叫びました。

中を確認すると、そこには母がバスタブで足を胸元へ折り曲げて、首から血を流して硬直していました。洗面台の上には母の手から引き剥がしたと見られる血まみれの包丁があり、母の右手は包丁を握った時のまま硬直して首元にあり、パジャマは右半身すべて血まみれでした。首筋から流れバスタブの排水口へと流れていく血はかなり多いもので、自分もリストカットをしていた経験から、傷の深さが深刻である状況はすぐにわかりました。よく見ると壁にも血が飛び散っていました。首なので、どう処置していいかもわからず、母の白い顔と首から流れる血を見ると、昨日自分がしていたことをとても恥ずかしく思い、「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」と涙を流しながら母を抱き締め何度も謝りました。

私はその日から、償うことのできない罪を背負いました。

救急車が到着し、父と一緒に乗り込んで病院へと向かいました。救急車の中でサイレンのこもった音を聞きながら、自分の手に母の血がついていることに気がつきました。その血は、乾いた土のようにペリペリとはがれてきました。

うわんうわんとサイレンの音が車内に鳴り響き、病院に着くまで、もう一人の自分が今の状況を眺めているように、他人事のように思え、病院についても現実感がなく、ただ母の運ばれていく担架についていっただけで、手術室の前で、「こちらでお待ち下さい」と医者に言われ、父が何か話していたようですが、私はぼんやりとしていて理解ができず、今の状況ももしかしたら、現実ではないのではないかと、異世界に迷い込んで、自分は特殊な体験をしているのではないかと感じるほどでした。

ひたすら手術室の前で椅子に座って待ち、忙しく往来する病院の職員たちを眺めていると、何もしていない、何もできない自分がただ惨めで、自分の過去すらも走馬灯のように駆け巡り、今さらながら、自分にはもっと何かできたのではないかと思い始め、居ても立っても居られず、右往左往しだし、あまりの凄惨な現実には涙すらも出なかったのか、今になって、ようやくポロポロと涙が落ちそうになるのを、上を向いて必死に抑えたりしていました。

何時間かたち、ようやく手術室から医者が出てくると、父へと近づいていき、

「十時、四十七分、出血多量による、心肺停止により、死亡を、確認いたしました」

神妙な医者の言葉に、父が初めて私の前で涙を流しました。

「そうですか。ありがとうございます」

医者とのやり取りに、何もかも、終わったのだなと、呆然と立ち尽くしました。

このノートを書いている時から、ちょうど三年ほど前になると思いますが、記憶はおぼろげで、少しあいまいで、どういう順序で物事が起きていったのか、断片的にしか覚えておらず、今は忘れそうにもなっていて、記憶の中には、母が死んだという事実だけが残ろうとしています。

母の遺体は母の実家に運ばれました。お通夜や葬式の服装や準備を整えるために、一度家に帰ったとき、父が母の遺書を見つけ、私に「読め」と言って渡し、

「お前が殺したんだ」

と冷たく付け加えました。

今はその遺書が手元にないので、正確に一文一句を書くことはできませんが、内容は、とある社会的地位のある親戚の方に、私のことをよろしく頼みますということと、私の健康と、希望ある未来を願うことと、偉くならなくてもよいので、きちんと一人で暮らしていけるように、頑張るように、私がいなくなれば総二くんは自由になれる、これからは自由に生きてください、と書いていました。

父のことは一切なく、私のことしか書かれていませんでした。

母は、最期の瞬間まで、私を愛していました。親がいなくなれば、自分は自由になれると少しでも考えた自分を、恥じ入りました。生涯において、逃れられぬ痴態を積み重ねてきたのだということを、決定的に悟りました。

死ぬ間際まで、母は私のことしか考えていなかったのです。自分の「生」が、母に責め苦しか与えず、取り返しのつかない状況を引き起こしたのだと、思いました。

私は、地獄に行っても、このことだけは猛烈に懺悔し続けます。

しかし、都合がよすぎることだけれど、神様というものが本当にいて、たったひとつだけ叶えてくれるなら願いたい。私は手遅れだったけれど、あなたの周りで傷ついたり悩んでいたりとしている大事な人がいたのならば、その心の傷にいち早く気がついてあげて欲しい。私のように、後悔を残す前に、「当たり前」だと思っている大事な存在に、自分の力の及ぶ範囲だけでいい、寄り添ってあげて欲しい。せめて、他人にはこのような悲しみは経験して欲しくはないのです。私が、この生涯で、たったひとつ人に望むことです。

仏壇に飾られている祖父の遺影の前に、その娘の遺体が置かれ、祖母はすがり付いて泣くばかりでした。

母の妹が東京から夫と共に帰ってきて、「どうしてこうなったのか」ということを父に聞いていました。その時の、恨みのこもったような冷たい視線を、今でも忘れることはできません。

お前のせいだ。

社会では、「責任の所在を明確にする」とよく言われ、重役や政治家が辞任したり、職員が処罰を受けたりしますが、私の場合、どうすればよいのだろうかと考えたとき、とっさに「死」が浮かびました。

罰を受ける、罪を償う、行為と代償、信頼と裏切り、利益と不利益、集団と個人、家族と私。

死にたくななくても、もはや生きることを許されない。笑いたくても、もはや笑うことを許されない。幸せになりたくても、もはや幸せになることを許されない。一生の罪を背負い、永遠に、罵り続けられる、社会の害悪。

罪と、罰。

もう、救済はないのだ。許しなど、求めるだけでおこがましく、手を伸ばしてすがり付こうものなら、愚物として壇上から蹴落とされるだけなのだ。

もう、生きていく場所はない。

葬式の時、親戚一同が集まりました。母があのような死に方をしたものですから、祖母は号泣の末に倒れ、病院へ運ばれてもよいような状態でも、ここに残ると言い張り、皆、祖母には同情の念を向け、私には言葉少なめで、その沈黙がすべて私への蔑視であり、心の冷笑だどつくづく感じました。

中には、「お気の毒にね」と声をかけてくれる人もいましたが、父がひたすら私のせいで母が死んだことを言いふらしていることを知っていましたし、話の輪に近づこうものなら、脂汗の出るほど、鋭い刃のような視線を向けられるので、ただ母の棺桶の近くでじっと座っているしかなく、一通り用意された食事も手をつけようにも手をつけられず、食べてもよい「お許し」が出るまで、勝手に手をつけてはいけない圧迫感を感じ、後ろめたさに、誰とも目を合わせることができず、俯いて床を見て、時折棺桶をちらりと横目で見るだけでした。

結局、お手洗いにいく以外は椅子にずっと座って俯くだけで、母の死に顔を見ることすら後ろめたく、この葬儀上での私の行動は、すべて誰かの「許可」がないとできないように感じました。

深夜になり、葬儀場に泊まる親戚などもおり、小さい頃お正月に遊んでもらった記憶のあるお兄さんが、私の側へと寄ってきて、

「総二ちゃん。何か食べないと体壊しちゃうよ。ほら、こっち来て食べなよ」

私が側に座るとビールを注いでくれたり食べ物によそってくれたりして、

「これからどうしていくつもりだい？」

と聞くのです。

「なにをですか？」

「自分の将来のこと、どうするつもりなの？」

自嘲的な気持ちで、黙っていました。

(働くつもりです)

それしか答えは残っていないように思いました。大学もろくに行かずに家にばかりこもっていた私が、このまま就職しても、「母殺し」の汚名をそそぐことはできないし、もしばれでもしたら生きていくことができないように思えました。人は幅広い答えを出せる質問をわざと出して、遠まわしに相手を試すような会話をよくします。最初から答えるべき言葉は用意されていて、それを答えないと批判めいたことを言われることはわかっていました。ここで「詩人にでもなって、自由に生きていくつもりです」と言ったら、「現実をもっとよく考えたほうがいいよ」だなんて親切そうなことを言いながら、鼻で笑ったに違いありません。

罪のある者や、能力のない者は、この社会から自然と省かれ、一生隔離されたように生きていくしかない。それが社会のシステムであることは、ウスラ馬鹿の私でもよくわかっていました。

しかしこの時は、自分のことを聞かれるたびに、ただ逃げたい気持ちが積もってきて、この場にいるのが嫌でたまらなく、もうこんな現実からは解放されたいということばかり考えていました。

どこに行っても人はいる。何をしても人は見ている。

もう、かまわないで欲しい。

自暴自棄とも言える気持ちが支配していました。

葬儀が終わり、父が喪主として最後の言葉を言いますが、葬儀屋の用意したお決まりの言い回しを、そのまま言うだけでした。その間にも、ちらりちらりと睨みつけてくる父の視線は、家族としてもう見てはいない、なぜお前が生まれてきたのか、そんな厳しい視線でした。

火葬場へ行く前に、葬儀場で棺桶の四方を釘で打ち、蓋を閉めるのですが、その前に少しでも母の顔が見ることができました。首には白い布が巻かれて、スカーフのようにうまく傷を隠している母の死に顔は、目を閉じてはいるものの、無表情のまま硬直していました。

その母の死に顔の中に、初めて人の中に、「無」のような、寂しいとも言い難い、喪失とも言い難い、悲しいとも、苦しいとも言えない、すべてが拡散して、やがて薄らいで消えてしまうかのような「虚無性」とも言うべきものを感じました。

棺桶の蓋が閉められるまでの間、母の死に顔に、奇妙な引力を感じ、どこまでも吸い込まれていって、自分がいなくなってしまうかのような感覚に陥っていて、父に「おい、閉めるからどけ」と言われるまで、覗き込んでいたことに気がつきませんでした。

火葬場に着くと、耳がキーンと鳴り響いて、ずっと頭痛がしてぼんやりしていたのを覚えています。やはり葬儀場と同じようにして、昼食時など、火葬までの時間を待っている時に、誰かから「お許し」が出るまで一步も動かず、ひたすら石のように、風のように、雰囲気消すことに努めていました。

母は、焼かれて骨になりました。真っ白な骨しか残りませんでした。骨壺に潰されながら押し込まれていく母の骨は灰のようになって、胸の中にすっぽりと納まるほど小さくなってしまいました。こうして、生まれて初めて母を抱き締めたのが、骨壺とは。

それからの父は忙しく動いていました。特に変わったことと言えば、母の遺品をすべて片付けだしたことです。

「見たくもない」

と言って、首を切った包丁はもちろん、母の面影が残るような愛用品や洋服や小物、バッグなど、よく使っていたものを、袋の中に詰めてすべて捨ててしまいました。

その間、時折私に怒鳴り散らし、「手伝え浮浪者」「さっさとやれ無職」「何ひとつできないくせに食べるものだけ食べやがって」「何ひとつ役に立たない」、インターネットをやっていると、「金も払ってないくせにパソコンなんてやるな」、牛乳を飲むのでさえ「働きもしないやつは水でも飲んどけ」と言いながらも、「お前なんて無学なやつはどこも雇ってくれない」「お前は一生肉体労働だ」「ゴミ拾いや掃除もまともにできないだろ」など、顔を合わせるごとに言うようになり、直接暴力はふるわないにしろ、ドアをわざと強く閉めたり、少しでも家の中で進行方向を妨げたりすると「邪魔だどけ」と言われたり、洗濯物を投げつけられたりと、あからさまにひどくなってきました。

葬式の後、何度か人妻からも連絡が来ていたのですが、もはや彼女に救いを求めても迷惑がかかるだけだと思い、金輪際連絡は絶とうと、詩のサイトからも姿を消しましたが、どうしても孤独に耐えられなくなり、たまらなく「私の事情を知らない、見知らぬ誰か」と話したくなり、掲示板サイトで書き込みをしていると、東京で教師をしているという女性と仲良くなることができました。

その女性はサエコと言いましたが、サエコと親しくなっていくのは、それほど時間がかかりませんでした。私は父からの仕打ちのことや、（私が殺したと言うことは伏せて）母が自殺したことなどを、自分の悲痛な心情とともに並べ立て、人はかくあるべしと規範となるべき行動を論じ、父をあげつらい、なぜ人はああも愚かなのだと嘆き（まさに自分のことを棚に上げた入神の演技でした）、とにかくここにはもういたくないのだ、新しい自分でいたい、と彼女に毎日のよう

に言い、彼女の相談にもたくさん乗り、あたかも言葉上だけでは紳士のようにメールや電話などのやり取りをしました。

彼女と話しながら、私の脳裏にあったのは、「東京」という場所でした。

その頃はもうマリエの事件からは何年も経っていましたが、すっかりそのことは忘れていて、人の多さと、人を物のように眺め過ぎて行く、親切的無関心さを思い返していました。

東京。

もし、あの小さな場所にひしめき合う一千万人の中の一人になれば、多種多様な価値観と、隠蔽された汚濁のような罪の多さと、無関心さの中に、自分の存在も薄れ、罪もごまかせるのではないか、罪を犯していながらも罪を意識せず、あいつの方が悪いじゃないかと指を指すことで得られる安心感と逃避感、あいつも同じ罪人じゃないかと堂々と転嫁させられる意地汚さで自分の罪が償われたかのようになり、罪を陰で重ねては、共謀犯罪をしているハイエナのような連帯感、あたかも腐ったみかん箱の中に、腐りきったみかんが入るような違和感のなさがあり、悪の多さゆえに、もはや悪にすらならない場所なのだと、そう思ったのです。

生きながら死んでいる私にとって、あの人の多さは逆に都合のいいもののように思い、彼女に家に置いてくれないか、お金はないんだが、貸してくれないか、ちゃんと返すから、自分は本を書いているのだが、東京で少し用事があるのだ、と必死に嘘を入り混じらせて、彼女から月給の二か月分のお金を引き出すことができました。

お金を持つと、気持ちが軽くなったかのようにでした。もうこの家に住まなくてすむ。札幌から高飛びできる。そう思うと父の嫌味も行動もだんだんと気にならなくなりました。

「さっさと働きに出ろ。無職のおじさん」

無精ひげの私に、そう言う父の言葉に対しても反論できるようになりました。

「働きます」

「働くだって？お前みたいなやつ、どこが雇ってくれるって言うんだ」

「東京に出ます。東京で働きます」

「東京だって？そんな金どこにあるんだ」

「あります。行きますから」

最後まで、馬鹿にしたような顔をしていました。それが、父と顔を合わせた最後の日になりました。

父の気持ちは、最後までわかりませんでした。子供のことを心配しない親はいない、今のあなたがいるのは親のおかげなんだよ、ちゃんと養ってくれているのだよ、文句を言うなら自分で稼いでからにしろと、よく親戚の方々から聞かされ、嫌な思いをしながら黙っていたことを覚えています。もし心配ゆえの行動だと認めても、その表現方法が悪ければ、人間はその人生において、拭い去れない深い傷を負うものなのだと、そしてその傷が、人生を狂わすこともあるのだと、私は思います。

次の日、予約した飛行機で東京へと飛びました。空港からモノレールで浜松町へと乗っていく時、久しぶりに見た東京は、変わったような、変わらないような、新旧入り混じった雑多な街並みに、妙な懐かしみを覚えました。

新しく建つビルの横に、ボロボロのアパートがあるのを見ると、この街は時間とともに、罪さえもなかったように、すべてのものが消えていくのだ、と思いました。

時間の彼方に消えていく、罪。人はその罪と忘却の永遠の繰り返しなのだと、流れる景色の中に自分の姿を重ねました。

駅に着くたびに、新しい景色が見え、新しい人たちが乗り、古い人たちが降りていきます。古

いものを捨てて、新しく再出発する。人の金を使って、他人の生活を盗むようなことをしておきながらも、心は躍るようでした。私は自由なのだと、一瞬だけでも感じました。しかしまたもや後に打ち砕かれました。

なぜでしょう。いえ、当たり前なのかもしれません。人は罪を隠蔽しきれない。人は己の愚かさに相応しい生き方をしていくものなのかもしれません。

東京に着いたことをサエコに連絡すると、サエコは急に渋りだしました。家に迎える準備をしていない、ずっと一人暮らしをしてきて、あまり他人との共同生活をしたことがないから自信がない、今日は用事があって外泊しなければいけないから、明日にして欲しい、と言い出したのです。

私も急に東京に来たわけではなく、行く日にちは伝えてあり、「もしかしたら日にちはずれるかも」とは伝え、「日にちが変わる」とは言っていなかったのです。私があいまいだったのがいけなかったのだと、その時は思いました。

一日、東京の街を回ってみました。公園に陣取るホームレス。自分の何倍もの速度で時間を気にしながら（走っているかのように）歩くスーツ姿の人たち。綺麗な格好をして、すました顔をして歩く女性たち。一線を画した奇抜な格好の人たち。怠惰を表現しきって、それを何ひとつも悪くない、むしろ自分の個性だと主張する若者たち。この街の人たちは、自分を主張しながらも、自分と同じような種類の人間の集団に守られ、安心しているのだと悟りました。そして、この街にこそ自分のいるべき場所があるのだと信じようと思いました。

この街で、新しい自分で、何もかも生まれ変わったかのように新しい生活を始めていくという思いはありましたが、単なる自分に対する怠惰な欺瞞でしかありませんでした。人は常に、一日一日と、昨日を積み重ねた上に成り立った自分でしかなく、金を持とうが、地位があろうが、虚飾が剥がれれば醜いものでしかなく、私の場合それは「母殺し」であり「日陰者」であり「自分の過去から逃げた卑怯者」でしかありませんでした。

高級店の建ち並ぶ銀座の宝石店で彼女のために宝石を選んであげているあの男のようになりたいとか、金も仕事も気にすることのなく、いかに飾りきるかに心血を注ぐご婦人方のランチのような昼下がりをご馳走したいとか、考えることは怠惰なことばかりで、しかしあの姿を見ると、勤勉であることすら馬鹿らしく見え、新しい自分さえも見失いそうになり、結局東京でやり始めたのは、道行く人に怪訝な顔をされる、チラシ配りやティッシュ配りでしかありませんでした。

サエコに出会った時、それほど自分では違和感は覚えなかったのですが、家に泊めてもらえるという安心感から、多少は気を配りながらも自分の家のようにして過ごしていたのですが、それが間違いでした。

サエコは大変神経質な性格で、物を一つずらしたただけでも気にかかるようで、鍋や食器など、使っていないとは言ったものの、ここにまだ汚れが残っている、洗い方が悪い、牛乳を入れ忘れると、腐ったらどうする、床には外から持ってきたものを置くので汚いから（実際にはとても綺麗なのですが、外から持ってきたものを床に置くというのが、公衆便所の床にでも見るような言い方で）スリッパを履いて欲しいと言われ、履かずに歩くとひどく怒られました。

まるで目に見えない細菌が部屋を蝕み、食物を蝕み、体を蝕んでいくかのように、彼女は言うのです。きっと彼女の頭の中では、すべてのものが潔癖な状態で存在していて、少しでも汚されることに嫌悪感を抱くのでしょう。

その他にも、（自分は男に電話しているのに）夜中にパソコンを使うとキーボードの音がうるさいので眠れない、作り置きしておくために作ったご飯を一気に食べると、食べすぎだとか、ひとつお菓子を食べて、一個食べた、ゴミ箱の中まで見て、あれを食べたでしょ、匂いがしたもん、と私が来たことで思い通りにいかなかったことが、ひどく神経を張り詰めさせていたようでした。

今度友達が来るのでその間はいないで欲しい、本を開いたまま伏せておくと、人の本なのに癖がつくでしょ、そういう使い方をする人は嫌いなんだけど、などなど、注意をされるごとに次第にお互いの口数も少なくなり、サエコはただパソコンに向かってインターネットをするだけになり、話しかけてもあまり答えてくれず、狭い家の中で露骨に避けるようになりました。関わりたくもない、悪辣な人間として見られていました。

私はそのサエコの家でも居場所を失い、次第に飲みに出かけるようになり、新宿のバーに入り浸るようになりました。飲んでいる時に、何かの拍子に、どんな職業の人かということを知られ

たりするのですが、自分にある、他人とは違う才能とはなんだと考え、ありふれていないものなら、誤魔化せると思い、見栄を張り、作家をやっていますなどと馬鹿げた嘘をついていたのですが、即興の詩も口頭で言えることから、案外通用し、それ以後は「職業」に不便しなくなりました。

特に「人間とはさもありなん」ということを真剣に論じると、人は心当たりがあるのか、最もだと言う、身につまされるような顔をして頷くものですから、すっかり「世間」というものは、案外自分が恐れるほどのところでもない、うまくやろうと思えば、こうして騙していけるものだと安心するようになりました。

しかし恐怖はありました。

罪にまみれた陰気さ、人に恐怖しきって社会に快く適応できない暗愚さ、道化としてそれらがばれないようにと、必死に饒舌を装って、腐りきったものを背の奥へと蹴り隠すような滑稽さが匂いはしないかと気が気ではなく、彼らに気に入られるためには、地に頭をこすりつけているようなへつらいを気取られず、さも明るく健やかに取り入るためにはどのようにすればよいのか、毎日が千変万化の迫真の演技で、それこそ酒の力もあって神懸かっていました。過去の私を知るものは誰もここにはいないはずだ、大丈夫だ、と悪夢を忘れるかのように酒をあおり、他人の悩みに対して、人はこうあるべきだとか、あたかも希望を持たせるようなことを言い、深く理解したかのように神妙に頷き（聖人を装い悪魔を信仰しているような裏切りでした）、酔った上での快活な弁論で他人を納得させるようなことを並べ立てると、少しずつそのバーでは、ちょっと名の知れた有名人になりつつありました。さすがに女の金で飲んでいて自分は働いていないのだとは言えず、真実を言う必要性も感じず、またもや狡猾なる虚飾で他人を騙しているという恐怖感も、荒んでどんよりと重苦しく塞ぎきった気持ちも、酒を飲むと不思議と快晴となって、勇気を持って様々なことを人に向かって言うことができました。酔いが覚めた次の朝は、偽りの自分を演じ続けたことにひどく吐き気がし、二日酔いなのか、自己嫌悪なのかわからないくらいでした。

きっと彼らも、私が母親殺しであり、穀潰しであり、資本主義社会において、何の生産性も利益も出せない人間だと知ったら、たちまち私に唾を吐きかけ、その汚らわしさから裏路地のゴミ捨て場にでも放り込むでしょうに、なんとそこでは尊敬されかけていたのです。

尊敬される。

なんと恐ろしい裏切りでしょう。

しかし、ばれないはずだ、いかに全知全能でも、酒の席での戯言を批判する、寛大さが無い神はいるまい、こうして親しげに話しかけられ、もっともらしい事を言っていれば、人は「まともな人間」だと見てくれるのだ。

ただの自負心ともろい信仰心で成り立っているような自我で、酒の席ともなると、酔いの末に私よりも愚かに振舞う人間が多く、「あいつよりはまりました」と安心していてもありますが、相手が話に乗らない時、さも興味なさげにそっぽを向いたとき、恐怖が額を走ることもありました。もしかして自分の正体がばれたのではないか、そう思えば思うほど饒舌になり、隠していた自己嫌悪から昇ってくるような反吐にも似た戦慄を、早く忘れたく、泥酔と言っていいほど酒を飲みました。

泥酔までいかなければ飲んだ気もせず、酔わずに帰ると無性に寂しくなり、寂しさを忘れるためにも余計に杯を重ねていくという、いわば自らの精神の弱さから酒に溺れるわけですが、狂いそうな孤独を支えていたのは、滑稽な人の姿でした。

酒の席で男が話すことと言ったら、知識をあたかも自分の力や功績かのように誇らしげに話し、周囲の関心を集めるか、もしくは粗野な席であれば、女の話などになり、性欲にまみれていて、しかも時間潰しのために使うようならくでもない話題ばかりで、酔いも覚めるような思いでしたが、サエコのことを思い出すと、また暗鬱としてきて、帰る気もおこらず、始発の電車まで店に残って飲んでおくこともしばしばありました。

時折、銀座などの少々敷居の高いバーでは、知識や趣味の話題の豊富さについていけないこともありました。私は大学を中退しましたし、それ以来ろくに勉学に関心を示さなかったので、知恵のない知識の使い方というものをつぶさに垣間見たような気がします。彼らの知識についていなければ、無教養者とされ、取るに足りない者だと冷ややかな眼差しを受け、知識を持っているものは尊敬に近い口ぶりをされるわけですが、なるほど、権威と言うものには、知識がまず必要であって、威厳らしさを示すには、やはり「もっともらしさ」というのがどこでも必要になってくるのだ、人はまず内側の最も深いところにある薄汚い真実よりも、綺麗に装飾された外観を見事だと褒めちぎるのだと思いましたが、時折、彼らの仲間の一人帰った後に、陰口を叩いているのを見ると、どこに行こうと人は変わらずに、こうも毎日を過ごしていくのだと虚しくなったものでした。

私がバーで飲むことが増えた理由に、サエコが週末になると、必ずと言っていいほど出かけるか、誰かを部屋に呼んでいることがありました。来客中は「紹介もしたくない人間」のように、追い払われました。定時制の高校教師である彼女の家には卒業生や、私と同じようにインターネットで知り合った友人など、多くの来客があり、また休みの日は活発に外に出て羽を伸ばしているようでしたが、実際には何をしていたのかよくわかりませんでした。

何も会話がない日が続いたある日、「ちょっと話がある」と、いきなり改まって話しかけてくるので、話を聞くと、「家から出て行って欲しい」と告げられました。

理由を聞くと、ストレスで生理が遅れている、七年も一人でやってきて一人の生活に慣れているので、やっぱり他人と共同生活はできない、それに、と付け加えたように言った内容が、私にとっては魂を死に至らしめた最後の一撃でした。

「総二くんの生活力のなさとか、常識感覚のなさには正直言って驚いた。まともな人だと思っていたのに、なにからなにまでおかしいと思うし、私はお酒は楽しむ時にしか飲まないから、お酒を何でいつも飲むのかもわからない。帰って来る時間もわからない。生活リズムが合わないし、価値観も違う。人には色々な幸せや価値観があるけれど、それを邪魔するつもりはない。でもそれらをすべて受け入れてうまくやっていくのはとても難しいことだと思う。お金だって返してくれるとか言って、全然返す気配もない。総二くんは働いてないんでしょう？組織の中できちんと動ける行動力や適応力がまったくないだろうし、そこで苦勞する人間の気持ちだって理解できるはずがない。私の気持ちなんてわかるはずがない。もう少し社会で生きていく力を養ったほうがいいと思うし、総二くんのためにこれ以上神経すり減らしたくないの。もう触れられるのも嫌だし、顔を見るだけで胃が痛くなるの。私は勝手に思い描いて会ったことも無いのに同居を受け入れた軽率さとちゃんと断れない甘さに落胆してます。もう関わりたくないです。だから帰って欲しい。お金はちゃんと返してください」

最後通告でした。またか、とは思いませんでした。その決定的な通告は「お前の秘密をずっと知っていたぞ」という、生きてきた私への真実でした。

正論過ぎて反論する隙もありませんでした。私は人を騙してなどいなかった。すべて見抜かれていた上での付き合いだったのだ。きっと、私が消えた後、皆あざ笑っていて、時間潰しの滑稽な相手として、見世物でも見るような気持ちで相手にしていたのだ。サエコにさえ否定され、もう帰る場所もなくなったのだなと思いました。

一日、さ迷いました。東京の街を当てもなくさ迷い、気がついたら「尊敬されかけていた」バーに行き着き、この上もなく陽気に振る舞い、人を笑わせ、楽しませるだけ楽しませました。自分でもこのようなサービスができるのかと思うほど、この日は「芸に秀でて」いました。その日は自分の肉を切り売りしているような気持ちでした。サービスをすればするほど、自分ではなくなり、自分の中に詰まっていたものが空になり、最後には、がらんどうになるのではないかと思ったほどでした。お客も、よく笑いました。私もその場限りではとても楽しく、つつい調子に乗り、かつてないほどの垢抜け方で、「よし、今日はお前に一杯おごってやろう」だなんて、たくさん杯をいただいたりして、喜劇役者でも通じるのではないかと過信したほどです。

酔いから覚めれば最悪でした。頭は痛く、意識はもうろうとして、吐き気はひどく、何度か路上で吐いたほどでした。東京に来てからというもの、ほとんど飲み屋でサエコから借りたお金を使ったようなものでした。財布の中を見れば、残りわずかで、わびしいとしか感じず、サエコから言われた言葉が余計に死にきった魂の傷を抉るようでした。

財布をポケットの中に戻すと、硬いものにあたり、そういえば合鍵を借りたまま返していなかったと気づきました。

そのままサエコの家に戻り、迷惑をかけたことを最後に謝って別れようと思い、合鍵で彼女の家に入っていくと、すりガラス戸の向こう側にあるベッドのある部屋で、声がしました。

「いや、やめてよ。いきなりしないで。えっちだけしに来たみたいじゃん」

「いいだろ。大好きなんだよ。な？」

サエコの声と男の声がしました。直感的に、「電話の男」だと思いました。

そのまま、二人の異様な声が、閉められたすりガラス戸の向こうから聞こえてきて、汁物を行儀悪く吸うような音や、肉のぶつかる音や、獣があえぐ声や、二人の会話が聞こえてきました。

私はキッチンの側にあるテーブルの椅子に座り、すりガラス越しに見える、ゆらゆらと揺れる影と、はっきりと聞こえる動物の営みを、握りつぶされそうな心臓で、黙って聞いていました。同意の上での行為。

ふいに、人妻を襲った時のことを思い出しました。

自分もあの男と何ひとつ変わりがない、いや、それどころかあの男よりももっとひどい獣なのだ。人妻の意思を無視し、魂を食いつぶした、動物以下の存在なのだ。

「慈愛」ですら、私を傷つけました。人妻から許しを与えられたことが、逆に私に責め苦を与えました。なぜあの時許されたのだ。あの時、私を恨み、責めていたのなら、少しはこの罪の気持ちも、まだあるべき地獄に置けたかもしれないのに、救いもされず、落とされもせず、業火とはこのことか、いやしかし、いくら火に焼かれようと、私の罪は浄化されることは永遠にない。

怒号とともに、すりガラスを開けようか、開けたところで何になる、これが現実だ、二人は好き同士で、私は嫌われている。狂いそうでした。

素直さ、無抵抗は破壊されるに値するか。痛みを受け、忍び続けることは傲慢に屈することか。怒りは救いを与えるのか。何もかもを壊してしまう前に、早くここから出よう。

私は、ヘラヘラとニヤケ面を浮かべながら、黙って部屋を出ました。

その日から、性欲がなくなり、女性には一切の性的魅力を抱かなくなったほか、人間にも、ことごとく興味がなくなりました。食べることも少しずつ辛くなり、食も細くなってきました。

人はお腹が空き、そのために食欲を満たそうとお金を得ます。生活するのにすらお金がかかる。ですから食欲と（面倒くさくても）食欲を満たすための労働意欲、それが最低限の生きようとする者が最低限持つ欲求です。性欲は動物的本能として埋め込まれたものです。どちらも生理現象と言うぐらいの、動物として意識しなくても勝手に湧き出るものを失ってしまいました。

生きたくもなくなっていました。

もはや、私は、人間として失格なのだ、と、思ったのです。

もう、死のう。

そう思って、誰か一緒に死にませんか、とインターネットに書き込みをしたところ、意外にも簡単に相手が見つかりました。

その人は一人暮らしの女性でした。一人で死ぬのは嫌だから、仲間を探していた、ということでした。

「いつでも死ぬ」と思うことは、ちょっとした安心感を与えました。彼女もそう思っていたかどうかはわかりませんが、数ヶ月一緒に暮らすことができました。とても楽しい時間でした。

彼女とは本名で呼び合わず、掲示板上で使っていた「ハンドルネーム」で呼び合っていて、私は「サメジマ」で、彼女は「クレアたん」だったので「クレア」と呼んでいました。

数ヶ月間、私は時折ティッシュやチラシ配りをして、家賃を稼いでいました。

ある日、工作中に、足元においてあった段ボール箱の中のティッシュをたくさんもっていこうとする人がいるので「やめてください」と止めると、「うるせえな！たかがティッシュ配りのくせに偉そうに言うなよ」と吐き捨てて去っていきました。その時、寂しく一人で笑ってしまいました。ティッシュを配っていると、人間的価値も軽々しくなるようです。

彼女はというと、時折インターネットを通じて知り合った男性を相手に、いかがわしい行為をしてお金をもらい、稼いだお金のほとんどは「旅の資金」として貯めているようでした。自分も「旅の資金」は貯めていました。

家賃と光熱費などの他には、ほとんどお金はかからず、驚いたのは、冷蔵庫の大きな冷凍室の中にはラップでくるんだ牛肉が所狭しと詰め込まれていました。

「どうしたのこれ？」

と聞くと、彼女はケラケラ笑いながら、

「この前牛肉の問題がニュースであったみたいで、それで全然売れなくてスーパーとかが捨てたものを私が拾ってきたのよ。賞味期限もちゃんと切れてなかったものを冷凍してあるし、ざっと見たって二、三ヶ月はずっと牛肉でいけると思うよ。人ってさ、こうだと思ったら、不安だとか、食べられないとか言って、本当は食べられるものまで、平気で捨てちゃうものね。私たちがみたい」

との言葉にはっとさせられました。

そうだ、自分たちは捨てられたのだ。もはや拾われることはない、廃棄物だ。

食費をかけることは一切ありませんでした。それこそ彼女が、（食中毒などのリスク管理を企業が万全にしすぎたおかげで）賞味期限が切れるぎりぎりまで廃棄された弁当などを、拾ってきては食べました。売っているお弁当と、なんら変わりませんでした。

それでも、二人とも食が細くなっていたので、弁当を二日に分けて食べたりしていましたが、どんどん拾えるので、時折あまるほどにもなりました。食べなければならない、消費しなければ

ならないということが苦痛で、食べるということも、まるで儀式的になってくるかのように、ひどく嫌になってきました。

余分なものを作り出しては、それを補うためにあらゆる資源を使って、こうして余らせる。「労働」にも、「豊かさ」にも、吐き気がして、とたんに食欲をなくしました。

ティッシュ配りも、馬鹿らしくなって辞めました。

それからは、酒に溺れる毎日になりました。

ウォッカ、ジン、ウイスキー、ブランデーなど、強くて安い酒を浴びるようにして飲む日が続きました。

彼女が裸で、洗面所に手首から血を流して倒れているのを見ても、別になんとも思わなくなりました。死ぬのに、汚れたものを洗濯機で洗っているのは、おかしい気がしながら、ベッドに運ぶ時も、男として反応することはありませんでした。飲んで吐き戻しを繰り返して、便器に向かって胃液すらも涙を流しながら吐き出していく様子は、自分の腐りきったものを出し切る懺悔のようにも思えました。それでも、まだ酒を飲み、泥酔状態で天井を眺める自分の横で、彼女がカッターナイフで手首を切って血を流す。まるで地獄の様相でした。

そして恐ろしい夢を見ました。

私は夢の中で、布団で寝ていました。

周囲には何人かいるようでしたが、気配だけで本当はいなかったのかもしれませんが。

薄明るい中に私の掛け布団を踏んでまたいできた人がいて、踏まれた布団の部分は私の体に近い所だったため布団が微かに引っ張られているのがわかりました。

誰かと思い、見てみると、父が酔っ払いながら私を見て、何かを言ったような気がしました。

そのあとほろ酔いのような表情で、懐からカッターナイフを取り出し、キチキチと音を鳴らし、刃を出して私を見つめていました。

さすがの私も恐怖を感じましたが、掛け布団の両側を踏まれているために、体が動かず、そのまま父はカッターナイフで切りかかってきて、私は唯一自由になる左腕を出して守ろうとしました。

父も私を殺すまでは気持ちがいかないのでしょうか。

そのあとは何度も体重を乗せて、深く刃を入れるように力を入れて、左腕を切り付け、思いやる感傷ひとつ顔に表さずに私を傷つけるので、あまりの恐怖に発狂しかけ、目覚めました。

目覚めても、とても夢だとは思えず、今自分がどこにいるのかもわからなくなり、あたかも今まで父がここで何かよからぬことをしようとしていたのでは、という恐怖と不安が襲いました。

夢にまで、出るようになったか、と思った瞬間、携帯電話に父からの着信がありました。

恐怖に震え上がった私は、その日に携帯電話を捨てました。恐怖すらも「恐怖」と表現できないほど、張り詰めすぎていて、寸分の感情の身動きもできないようになっていました。

直後の夕方、しくしく痛いんでいた腹部に激痛が走り、ちょうどお腹の裏側辺りの背中が痛くなり、四十度近くの高熱が出て、それから少し経って、反吐のように白いシーツの上に嘔血しました。

もはや、死んだほうがいいと思えるほどの痛みに、一日中うめきまわり、病院に行く気持ちもお金もないものですから、脂汗を出し、発狂寸前の苦悶の声をあげて、治るまで何も飲食できず、数日転げまわりました。

「酒で、胃がやられちゃったかな」

私が彼女に言うと、わりとケロリとした顔をしながら言いました。

「酒では胃はやられないよ。ストレスで穴が開くことはあるけど。治るにはストレスを取り除か

ないと無理だろうね」

ストレス。

もう、無理でしょう。そのストレスを取り除く方法は、もう、ありません。きっと肝臓も悪くなっているに違いありません。もう胃だろうと肝臓だろうとどっちでもよくなりました。

便が黒くなり、喀血する前から下血しているのもわかりましたし、血尿も出ていたので、本格的にノートを書き残さなければならないと思ったのも、この時でした。

潮時でした。

ちょうどこの頃に、あなたから、相談で救われた、私に新しい人生と命を与えられたという感謝に満ちたメールをもらい、とても微笑ましく感じましたが、もうすでに、心の中はからっぽで、なにかひとつでも、生きている成果が出たのだ、という達成感に、もうそれ以上思い残すことは、ないように感じていました。

空虚でした。もはや、なにかが欠け落ちていて、遥か彼方の異国を思うような気持ちで、あなたからのメールを読んでいたのでした。

その時に、あなたへと、ノートを渡そうと思ったのです。人妻に渡すのは、彼女の家庭にもご迷惑がかかるでしょうから、勝手ながら、あなたにいたしました。

今は、父に対する恨みも憎しみも、自分に対する卑屈さも恥も、すべて消えてなくなりました。

ほとんど食をとらないせいで、以前の面影は垣間見ることもできず、鏡に映る姿は、あまりにも不安定で狂気に満ち、怪談じみている、どこぞの絵画に描かれている咆哮する幽鬼のようにも見えます。

もう、人間ではなくなったんだと、はっきりと悟りました。

彼女は、精神科に通っていたのですが、なかなか医者が望む薬を出してくれないと言っていました。彼女の薬の知識は豊富で、作用と副作用、用法や、それらの薬を使って「飛ぶ」方法もたくさん知っていましたが、私といる間はそれを一切しませんでした。

メイラックス、アナフラニール、ロヒプノール、パキシル、ジェイゾロフト、など、知っている薬の名前を言ってくれたときに、「パレードの名前みたいだね」と言ったら彼女は笑っていました。

「ハルシオンをさ、医者がなかなか出してくれないのよ。私には必要ないって」

ハルシオンとは何かと聞いたら、いわゆる強めの睡眠薬だと説明してくれました。

「くれる友達持ってない？」

と聞かれた時、同じくインターネットで知り合った精神科に通っている友達のことを思い出しました。

「ハルシオンって知ってる？あったらくれない？」

とメールを打つと、

「この前たくさん友達から譲ってもらったから大量にあるよ。軽めと重めのあるけど、使うの初めて？どれくらい欲しいの？」

と、あっさりと簡単に手に入れられる見込みが付き、「初めてだよ」と答えると、

「それなら薬の耐性もないだろうから、軽いのもぐっすり眠れるよ」

とアドバイスを受けました。

自分はその時に、「旅の資金」も貯まったこともあって、もう自殺の方法を考えていて、眠ることは考えていませんでした。

彼女と自分の分が二錠ずつだから、合計四錠あれば充分かなと思い、「ハルシオン四錠（よんじょう）」とメールで打ち込もうとしたところ、キーボードで早く打ちすぎたのか、頭の中でこんがらがったのか、「ハルシオン」が「走るよおん」と間違えて変換されていました。

ハルシオンで走るよん。

でも、眠くなるから走れないよん。

などと考えた時、あまりのくだらなさや馬鹿さ加減に、何を考えているんだと、自分の姿が滑稽になってきてケラケラと一人でいつまでも笑っていました。笑うのですら、体が悲鳴を上げていましたが、その時はとても楽でした。

真剣な考え事の中でのくだらない思いつきは、腹の底から抑えたような笑いをいつまでも引き出しました。

ちょっとした入れ違いや間違いで、こんな誰も見向きもせず失笑するくだらないものになる。人生ももしかしたら少しの入れ違いで喜劇になるものかもしれないと思ったら、今まで一生懸命悩んできたことが、一体なんだったのかと思うくらい、くだらなく思えてきました。

人生の悲劇と喜劇は、紙一重なのかもしれません。

きっと、それだけがたったひとつの真実です。

あれやこれやと考えているうちに、思いのほか、ひょうきんな詩ができたので載せておきます。

暗澹閑散簡単たん

(あんたんかんさんかんたんたん)

血みどろ魂お洗濯

(ちみどろたましいおせんたく)

肝胆間断相照らす

(かんたんかんだんあいてらす)

切れ切れ魂悪寒して

(きれぎれたましいおかんして)

擦り切れ千切れて踏みにじる

(すりきれちぎれてふみにじる)

蛙も鳴かにゃあ

(かえるもなかにゃあ)

そっぽを向いて

(そっぽをむいて)

鳥も鳴かねど調子づき

(とりもなかねどちょうしづき)

梢に止まり見下せば

(こずえにとまりみくだせば)

囀り侮辱し罵倒する

(あざけりぶじょくしばとうする)

地に這う虫よ無様な餌よ

(ちにはうむしよぶざまなえさよ)

明日は俺の餌になる

(あしたはおれのえさになる)

せいぜい必死に生きるがいいさ

(せいぜいひっしにいきるがいいさ)

陰惨凄惨降参さん

(いんさんせいさんこうさんさん)

この世に生きる価値なしか
（このよにいきるかちなしか）
わたしゃこの世の餌にもならぬ
（わたしゃこのよのえさにもならぬ）
傷物罪人出来損ない
（きずものざいにんできそこない）

社会不適合者は、笑われながら幕を閉じたほうが、最後まで人は喜劇役者と見てくれるでしょう。

長らく笑い続けて、笑う気持ちも消え去ったとき、もう自分の中にはひとつの感情も残ってはいませんでした。

風よりも、もっと刹那でした。これが、「虚無」なのでしょう。

もし時間という目に見えない粒のようなものが流れているのなら、そこへ完全に溶け込んでいったような気持ちです。

一切は虚無と刹那の狭間に隙間なく落ちていきました。

死も、間近になりました。

もはや自分には人間的欲望が微塵も残っていません。

すべてが流れるままに過ぎていきます。

今年で二十八になります。皆、私の姿に気味悪がって、近づこうともしません。

ホテルの一室で読み終えたノートを閉じて私は深いため息をついていた。

気分が悶々としてどうしていいのかわからず、なんとも言えない気分になっていた。

彼の告白を読んでも、どうして石田さんがこうなったのか私には理解しかねるところがあった。

狂人、と言ってもいい内容だった。

石田さんに会ったことがない人は、ただ気が狂っていった人間の記録にしか読めないかもしれない。

死の予感さえも彼は感じさせなかったが、私と出会っていた頃にはもうすでに死ぬことを考えていたのだろう。

たとえ彼の事情を知っていたとして、私が何か力になれたのだろうか。

いや、できなかったし、力にならなかつたろう。そんな気にもならないし、同情もしなかつたかもしれない。

私は私で当時は精一杯だったし、もしこの内容のことを告白でもされたら戸惑うだけだっただろう。

彼の言葉を信じてきた自分が急に馬鹿らしく思えてくるが、しかし彼がきっかけで私が変わったのは事実だ。

とても複雑な気持ちで閉じたノートをいつまでも眺めていた。

どう、ノートの内容を受け止めればいいのかわからなかつた。

ホテルのバーがすでに閉まっていたので、近くのコンビニで缶ビールを二本ほど買って、ぐいぐいと一本目を空けて二本目はちびりちびりとやりながら呆然としていた。

本当に死んだのだろうか。

もしかしたら彼だけひょっこり生きているのではないだろうか。

生きていたとして、彼にどう声をかければいいのか。

きっと、以前のように話せないだろう。

ちらりと、「死んでよかったのかもしれない」と思って「なんてことを自分は考えているのだ」と浮かんだ考えをすぐさま消した。

考えてもしょうがないことをいつまでも考えても時間の無駄だと思い缶ビールの残りを飲み干して寝ることにした。

次の日、Yさんにノートを返しに行った。

「わざわざ、彼のためにこちらまでいらしたんですか？」

と聞きながら、昨日と同じように快く家へと上げてくれた。

「いえ、親戚がこちらにいるものですから、そのついででもあるんです。漁業をやっておりまして、この時期になるとおいしい魚介類を分けてくれるのですよ。釣りをやるものですから、毎年連休を利用してこちらへはちょくちょく来てますよ」

家に上がると、男性が丁寧にお辞儀をしながら私に挨拶をしてきた。

名前を言いながら、Yさんの彼氏なのだとして自己紹介をすると、Yさんは照れながら、

「驚かせてごめんなさい。彼氏というか、今度、結婚するんです」

「それはおめでとうございます」

私の言葉に、二人とも同じように照れていた。初対面だったが、一目で「よく似ているカップルだな」と思い、きっと幸せな結婚ができるだろうなと直感的に思った。

「総二さんのことで尋ねてきたと彼に話したら、今日急に来て」

男性はYさんを優しく見ながら、私に向き直り、

「私は彼とは会ったことはないんですが、彼には感謝しているんです。彼女が死ななかつたから、僕たちはこうして結婚できるんです。彼がいなかったら、彼女は死んでいたかもしれないんです。だから、知っている人に少しでも彼の話を知りたいと思ひまして。急にですから、ご迷惑でしたら、席を外します」

「ああ、いえいえ、いいですよ」と私は頭を被りながら、「なるほど、彼のような考え方もあるのだな」と感心していた。その時は、ノートを読んだショックから石田さんへの印象も少々複雑なものになっていて、一夜明けただけでは整理しきれず石田さんが言ってくれた大事な言葉も忘れていた。

「と言っても、私も、あまり...知らないんですよ。このノートを読んで、今でもちょっと戸惑っているんです。私が知っているのは、バーで会っていた石田さんだけだから」

「それでいいんです」

彼は私ににっこりと微笑んだ。前向きな人なのだろうなという印象を持った。

Yさんが思い出したように席を立ち部屋の奥から小さな冊子を持って私に見せた。

「あの、これ、一緒に入っていたんですけど、お渡しするの、忘れちゃったんです」

そう言って私に手渡してくれたのは、「おたより」と書かれた冊子だった。

「きく、いしだそうじ、と書いてありますね」

「幼稚園の頃の手帳です」

「拝見いたします」

まるで昨日まで使っていたように、綺麗な状態だった。

あとがき 2

その手帳の中には、毎月先生からのコメントが入っていて、私は目を奪われるようにして読んだ。

4月

いつも帰りのタンバリン打ちには総二ちゃんのジャンプ力を見せています。「すごいね」の言葉に、また元気を出して挑戦しようとする気持ちが大切だと思います。

5月

体力づくりの時暑くなって服を脱いだのですが、一枚ずつきちんとたたんで置いていました。そういう習慣が身についているのですね。そのあと総二君は汗をかくまで思いっきり走りまわって楽しんでいました。

6月

先日、給食お当番になった時、総二ちゃんは椅子を運んだりテーブルをふきんできれいに拭いたり、一生懸命頑張っていました。責任感を持って自分はお当番だからやらなければ！という態度は立派でした。

7月

制作意欲もでてきたように思います。ちっぽけな素材が総二ちゃんの力でまわりのお友達が“わあーすごい！”とびっくりすることがあります。きっとアイデアがいいんですね。砂場でも水を出しすぎているのを見てすぐ止めてくれたりします。きっと水道メーターのことを思い出したんですね。

8月

鈴木裕さんと園庭のジャングルジムのところで「俺の家は円山公園の近くだよ」と教えている姿を見ました。朝早く来た時に、すず虫が鳴いているのを聞いて、園長先生のところまで知らせにきていました。羽が大きくひらいていたよと話している総二ちゃんでした。

9月

最近はいつも男の子の友達4，5人とかたまってグループで遊ぶことが多いです。友だちが喧嘩を始めると総二ちゃんは仲裁に入り「どうしたの」と両方の言い分を聞いてあげている姿には本当に感心させられます。

10月

普段は登り棒とか雲梯が大好きでそこで元気に遊んでいます。みんなでやっこさんをして遊んでいて、輝明ちゃんたちが「一緒にやろう。入ってよ！」と言ったら、総二ちゃんもニコニコして仲間に加わりました。足をかけるのもすぐ覚えケンケンも長く続き、運動神経はやはり良いと、改めて感じました。

11月

今では友だちの中で遊んでいるのですが、普通で総二ちゃんを見つけるのに苦労するぐらいです。輝明ちゃんたちとマットベンチを組み合わせたの基地づくりでは大きな声を出してこうやって作ろうと相談しています。また、何気ないところで優しさを見せてくれる総二ちゃん。総二ちゃんらしさを大切にしたいです。

12月

菊組の男の子の一人がおかたづけをさぼって隠れていました。総二ちゃんは真剣に話し合いに参加し「それはずるいと思うよ」とおこるのではなく、優しく、教えてあげていました。大人はすぐ注意してしまいがちですが、総二ちゃん言葉でその子は素直におかたづけをしはじめました。総二ちゃんの優しさのおかげですね。

1月

少しお休みが続きましたが幼稚園にでてきた総二ちゃんは元気一杯です。菊組の部屋で椅子と積み木をうまく組み合わせ基地づくりを楽しんでいました。並ばない子がいたら「○○くん並ぶぞ」と誘ってあげていました。

2月

お友達が泣いていたり、じっと座り込んでいたりすると、そのそばにいて、じっと見守ってあげている、優しい総二くんの姿が頻繁に見られ、うれしく思っています。その総二ちゃんの優しさが、お友達を引きつけているのでしょうか。これからも失っていかないように大切にしたいと思います。

3月

2年間の総二ちゃんを思い出しています。1対1ではいろいろな事を話してくれたのですが、集団になると何も話してくれず、自分からその輪を離れ、一緒に遊ぼうとはしませんでした。でも、年長になってからはその殻を破り、総二ちゃんの本래の姿が顔を出してくれました。

これからは小学生。きっと総二ちゃんらしさを精一杯発揮してくれると信じています。

“小学一年生おめでとう”

海原

そうじちゃん。

そつぎょうおめでとう！！

きょとんとしたためのそうじちゃんのかわかったことがわすれられません。ともだちのこともよくかんがえてくれたよね。

しょうがっこうへいっても げんきにがんばってください
かしわざきようこせんせいより

「これは…」

(これはなんだ...)

正直、全身が震え上がるほどの衝撃とともに絶句していた。

私は幼稚園手帳を開いたまま安心して固まっていた。

「あの、大丈夫でしょうか」

Yさんの言葉に、はっと気がつき、

「ああ、大丈夫です」

と言って笑顔を作るので精一杯だった。

混乱していた。

どうしてもノートと石田さんと重ならない。私が出会っていた頃の石田さんとも違う。自分の子供の頃は？いや、もう覚えていない。誰もこんな自分がいたのだろうか。あるのだとしたら、あったとしても、もう忘れてしまっている。

深いため息が出て、妙に重たい気分になりかけたが、出してくれた磯辺餅を長々と噛んで、お茶で流し込むと、少しは気分を持ち直すことが出来た。

Yさんは寂しそうに俯き言った。

「きっと、優しすぎるから、全部背負っちゃったんです。それで、どうしようもなくなって...」

なぜか、私は少々苛立ちを感じてYさんにぶつけてしまった。

「しかし、あなたは石田さんとほとんど会ったこともないし、実生活の彼を何も知らなかったのでしょうか？どうしてそこまで言えるんですか？」

ふっと悲しそうな顔を見せたYさんに、「これは言い過ぎてしまったかな」と思った。

Yさんは彼の手をぎゅっと握りながら私の目をじっと見つめて言った。

「でも、私にとっては、とてもいい人でした。神様みたいな、いい人でした」

「そうですか」

それしか言えなかった。妙に重たいため息が長々と出た。

私にとっての石田さんはどんな人だっただろう。人当たりが良くて、希望を淡々と語っていた。少なくとも接していた時は楽しかった。それは人の裏側まで知る必要性がないから深く干渉もせず表面上だけで付き合えたからなのだろうか。

このノートが何かの役に立つかもしれないと思い、私は早朝に起きてせっせとコンビニでコピーを取っていた。

「これ、どうもありがとうございました。もうコピーを取ったので、お返ししたしますね」

鞆の中からノートを取り出して彼女へ返そうとした時、ノートの中からはらりと紙が落ちてきた。

なにかと思い紙をめくって拾い見た時、ようやくはっきりとした感情が浮き出て、ひどく憤りを感じた。

それは写真だった。小学校の制服だろうか、ランドセルを背負った利発そうでさわやかな子供が純粋な笑顔と汚れのない清純さを称えて写っていた。

先ほどの幼稚園手帳を思い出しながら、私は幸せそうな一人の子供の姿に思わず胸を詰まらせそうになった。

そしてひとつの思いを抱いたのだった。

この子供にはたして罪はあるのか、と。